

奈良学園大学  
ティーチングポートフォリオ  
(人間教育学部人間教育学科)

令和7（2025）年度



## 目 次

人間教育学科	氏名	掲載ページ
1 教授、学部長	根岸 章	2
2 教授、学科長	岡村 季光	3
3 教授、学生支援センター長	松井 典夫	5
4 特任教授	長谷川 栄子	8
5 特任教授	青山 雅哉	11
6 特任教授	大西 雅博	12
7 教授	高岡 昌子	13
9 教授	中島 栄之介	15
11 特任教授	山中 矢展	17
13 准教授	岡野 聡子	19
14 准教授	岡野 由美子	22
15 准教授	岡本 恵太	24
16 准教授	鍵本 有理	29
17 准教授	川端 咲子	32
18 准教授	高橋 千香子	34
19 准教授	田原 喜宏	36
20 准教授、キャリアセンター長	富山 敦史	37
21 准教授	西江 なお子	41
22 准教授	林 悠子	44
24 准教授	松岡 克典	45
25 准教授	森瀬 智子	47
26 准教授	山田 明広	52
27 准教授	Ochante Carlos	54
28 准教授	田中 紀子	67
31 講師	太田 雄久	69
32 講師	中田 浩司	71
33 講師	間井谷 容代	75

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	根岸 章
<b>1. 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当授業科目(すべて) 「解析学基礎」、「解析学A(テーラー展開)」、「解析学B(複素関数)」、「解析学I(ルベグ積分)」、「人間教育学ゼミナールII(応用)」、「人間教育実践力開発演習IV」、「教職実践演習」 「解析学II(関数解析)」、「応用数学III(微分方程式)」は履修者0のため不開講</li> <li>・各種学生支援 学科長として、開発演習全体の統括を行う。</li> </ul>			
<b>2. 教育の理念・目的 (なぜやっているか：教育目標)</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自らの教育理念と目的：学科長としては、どの専修の学生であっても分け隔てなく扱うことを心掛けた。 数学専修の教員としては、本学の教育理念に掲げられた「実践力を持った人材」を育成するため、日々の学習を通じて数学の広範な分野における確かな知識と、これを生徒に的確に伝えるための教育スキルを習得し、熱意と公正さを持った生徒指導が行える中学・高校の数学科教員を養成することを意識して、日々の授業を行った。</li> <li>・価値観・信念：夢をかなえる結果より、過程の方が大切だと信じています。 数学の教員になるうえで大切なのは、定理や公式を覚えさせることではなく、その意味を感覚的につかませることである。</li> </ul>			
<b>3. 教育の方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生との接し方：専修毎の違いを意識しつつ、個々の学生の個性を尊重した接し方をする。</li> <li>・授業の工夫(授業の方法、内容等)：Active Academyでの授業資料の配布を早めに行うようにした。それによって、予習を行う学生への便を図った。 課題提出の状況を一問ごとに表にしたExcelファイルを作成し、授業開始時に学生と共有するようにした。</li> </ul>			
<b>4. 教育の成果 (どうだったか：結果と評価)</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・達成できたこと、できなかったこと(達成レベル)：課題提出の状況を一問ごとに表示することについては、個々の学生が自分の提出状況を確認できるようになるなどの効果があった。教員側でも提出状況の悪い学生がすぐに把握でき、指導がしやすくなった。</li> <li>・授業アンケートの結果：「解析学A(テーラー展開)」および「解析学B(複素関数)」のアンケート結果については、全体平均よりも悪く、昨年度の自己の結果よりも悪くなっていた。</li> </ul>			
<b>5. 今後の目標 (これからどうするか)</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・短期的・長期的目標：来年度に向けての短期目標としては、授業アンケートの結果をよくするため、普段から学生の授業への意見をよく聞き、できるだけ取り入れるようにしていく。長期的目標としては、一人でも多くの優秀な数学教員を育て、大学・学部の評価を高めていく。</li> </ul>			
<b>・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス、授業評価アンケート等)</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・いくつかの科目についてのシラバス：本学Webサイトにて公開</li> <li>・各種学生支援の内容：開発演習全体での役割については、2024年2月7日人間教育学部定例教授会資料(学外非公開)</li> <li>・研修会や学会への参加状況：今年度、学会への出席はあるが、学会発表は行っていないので、根拠資料はない。</li> <li>・いくつかの科目についての授業アンケート等：本学Webサイトにて公開</li> </ul>			

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	岡村 季光
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>・担当授業科目            発達・教育心理学 [B (中等)], 教育相談の理論と方法 [B (中等)], 子ども家庭支援論, 子どもの理解と援助, 暮らしと地域社会, 基礎ゼミナールⅠ, 人間教育実践力開発演習Ⅰ, 人間教育学ゼミナールⅡ (応用)</p> <p>・各種学生支援            学科長として, 学科内全体のとりまとめを行っている。</p>			
<b>2. 教育の理念・目的</b>			
<p>・自らの教育理念と目的／価値観・信念            何においても「教職に就くための基礎知識の獲得」をしてほしいと考えているのが教育の理念の根底にある。教員採用試験に向けた取り組みというのはもちろんのこと, いわゆる「使える知識」として獲得をしてほしいと願っている。学校教員になるため, というよりもむしろ, 自他の人間理解につなげてほしいという思いも強く感じている。</p> <p>知識の獲得することで, 可搬性 (学習成果を他の学びの機会に役立てるなど, 学びを持ち運べることができる), 活用可能性 (学習成果を必要になった際に役立てる) ができるからである。特に, 近年のアクティブラーニングをはじめとした諸活動において, その活動を支えるのは基礎知識であると考えている。</p> <p>また, 知識同士をつなげて物事を考えるということも目指していきたい。それから多角的な見方が見えてくると考えているからである。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>・学生との接し方            大学生は発達段階において青年期後期という位置づけであり, 成人に達している者という現状から, 学生を“おとな”とみなして関わるということも重要であると考えている。一方, 発達の順序性及び個人差という観点から, 学生の成熟という点においては個別に支援が必要であるケースもあると考えており, 以下に見通しを持って学生の成長を促せばいいかということも常に考える必要がある。</p> <p>・授業の工夫 (授業の方法, 内容等)            学習の定着を図るために, 小テストを毎回行う。            教科書を必ず目を通してもらうため, また専門用語の理解を図るため, 毎回ランダムに受講生を指名し, 教科書を読んでもらう。            授業中で疑問に思ったことや考えたことを外化するため, Web上で小テストを行う際に, 同時に授業のコメントや質問等を必ず入力するように求める。質問に対しては原則次回の冒頭で必ず回答をする。            難解な概念の理解を促すため, たとえ話や既有知識と結び付けて説明を行うように努めている。            授業を聞きっぱなしで終わらせず, 必ず授業内で手を動かすなどの作業を行うため, スライドをそのまま印刷して配付は行わず, 必ず重要な箇所を穴埋め式にして授業中に聞きながら, またはスライドを見ながら記述させるように促している。</p> <p>・FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加            FD/SDに関する情報は積極的に収集している。</p> <p>・自らの専門分野の成長            常に最新の動向をつかむため, 心理学系の学会には毎年必ず参加する。</p>			
<b>4. 教育の成果</b>			
<p>・達成できたこと, できなかったこと (達成レベル)</p> <p>① 授業 (教育活動) でうまくいっているところ            授業評価アンケートで以下の自由記述や数値がみられたこと。            学生からの質問に対して真摯に答えようとしていた／スライドが見やすかった／小テストがあるので, 復習として学習できた／「教員の説明はわかりやすかった」という質問が全科目平均に比して高かった</p> <p>② 授業 (教育活動) の課題            授業評価アンケートで以下の自由記述や数値がみられたこと。</p>			

内容が難しい／説明が長い／スマホを授業中に使わせないことへの不満（すぐに知りたいことを調べられない）／  
「教員の話し方は聞き取りやすかった」という質問が全科目平均に比して低かった

- ・授業アンケートの結果  
各項目について、全体的には、おおむね学内における平均値付近であった。

## 5. 今後の目標

- ・短期的目標  
前年度の結果を受け、特に授業後の復習について充実を図ることを目指す。  
概念の説明を具体的かつ端的に説明できるように心がける。  
教科書は事前に読むように促すが、教科書を読ませる時にも、読めなかったり間違っていたりしても否定せずに教員側でアシストする旨、最初の時間に宣言しておく。
- ・長期的目標  
当該教科における最新の動向も盛り込みながら、授業内容のより一層の充実を図っていく。  
試験問題に教員採用試験で出題される内容・形式に沿って作成し、その正解率を向上させるように授業を構築する。  
授業内で学習内容（得られた知識）の応用がどのように活用できるのかを考えさせる。

### ・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

- ・いくつかの科目についてのシラバス  
本学Webサイトに公開されているシラバスを参照のこと。
- ・各種学生支援の内容  
Active Academyに登録されている指導記録を参照のこと。
- ・研修会や学会への参加状況  
毎年複数回対面またはオンラインの研修会や学会に参加を行っている。
- ・いくつかの科目についての授業アンケート等  
本学Webサイトに公開されている授業評価アンケートを参照のこと。

学部・学科	人間教育学部	氏名	松井典夫
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>○ 担当授業科目                      教育課程論A（初等）／教育課程論B（中等）／図工科指導法／                      ／現代教育課題C（学校と安全）／特別活動及び総合的な学習の時間の指導法A／教育実習事前事後指導（幼小）／教育実習（小）                      ／教職実践演習</p> <p>○ 各種学生支援                      ・ 学生支援センター長としての取り組み                      「多様な学生が共に学べる環境の構築」                      学生支援センター長として、障がいのある学生や、修学に困難を抱える学生への「合理的配慮」の取り組みを推進した。また、教員の困りごとを体系的に学ぶ研修会を実施し、学生の合理的配慮への架け橋となるように取り組んだ。これにより、学生が学習機会を損なわないためのセーフティネットを強化した。</p> <p>・ FD・SD委員会委員長としての取り組み                      教職協働による大学運営力の強化 教育の質向上には教員と職員の共通理解が不可欠であるとの信念のもと、FDとSDの合同研修を積極的に推し進めた。「合理的配慮」や「生成AIの教育利用」など、教職双方が関わる今日的なテーマを設定し、職種の垣根を越えたディスカッションの場を創出した。</p> <p>・ 硬式野球部部長としての取り組み                      退部者が多いことから、選手のミーティングの機会に講話し、退部、退学の阻止、緩和を心がけた。監督とコミュニケーションをとり、より良い学生生活が第一であるという共通認識を強化した。その結果、7年ぶりの全国大会出場を果たすことができた。</p>			
<b>2. 教育の理念・目的</b>			
<p>○ 自らの教育理念と目的                      これからの教員に必要な資質とは、「ローカルな現場に立ちながら、グローバルな視野で物事を俯瞰する力（Glocal Perspective）」であると考えている。知識を伝達するだけでなく、異なる文化や価値観を持つ他者と協働し、多様性を力に変えることができる人材こそが、次世代の子どもたちを導くことができると考える。そこで「多様な背景を持つ子どもたちを受け入れ、複雑な社会課題に向き合う力を育てる教員」を育成するという理念のもとで大学での教育活動、研究を推進する。</p> <p>○ この理念を支える信念と価値</p> <p>① 多様性を「課題」ではなく「資源」と捉える(Diversity as a Resource)                      教室内の多様な意見、背景、時には対立さえも、学びを深めるための不可欠な「資源」であるという価値観を学生と共有し、学びに変える。異質な他者との遭遇こそが、既存の価値観を揺さぶり（アンラーニング）、新たな知見を生む源泉であるという多様なものの見方を育みたい。</p> <p>② 「正解のない問い」に向き合う誠実さ(Integrity in Complexity)                      VUCAと称される時代の中で、複雑な社会課題に対して、安易な解決策や単純な二項対立に逃げず、複雑なものを複雑なまま引き受け、考え続ける態度（Uncertainty Tolerance）を育成したい。「教える側が正解を持っている」という権威性を手放し、共に問い続ける姿勢を大切にすることができる教育者としての態度、資質を育みたい。</p> <p>③ 公正（Equity）への感度(Sensitivity to Equity)                      平等（Equality：全員に同じものを）ではなく、公正（Equity：個々のニーズに応じた支援）を志向する関心、感覚を育む。見えにくい障壁や構造的な不平等を察知し、すべての学習者が尊厳を持って学べる環境を作ることへの責任感を重視することができる教育者として資質形成を目指していく。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			

以上で述べた教育理念「多様な背景を受け入れ、複雑な社会課題に向き合う教員の育成」を実現するために、以下の3つの視点に基づいて授業を設計・運営する。

#### 1. 多様性を「資源」とする協働的な学びの場(Diversity as a Resource)

学生自身の多様な経験や価値観を「学びの阻害要因」ではなく、相互理解を深めるための「最大の教材」として活用している。

例えばグループワークでは、意図的なグループ編成と対話のデザインを心がけ、あえて異なる背景や意見を持つ学生が混在するよう構成する。単なる仲良しグループでの話し合いを避け、異なる視点(例:部活生、教員志望、公務員志望、民間志望など)が交錯する中で、自分の当たり前が通用しない経験(葛藤)を意図的に作り出すことができる空間を演出する。

また、学生個々のライフストーリーを共有する場面を設定することにより、「他者を知ること」から心理的安全性を醸成し、誰の発言も否定されない土壌を作った上で、深いディスカッションへと接続することができるようにしている。

#### 2. 「正解のない問い」に挑むケースメソッドとPBL(Integrity in Complexity)

現実の教育現場で起こる問題には、唯一絶対の正解がない。安易な解決策(ハウツー)に逃げず、複雑な状況を多角的に分析し続ける思考体力を養いたい。四股で、以下の方法を授業に取り入れている。

ジレンマを含むケーススタディ:「ルールを守らせるべきか、事情を汲んで特例を認めるべきか」といった、教育現場で頻発するジレンマ事例(ケース)を使用する。あるいは、命の選択場面を定時し、ディスカッションするなかで命の尊さ、重さに気づく感性を育む。

プロセス重視のリフレクション:評価においては「正しい答えが出せたか」ではなく、「どれだけ深く悩み、視点を広げ、自身の考えを更新できたか」という思考のプロセスを重視している。毎回の授業後にリアクションペーパー(省察ログ)を書かせ、自身の思考の変容をメタ認知させることを重視している。

#### 3. 公正(Equity)を体現するユニバーサルデザイン授業(Sensitivity to Equity)

「公正で多様性を認める社会を作る教員」を育てるためには、まず私自身の授業が「公正」でなければならないと考える。以下のように、インクルーシブ教育のモデルとなる授業環境を整備することを心がけている。

授業のユニバーサルデザイン化(UDL):スライドのフォント(UDフォントの使用)や配色(カラーユニバーサルデザイン)、資料のデジタル配布など、視覚的・物理的なバリアを取り除く工夫を徹底している。これらを学生に明示的に説明することで、将来彼らが教壇に立った際の具体的なロールモデルを示すことが重要であると考え、実践している。

「隠れたカリキュラム」の批評的検討:学校現場や教材の中に潜むジェンダーバイアスや文化的な偏りを分析する課題を課している。とくに総合的な学習の時間の指導法ではSDGsの理念を用いて授業設計し、見過ごされがちな不平等の構造に気づく「感度(レンズ)」を磨くトレーニングを、講義全体を通じて反復するようにしている。

## 4. 教育の成果

教育活動の成果について、学生が単に知識を獲得したかどうかではなく、「価値観の変容」と「行動の変化」の側面から評価する。

#### 1. 学生の意識変容(定性的成果)

～多様性と複雑さへの態度の変化～

授業終了後のリアクションペーパーや、最終レポートの記述分析からは、学生が「正解主義」から脱却し、多様性を肯定的に捉え直すプロセス(アンラーニング)が確認できた。

多様性の受容の側面

(学生の声の例)「当初は自分と異なる意見に戸惑ったが、グループワークを重ねる中で、反対意見こそが自分の考えを深めるヒントになると気づいた。自分の中にあった『良い生徒像』の偏りに気づくことができた。」

複雑さへの耐性の側面

(学生の声の例)「この授業ではすぐに答えが出ない課題ばかりで苦しかった。しかし、実習先で子供の問題行動に直面した際、安易に叱るのではなく『背景に何があるのか』を粘り強く考える習慣がついている自分に気づいた。」

これらの記述は、「正解のない問いに向き合う誠実さ」が学生に浸透していることを示していると評価できる。

#### 2. 学習成果の可視化(客観的成果)

～公正な視点の獲得～

学生が作成した指導案やレポートを、独自に作成した「多様性対応ルーブリック」を用いて評価した結果、年次進行とともに視点の広がりが確認されている。

指導案の変化:初期の指導案では「平均的な子供」のみを想定した画一的な計画が目立ちましたが、学期末には「日本語指導が必要な子供」や「視覚優位・聴覚優位な子供」など、具体的なマイノリティの存在を前提としたユニバーサルな授業設計ができる学生が増えてきた。

課題発見能力の向上:ケーススタディの分析レポートにおいて、個人の資質に帰結させるのではなく、学校システムや環境要因(隠れたカリキュラム)に言及できる学生が増加した。これは「公正(Equity)への感度」が高まったと評価できる。

#### 3. 授業評価アンケートによる評価

「授業のおもしろさ」に関連する評価は高い評価を得た。しかし、授業前後の学習時間が必要かどうかという評価については、多くの学生がそれを必要としなかった。授業ポリシーとしては受け入れられる結果だが、科目の合理性を鑑みると授業時間外の学習を必要とするカリキュラム設計が必要である。

#### 4. 卒業後の活躍(長期的成果)

ゼミ出身者や指導学生の多くが、過疎地教育、特別支援教育、外国人児童生徒支援、開発途上国支援など、高い専門性と包摂的な視点が求められる現場をあえて志望し、教員として活躍している。

## 5. 今後の目標

短期目標（今後1～2年）：実践の「可視化」と「還流」

～個人の実践から組織の知見へ～

現在、定性的な記述（リアクションペーパー）に頼っている「公正への感度」や「対話力」といった非認知能力の評価について、より客観的な指標を開発したい。具体的には、学生の自己評価と他者評価を統合したデジタル・ループリックを導入し、4年間の成長プロセスを可視化する仕組みを整えたいと考えている。

・学生支援データの教育への還流（センター長として）

学生支援センターに寄せられる相談データ（悩みや躓きの傾向）を、個人情報保護の上で分析し、カリキュラム改善に活かす「フィードバック・ループ」を構築します。「学生がどこで躓いているか」というリアルな情報をFD研修で共有し、ドロップアウトを未然に防ぐ授業設計を全学に広げたいと考えている。

・「インクルーシブ教育」FDの必修化（FD委員長として）

教職員向けのダイバーシティ研修を、単発のイベントから、より体系的なプログラムへと昇華させたい。また、多くあるアンケート調査を合理化、体系化し、システムのスリム化を図ることが肝要かつ急がれる。

長期目標（今後5～10年）：教育文化の「醸成」と「発信」

～キャンパスからグローバルな社会へ～

「Well-being」を基盤とした学習コミュニティの構築

現在、JICA草の根技術協力事業（支援型）において、私がプロジェクトマネージャーを担う事業「ブノンベンにおける学校コミュニティへの安全教育導入プロジェクト」が採択され、実施に向けて準備を進めている（2026年3月～実施予定）。今後、このプロジェクトにおいて本学の学生がボランティアとして活動し、開発途上国の教育課題に関心を持ち、国際協力の舞台に立つことは、大きな価値を持つ。また、大学としてこの事業を広報的に主体的に取り扱うことによって、これから入学しようとする将来の教育、および医療の従事者に大きな関心と呼ぶものとする。このJICA事業への取り組みは、今後の本学の国際共修（COIL）の可能性をも示唆するものであり、2026年度以降、短期的、長期的に推進を強化していきたい。

結び：学び続ける教育者として

私は、学生たちに「多様な他者と共に学び続けること」そして、「学びに向かう態度」を求めています。だからこそ、私自身が最も熱心な学習者であり、研究者であり続けたいと考えます。目の前の学生の声に耳を傾け、自身の教育観を常に問い直し、変わり続ける社会の要請に応える「多様性とグローバルパースペクティブを包摂した開かれた教育」を追求し続けることを、改めて自己に強く認識します。

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	長谷川栄子
<b>1. 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)</b>			
<p>(1) 担当授業科目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校経営と学校図書館 ・学校図書館メディアの構成 ・学習指導と学校図書館 ・読書と豊かな人間性</li> <li>・人間教育学ゼミナール(基礎) ・人間教育実践力開発演習Ⅲ ・教育実習事前事後指導(中・高) ・国語科教育法Ⅰ ・教職実践演習(中・高) ・文学</li> </ul> <p>(2) 各種学生支援</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリアセンター長としてキャリアセンター室長とともに教員採用試験、国家試験、就職支援についてキャリアセンターの運営に携わった。</li> <li>・教採対策部会のまとめ役として、教採合格率UPをめざして、学部教員の協力の下、夏期教採対策講座、春期教採対策講座、バトンをつなぐ会などを企画運営した。</li> <li>・中等国語専修長として、専修内の取りまとめを行った。</li> <li>・オフィスアワー：勤務時間内(8:30~16:30)で研修日と授業時間以外随時</li> </ul>			
<b>2. 教育の理念・目的 (なぜやっているか：教育目標)</b>			
<p>(1) 自らの教育理念</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人の支えになる人や教員を目指す学生を支援するため、実務経験を活かし、他者への思いやりを忘れず、生涯にわたって学び続ける人材を育成する。中等国語専修の一員として教職員と連携し、粘り強く前向きな姿勢で職務に取り組む。</li> </ul> <p>(2) 価値観・信念</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・国語科教師として、言葉による表現や思考する楽しさを学生が味わえるよう授業を実践すること。</li> </ul>			
<b>3. 教育の方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)</b>			
<p>(1) 学生との接し方</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・先に挨拶の声を掛けたり、自己開示をしたりしながら人間関係づくりを図る。リフレクションシートから授業中の努力を認めると共に、授業態度や提出物の提出状況から学生の困り感を推察し、相談に乗る。・教職の経験を伝え、教員の魅力ややりがい伝えていく。以上の3点を心掛けている。</li> </ul> <p>(2) 授業の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・主体的な学修にするために、授業内容や目標を明示し、学生に見通しをもたせて取り組ませている。また、リフレクションシートの内容を毎時間交流して各自の努力を認め、他者からの学びを自覚させている。</li> <li>・対話的な学修にするために、自己学修や演習の時間を設定した後にグループでの交流を行い、全体報告し、考えを共有する時間を設定している。多様な言語活動を行い、テキスト、自己、他者との対話が図られるようにした。</li> <li>・深い学びをめざして、授業で扱ったテーマについてさらに文献で調べ、レポートを書いて自分の考えを表現させるようにしている。また、記述力を向上させるためのポイントを示し、レポートが書けるように配慮した。レポートやリフレクション等に対してコメントを付け、個人的にも双方向のやり取りを行っている。そして、授業の事前事後に授業テーマに関連する参考資料を読むことを推奨している。</li> <li>・学校図書館司書教諭の資格に関する授業では、大学図書館の展示コーナーを10月と1月に制作し、大学図書館経営に参画させ、協働して学ばせた。</li> </ul> <p>(3) 内外の研修会への参加</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学内における研修会には、欠かさず参加し、自己研鑽を図った。</li> <li>・学外の研究会において、国語科におけるICTを活用した効果的な指導法を研究している。</li> <li>・読解力向上に向けての学習指導法について研究している。</li> </ul> <p>(4) 専門分野における成長</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・諸論文を参考にし、昨年度より授業内容を深め、多角的な視点から講義できるよう努力している。</li> </ul>			
<b>4. 教育の成果 (どうだったか：結果と評価)</b>			
<p>(1) 成果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業で学生に模擬授業させる場合には、事前指導を重ね、実践させることによって、学生は授業を実践した達成感を味わっている。授業参観の視点を明確にし、批評会を重ねることを通して、学生たちは、相互に学び合い、授業力が向上した自己を発見していた。</li> <li>・教員採用試験対策として、2年次生に対して3年次チャレンジ受験を勧め、新規に2年次生の春期教採対策講座を企画運営し、教職教養、面接入門、小論文記述・推敲の講座を担当し、対策準備を進めた。</li> <li>・学校図書館司書教諭を目指す学生は、実践的な読書活動や実務の体験を通して、改めて読書の楽しさを感じ、自己の読書法を見つめ直すきっかけになった。また、実践の不安の解消を図られた。そして、10月と1月の大学図書館の展示コーナーの制作を通して、大学図書館経営に参画させ、協働して学ぶ楽しさを味わうことができた。</li> </ul>			

(2) 課題

- ・1時間の講義内容に関して、さらに専門的な知識を得、発展的な学修ができるよう複数の参考資料を提供する。
- ・重要ポイントを押さえたさらにわかりやすい授業内容の説明を目指す。

**5. 今後の目標 (これからどうするか)**

(1) 長期的目標

- ・中等国語専修から教員になる学生を一人でも多く育てられるよう、学生の中学校・高等学校の国語科教育の専門性を深める支援を行うと共に教員採用試験合格に向けた対策を実施する。

(2) 短期的目標

- ・中学校の国語科においてICTを活用した国語科教育法を研究する。
- ・言語活動の効果的な学習指導方法を研究する。

**・ 必要に応じて根拠資料を添付 (シラバス, 授業評価アンケート等)**

(1) シラバス (奈良学園大学Webページ参照)

- ・国語科教育法Ⅰ ・学校経営と学校図書館

(2) 授業アンケート (奈良学園大学Webページ参照)

- ・人間教育実践力開発演習Ⅲ

(3) 学生支援の内容

- ・進路についての相談 (奈良学園大学Active Academy参照) ・レポート作成についての相談・指導 (オフィスアワー)
- ・教育実習における指導案作成についての相談指導 (オフィスアワー) ・教員採用試験対策についての相談・指導 (オフィスアワー)

# 2024年度

# 授業評価アンケート(集計表)

開講年度

2024年度

木曜日1時限

長谷川 栄子

人間教育実践力開発演習Ⅲ

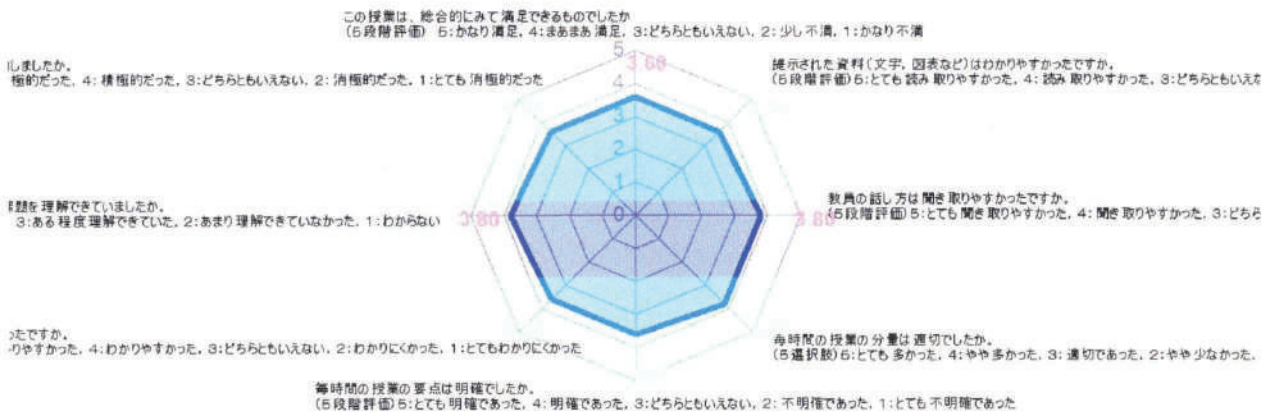
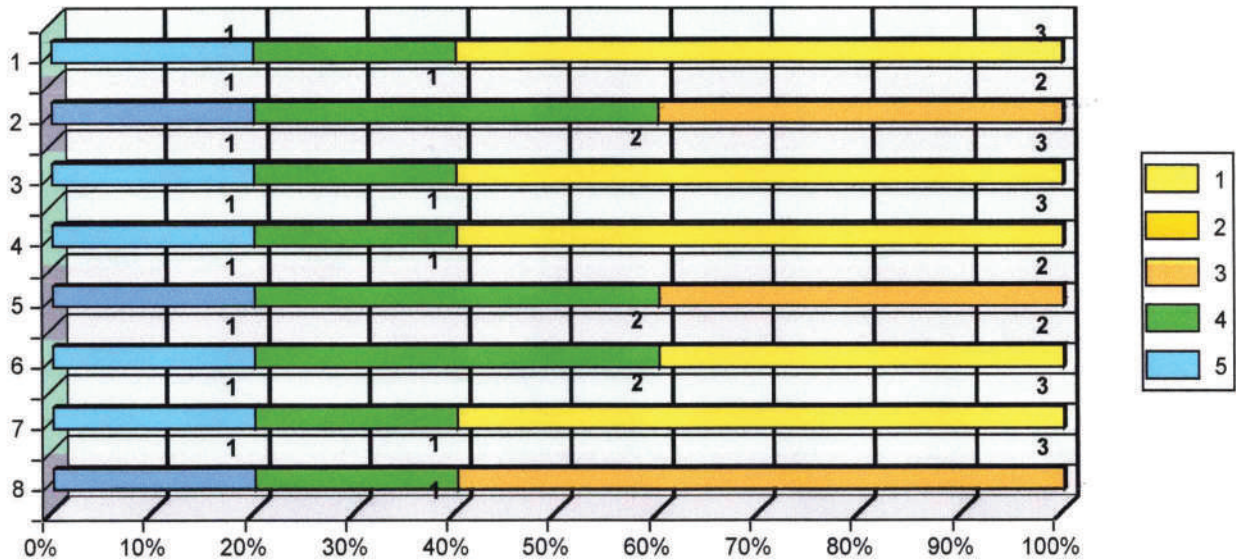
アンケート総数

5枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1
-------	-----	-----	-----	-----	-----

1. この授業に積極的に参加しましたか。
2. この授業で取り組むべき事前事後課題を理解できていましたか。
3. 教員の説明はわかりやすかったですか。
4. 毎時間の授業の要点は明確でしたか。
5. 毎時間の授業の分量は適切でしたか。
6. 教員の話し方は聞き取りやすかったですか。
7. 提示された資料(文字, 図表など)はわかりやすかったですか。
8. この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか

評価	5	4	3	2	1	平均
集計	1	1	3	0	0	3.6
集計	1	2	2	0	0	3.8
集計	1	1	3	0	0	3.6
集計	1	1	3	0	0	3.6
集計	1	2	2	0	0	3.8
集計	1	2	2	0	0	3.8
集計	1	1	3	0	0	3.6
集計	1	1	3	0	0	3.6

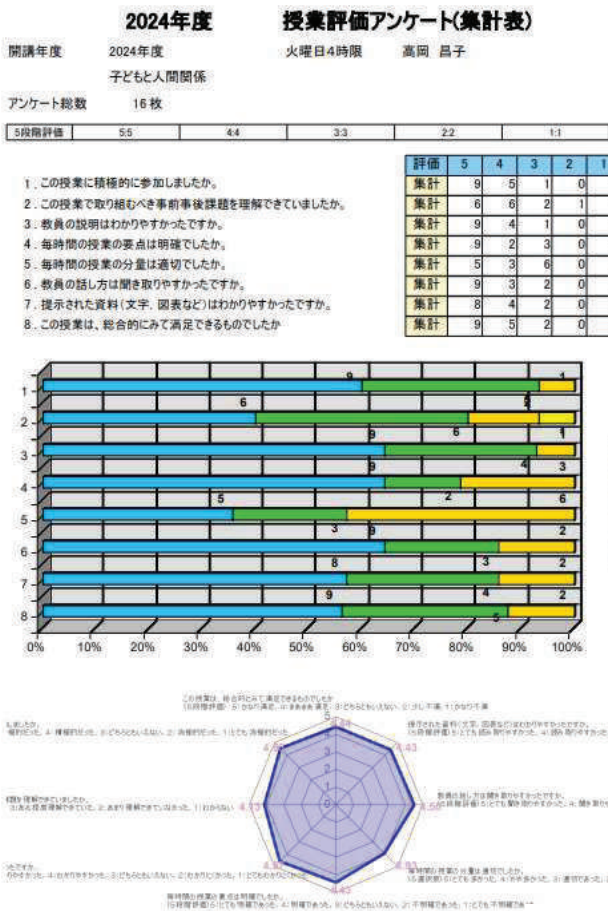


学部・学科	人間教育学部	氏名	青山 雅哉
<b>1. 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)</b>			
<p>担当授業科目 (全て)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・器楽演習Ⅰ (鍵盤楽器) ・器楽演習ⅠA (ピアノ) ・器楽演習ⅡA (ピアノ) ・音楽表現ⅠA (ピアノ・歌)</li> <li>・音楽表現ⅡA (ピアノ・歌) ・キーボードハーモニーⅠ ・キーボードハーモニーⅡ</li> <li>・ソルフェージュⅠ ・ソルフェージュⅡ ・器楽特殊演習ⅠA (ピアノ) ・器楽特殊演習ⅡA (ピアノ) ・人間教育実践力開発演習Ⅱ</li> <li>・器楽合奏Ⅰ (和楽器を含む) ・器楽合奏Ⅱ ・器楽合奏Ⅲ ・器楽合奏Ⅳ</li> </ul> <p>各種学生支援；音楽専修のGTとしての取り組みとしてピアノ演奏の向上を希望する学生に授業以外の時間を設け、ピアノレッスンを行っており、音楽教育者を志望する学生達の能力向上に対する支援をしている。</p>			
<b>2. 教育の理念・目的 (なぜやっているか：教育目標)</b>			
<p>自らの教育理念と目的：総合的な音楽理解と音楽表現力を深め、音楽教育の場における柔軟な教育力、高度な実践力さらに豊かな人間力を身に付けた教育者の養成を目指している。そのため学生個々の理解力や基礎力を考慮し、個々に応じた課題への対応や個別指導のレッスンを授業時間外の時間も利用して行っていく。</p> <p>価値観・信念：音楽の持つ力を信じ、それを伝えていく力が教育となる。</p>			
<b>3. 教育の方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)</b>			
<p>学生との接し方：各学生の性格・個性を尊重した接し方を行う。</p> <p>授業の工夫：器楽演習、音楽表現等の授業ではピアノを中心にした基礎的な演奏や弾き歌いの技術と表現について学生個々の力に応じた指導を行っている。ソルフェージュでは聴音による音への感性を高め、初見演奏での読譜能力向上を目指している。キーボードハーモニーではメロディーへの伴奏付けやコードによる即興演奏により音楽創作への基礎的理解と技術力の獲得を目指している。器楽合奏では実践を通じた気づきを各学生が発表していくことで指導方法への理解を深めるようにしている。器楽特殊演習では音楽演奏の実践を計画し、そのための練習内容を学生達が互いに検討していくことでその効果や指導方法への理解を深め、さらに音楽演奏の実践を通して音楽への総合的な能力の向上を目指している。全ての授業において現場で必要とされる音楽力の育成、向上を目標として毎回授業内容に即した課題を時間外学習として提示し、次回の授業においてその準備を前提にした授業展開を行うことで時間外学習の徹底を図っている。また、音楽専修のGTとしての取り組みとしてピアノ奏法の向上を希望する学生にピアノレッスンを行っている。</p>			
<b>4. 教育の成果 (どうだったか：結果と評価)</b>			
<p>達成できたこと、できなかったこと (達成レベル)：学生個々のレベルや能力に合わせた指導方法により学生各自の学修意欲の向上がみられる。一方、音楽について基礎的理解や技術への修得に大変時間を要す学生には個別に対応してはいるが、その効率的な指導方法や意欲向上への働きかけについては今後の課題としている。</p> <p>授業アンケート結果：全体に平均的な数値であった。個々の要望について耳を傾け、改善を心掛けていく。</p>			
<b>5. 今後の目標 (これからどうするか)</b>			
<p>短期的目標：学生個々のレベルや能力に入学前からの音楽経験上の違いによる開きがあり、共通した教育では一律に学びの機会とはならない面を改善をしていく。そのために学生達が互いに教え取り組んでいく環境を整えていくことで、共通した教育力を身に付けていく機会としていきたい。</p> <p>長期的目標：課題曲のグレード表、成果表を学生の4年間の長期的課題と目標として日頃からの学修 (練習) に各学生に定着させていきたい。</p>			
<b>・ 必要に応じて根拠資料を添付 (シラバス、授業評価アンケート等)</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 器楽演習課題曲グレード表</li> <li>・ 授業成果としての演奏録音</li> <li>・ 音楽表現課題曲成果表</li> </ul>			

奈良学園大学ティーチングポートフォリオ			
学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	大西 雅博
<b>1. 教育の責任</b>			
(1) 担当科目	指揮法、人間教育学ゼミナールI(基礎)、人間教育学ゼミナールI(応用)、基礎ゼミナールII、人間教育実践力開発演習III、音楽表現力演習II、卒業研究、器楽合奏I(和楽器を含む)、器楽合奏II、器楽合奏III、器楽演習IB(管打)、器楽演習IIB(管打)、器楽特殊演習IB(管打)、器楽特殊演習IIB(管打)		
(2) 学生支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マーチングバンド部顧問として、学生の募集活動及び入学後の指導を行うとともに、就職についてもサポートする。</li> <li>・音楽専修長として、専修内をまとめるとともに、より一層の発展を目指し、広報活動・就職活動に力を入れる。</li> <li>・学部運営委員として、各専修との調整を図りながら、学生ファーストの精神の下、運営に取り組む。</li> <li>・学生募集企画部のまとめ役として、学生募集の企画やイベントの開催に取り組む。</li> </ul>		
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>子供たちにとって、先生は新人も熟練も関係なく、全てがプロの教師でなければならない。若い教師にしか出来ないことは多々考えられるが、若いから出来ないという甘えは、教育現場では許されないと考える。失敗が許され、修正が出来るのは、学生である今しかない。より実践的な体験を通して、プロとしての厳しさと自覚を持たせたい。他人の意見を真摯に受け止めるとともに、失敗を素直に認めることにより、自らの成長に役立たせたい。学生だから、これくらい出来れば良いという評価ではなく、社会人としていかに有るべきかを基準に、人間力の向上を目指したい。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>授業においては、実際の現場でどのようなことが起こり得るかを想定しながら、実践的な学修を行っている。人前で話すことに慣れるため、模擬授業はもちろんのこと、様々な場面で意見を述べるよう設定している。また、他人の意見を受け入れる姿勢を養うため、他人から評価される場面も多く作っている。自分も他人のために意見を述べ、自分のために他人の意見を吸収するというサイクルを何回も繰り返すことにより、「話す」ことへの慣れや自信を身に付けさせている。そして「話す」から「伝える」「教える」ことへ発展させるためには、それに裏付けされた「技術」が必要であることに着目させ、自ら高い技術を身につけようとする姿勢を養っている。特に音楽は、実践的な技術が問われる場面が多いため、圧倒的な知識と技術が必要であることを、強く認識させている。まずは先生が生き生きと歌う、そして子供たちがその姿に影響され、歌うことの楽しさを知る。歌わせる技術ではなく、楽しさを伝えるためには、自身の高い技術が必要であることを自覚しなければならない。</p>			
<b>4. 教育の成果</b>			
(1) 達成出来た	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指揮法について、毎回高度な選曲にチャレンジし、自ら進んでより高い水準を目指す意欲が見受けられた。</li> <li>・演奏の機会を多く与えることによって、音楽的技術向上の大切さが理解できたと思われる。</li> <li>・開発演習において、場面指導や模擬授業が苦手であった学生も、徐々に各場面に対する対応能力が高まってきている。</li> <li>・計画通り、ロビーコンサート(2年生)・クリスマスコンサート(2年生)・卒業演奏会(4年生)が開催できた。</li> </ul>		
(2) 達成出来なかった	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽の専門的な知識や技術を幅広く習得することが出来なかった。(音楽史、音楽理論、弾き語り、演奏法等)</li> <li>・教員採用試験が前倒しになっている現状に、学生の意識がついていけなかった。</li> </ul>		
<b>5. 今後の目標</b>			
(1) 短期的目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の向上心を高めるための指導法について、さらに研究する。</li> <li>・授業における課題の出し方や内容について精査し、より効率の良い方法を研究する。</li> <li>・学生一人ひとりのニーズに合わせた指導を実践し、個人の力を高める。</li> </ul>		
(2) 長期的目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幅広い音楽のニーズに応えられる教育環境の整備を進める。</li> <li>・部活動の地域移行が進められている中、教育活動としての部活動の意義を考察する。</li> </ul>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・必要に応じて根拠資料を添付(シラバス、授業評価アンケート等)</li> </ul>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・マーチングバンド部の実績</li> <li>・音楽専修の実績</li> </ul>			

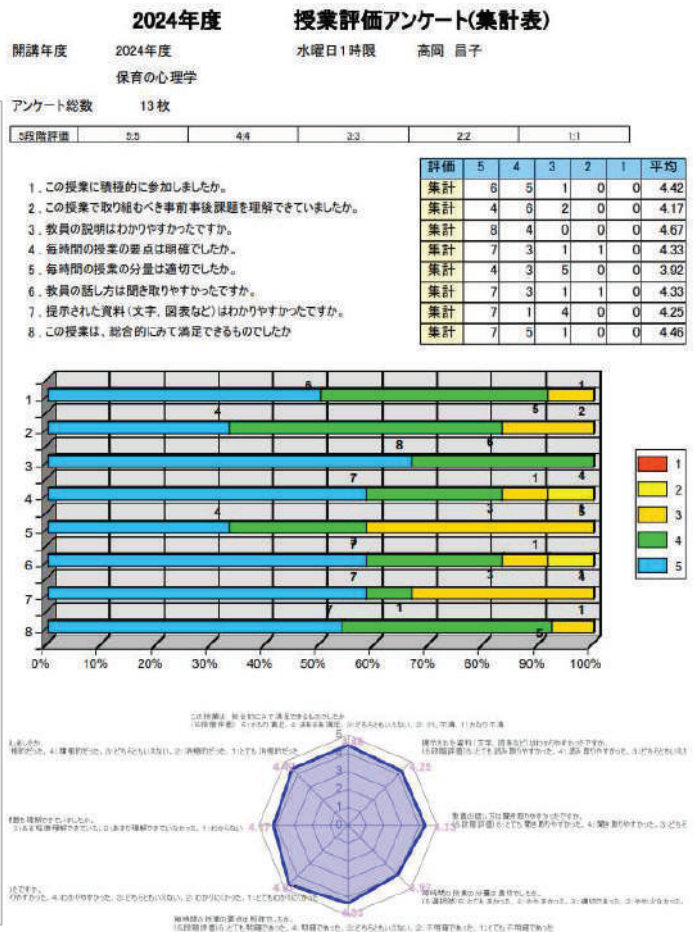
学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	高岡昌子
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>本学の建学の精神である「高度な専門学術知識に裏付けられた実践力を有する有能な人材を教育・養成し、地域社会及び社会全体の発達・発展に貢献する」ということを常に意識して教育活動に携わっている。2024年度に担当する授業科目は、「保育原理」「保育の心理学Ⅰ」「子どもと人間関係」「子どもと人間関係の指導法」「基礎ゼミナールⅡ」等である。これらの担当授業では、どの学生にとっても有益な内容となるように目指して指導を行うように努めている。また私は、本学卒業生が、自分の存在意義を確信し、自己肯定感を持ち、常に多角的に考えて、「人を支える人になる」ことの意義を伝え、社会に貢献していきたいと自ら思って、主体的に行動していくことができるように願って、それらの願いに効果的な教育的関わりができるように努力している。さらに学生たちが幸せな今と未来を生きることができるよう常に学生ファーストで学生に関わっている。</p>			
<b>2. 教育の理念・目的</b>			
<p>私は、「現実立脚した学術の研究と教育を通じて、明日の社会を開く学識と実務能力を兼ね備えた指導的人材の育成を目指し、時代の進展に対応し得る広い視野と創造性をつちかい、誠実にして協調性のある心身ともに豊かでたくましい実践力を持った人材を養成する」という本学の教育理念を重要視しており、子どもをとりまく社会における多様な問題を多角的に捉えて、温かく柔軟に改善していくことのできる保育者・教育者を養成できるように日々努力している。また、本学の使命・目的である「奈良学園大学は、教育基本法及び学校教育法の定めるところに従い、高等学校教育の基礎の上に広く一般教養を授けるとともに、社会に必要な実務能力を備え、自らの目標を達成するための実践力を有する人材を育成するために必要な教育・学術研究の遂行によって、社会の発展に寄与することを目的とする。」ということを中心に意識して、保育者・教育者の養成に携わっている。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「子どもと人間関係」等の授業において、人間関係の領域において効果的な事例を通して学生が討論しあったり、発表しあったりする時間をもつようにして、お互いに意見を受け止め合い、多様性を認め合えるように進めている。</li> <li>・「保育の心理学」等の授業を通して、保育に活用できる心理学の基礎的事項を教科書と視聴覚教材を用いながら伝え、心理学的に興味深い事例を取り上げて、話し合うことで、一人ひとりの人間の心理を理解することの必要性に気付くように進めている。</li> <li>・「保育原理」の授業では、子どもに関わる各法律や条約が作られた経緯について理解を深められるように説明し、現在の保育における基本的事項をおさえ、多角的思考力の必要性に気付くようにアクティブラーニングを取り入れている。</li> <li>・担当する全ての担当授業において、最新のデータや話題を取り入れて教材をつくるように努めている。最新の子どもの関わる社会問題や事故や虐待事件等についても取り上げて、学生自身が考えて意見を言う機会をもつことができるようにしている。</li> </ul>			
<b>4. 教育の成果</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の幸せな人生を願い、一人ひとりの学生が夢を叶えられるために必要な学びをできるように心がけている。例えば、学生が公立の幼稚園やこども園、保育園での就職を目指されている場合には、公立採用試験のWebテスト（SPI3等）においても力を一層発揮できるように意欲向上を目指すところから指導し、公務員採用試験関係の指導を丁寧に行い、一次、二次、三次試験の各段階において実技指導や口頭試問などの指導を行い、全員が各学生自身の志望どおりに合格することができるようにしてきた。</li> <li>・実習にむけて必要な教育を充実させられるように努力してきた甲斐あって、学生の実習日誌等の記述力等、全体的に向上してきたように思われる。また実習で話す「ことば」について考えるように学生に促し、子どもたちを取り巻く人的環境となる保育者としてのコミュニケーションのあり方についても望ましい方向で考えられる学生が増えてきたように感じている。さらに、近年、卒業生の活躍を耳にすることが増えてきた。今後も「多角的に考える力のある温かい社会人」になるように育てていきたい。</li> </ul>			
<b>5. 今後の目標</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業後において社会人そして保育者・教育者として人々のために活躍し続けることのできる人材育成を目指していきたい。</li> <li>・進路に関しては、学生一人ひとりの希望を第一に考えて、常に学生ファーストに関わり、指導をしていきたい。</li> <li>・学生一人ひとりの学生生活が幸せで充実したものになるように常に願って接するように心がけていきたい。</li> <li>・今年度も担当する全ての授業の質を一層向上させて、教材研究等の研究活動も一層行っていきたい。</li> <li>・本学キャンパスにおける教育を効果的に行うための環境改善につながる活動も続けて行っていきたい。</li> </ul>			

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）



主な授業の「子どもと人間関係」の授業では、総合的満足度は4.44で85%以上の学生が満足していると回答していた。特に話し方が聞き取りやすく、説明がわかりやすいということであったが、自己評価的にはまだまだ反省も多く、顎関節の体調によって活舌にも問題があると感じており、さらに体調管理を怠らずに精進して、学生に一層満足していただけるように努力していきたい。本授業は保育者養成課程における幼稚園教諭や保育士等になるために学ぶべき教育の5領域のうちの人間関係の領域の講義科目であるが、保育者になりたいと思っていない学生もいるため、学ぶ意欲を持っていただくことが難しい場合もあり、課題遂行力における差も大きい。今後一層学生の様子や理解度やニーズを把握して工夫していきたい。

「保育の心理学」の授業では、総合的満足度は4.46で90%以上の学生が満足していると回答していた。本授業は保育者養成課程において学ぶべき内容を教える科目であるため、幼稚園教諭や保育士等になるために必要な内容やそれらの採用試験をふまえて必要な内容を含めてきた。しかし保育者になりたいと思っていない学生もいるため、学ぶ意欲を維持していただくことが難しい場合もあり、課題遂行力における差も大きい。今後一層学生の様子や理解度やニーズを把握して工夫していきたい。またプリント中心に授業を行っているため、説明が図から図に移るときに理解しにくいと感じて復習しにくい学生もいるようなので、2025年度においては説明が詳しく順序立てて文章化されている教科書を中心とした授業に変更した。



学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	中島栄之介
<b>1. 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当授業科目 人間教育実践力開発演習Ⅳ 特別支援教育総論、病弱者教育課程論と指導論、肢体不自由者教育課程論と指導論、重度・重複障害者教育課程論と指導論、特別支援、特別支援A(初等)、特別支援B(中等) 特別支援教育実習事前事後指導 現代教育課題B(特別支援) 人間教育学ゼミナールⅠ(基礎)、人間教育学ゼミナールⅡ(応用)、卒業研究 専門職種間連携特論(大学院リハビリテーション研究科)</li> <li>・各種学修支援 キャリアセンター長(令和4年度まで) キャリアセンター長として、教員採用試験、国家試験、就職支援についてキャリアセンターの運営に携わり、学生の希望する進路の実現に向けて組織的・体系的に対応できるように、センター室長と共に各種対策講座、リメディアル講座、模擬試験、相談業務等の連絡調整等を行ってきた。 現在は、キャリアセンター長の経験を活かして個別に学生の支援を行っている。</li> <li>・特別支援教育 特別支援教育担当教員として、特別支援教育に関することや介護等体験についてなどの学修支援を行っている。 また、配慮を要する学生について個別に学修支援を行ってきた。</li> </ul>			
<b>2. 教育の理念・目的 (なぜやっているか：教育目標)</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自らの教育理念と目的 平成19年より始まった特別支援教育を通して「障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となる」人材の育成を目指す。学校現場においては、本学の「人を支える人となる」教員の育成を目指す。 「教育に科学とロマン」という本学のモットーの一つに基づき、最新の特別支援教育の成果を学校現場にいかすことのできる人材を育成する。 ICT機器などを用い、適切な支援機器や支援方法などを活用することのできる人材育成を目指す。</li> <li>・価値観・信念 実務家教員として学校現場の様子を学生に伝えると共に、指導に当たっては科学的根拠に基づき特別支援教育の知識と技能を持った教員養成にあたりと共に学校現場の課題を見据えながら研究を進める。</li> </ul>			
<b>3. 教育の方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生との接し方 多様な進路希望に対応するために、学部生としての必要な技能と知識について機会あるごとにふれるようにしている。 また、将来学校現場で働く(ボランティアを行う)ことについて考えながら現場で最低限必要な知識や技能を念頭に置き学修するように意識させるようにしている。</li> <li>・授業の工夫(授業の方法, 内容等) 【特別支援教育に関する総論等】特別支援教育総論 特別支援・特別支援A(初等)・B(中等)、現代教育課題B(特別支援) 平成19年に特別支援教育が始まり特別支援学校や特別支援学級以外でも特別支援教育に関する知識や技能が求められ必要とされている。そこで、特別支援教育に関する内容だけではなく、「障害」についての考え方、就学前・就学中・卒業後の生活、手帳や年金など各種の制度など幅広く「障害」について取り上げ基礎的な知識、考え方について学修を深めたい。 【特別支援教育の各論】病弱者教育課程論と指導論、肢体不自由者教育課程論と指導論 重度・重複障害者教育課程論と指導論 特別支援教育を進める際には、他職種(福祉・医療・保健・労働・行政等)と連携する必要がある。そのため、特別支援教育に限らず、幅広く他職種の専門家と対等に連携できるようにするための知識も必要である。そこで、各論の内容はもちろん、各論を進めるにあたっての基礎知識にもふれながら授業を進めていきたい。障害特性や支援のニーズに合わせた教育課程の編成についての考え方、視点にもふれながら学修を進めていく。各論においては、現在課題となっている重複障害及び、教育課程編成上必要となるカリキュラムマネジメントについても必ず取り上げるようにする。 【特別支援教育実習】特別支援教育実習事前事後指導 特別支援学校での教育実習を行うにあたり、特別支援教育についての専門性を授業の中でどのようにいかに加えて各教科の専門性をどのようにいかにかを検討しながら、模擬授業を通して授業の在り方、教材研究の進め方、個別の指導などについて演習を行う。 【卒業研究】人間教育学ゼミナールⅠ(基礎) 人間教育学ゼミナールⅡ(応用) 卒業研究 卒業研究では、何らかの形で「障害」と関係することとしている。学生の興味や関心、将来の進路などにより幅広い内容を取り上げることを予定している。そのため、まず基本的な知識や方法を身に付けるため、課題を調べる、研究方法を理解する、論文通読などを行う各回のゼミで</li> </ul>			

は課題と研究の交流について行い学修を進めていく。また、特別支援教育関係の研究室で合同ゼミを実施し研究内容を交流する。

**【大学院】 専門職種間連携特論**

言語聴覚士及び特別支援教育にたずさわる教員としての両立場より、リハビリテーション職とのかかわりを取り上げることを予定している。特に、連携ということ視野に置き、言語聴覚療法、特別支援学校の実際を取り上げ連携の方法について考察していく。

- ・FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加  
学内で開催される研修会に参加し、授業の中に取り入れようとしている。
- ・自らの専門分野の成長  
現在、大学院で専門分野について研究を行っている。  
学会へも発表を行っている他、学会運営に携わっている。  
地域貢献活動として兵庫県言語聴覚士会小児対策部の委員として活動している。

**4. 教育の成果 (どうだったか：結果と評価)**

- ・達成できたこと、できなかったこと (達成レベル)  
教育の方法については、概ね実施することができている。資料についても実際の教科書 (点字等) を提示したり、指文字の体験、点訳の体験などをおこなっている。さらに、アシスティブテクノロジーを中心としてICT機器を操作するなど、体験を多く取り入れるとともに文科省通知などの資料もできるだけ提示するなどすることができた。授業資料については、毎回、スライド資料を準備してきた。ICT機器についても、特別支援教育に必要なアクセシビリティ機能などを中心に体験的することができている。
- ・授業アンケートの結果  
授業アンケートについて、全体の評価を上回っているが、授業外の学習時間に課題がある。そこで、各授業ごとにインターネットなどを利用した課題を作成し実施することで、改善していきたい。

**5. 今後の目標 (これからどうするか)**

- ・短期的  
情報が常に更新されていく分野であるので、スライドや授業資料などに最新の情報や時事の話題を入れていきたい。  
授業時間外での勉強時間を確保するための課題を工夫する。
- ・長期的目標  
自らの研究の成果を授業に取り入れることで、より実践的で学校現場に即した学修をなるようにしたい。
- ・発展的  
本学が地域の特別支援教育の中心となる様な機能 (例えば、特別支援教育センターなど) を有し、地域社会に貢献できるような仕組み作りを行っていきたい。

**・ 必要に応じて根拠資料を添付 (シラバス, 授業評価アンケート等)**

シラバス、授業アンケート (本学HPにて公開)  
キャリアセンターについて (本学HPにて公開)

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	山中 矢展
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>【担当授業科目】                      ・特別支援教育総論 ・特別支援A(初等/中等) ・肢体不自由者の心理・生理・病理 ・病弱者の心理・生理・病理 ・発達障害者の心理                      ・特別支援学校教育実習事前事後指導(特別支援学校教育実習を含む) ・人間教育実践力開発演習Ⅳ ・教職実践演習                      【各種学生支援】 ・教員採用試験対策支援:教採対策部の教採アワーをはじめ、学生が希望する時間帯に、各自治体の教員採用試験の受験に関する相談、面接、模擬授業、場面指導などの指導を行っている。 ・幼稚園、小中学校教諭をめざす学生に、特別支援教育の重要性と課題について、幅広く相談に応じ支援を行っている。 ・担当授業だけでなく、日頃から各学生との信頼関係づくりに努め、学修面や進路に向けた相談等に積極的に応じている。</p>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>【自らの教育理念と目的】                      ・学生自らが学修する意味を肯定的に理解し、自身のキャリアの実現のため、前向きに学ぶことができるよう、指導や支援を行う。                      ・心身の揺らぎを感じる学生には、自分が存在することで、だれかの役に立つことができると実感できるように教育支援を行っていきたい。 ・子どもの多様性を認め、公平性を保ち、いずれの子どもにも良さを見い出し、伸ばしていくことができる教員を養成する。                      ・さまざまな背景のある子どもが、自身が生きていく意味を見い出し、希望を持って明日を迎えることができるよう、力強く後押し、支援ができる教員を養成する。                      【価値観・信念】                      ・教育は教えた子どもから教えられ、保護者から生きざまを学ぶものである。自らが成長を遂げることができるかけがえのない職業である。永らく、教員として管理職として取り組んだ経験から、その意義と価値を伝達していきたい。病気や障害、あるいは生育環境など、自分ではどうすることもできない境遇の中で、たくましく生きる人の姿は、かけがえのない尊さと強さを持つ。                      ・さまざまな背景から、自分に自信をもつことができにくい学生に対して、Well-being の意味と意義を追求しつつ、一人ひとりに粘り強く関わり、伸ばしていくことが、重要である。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>【学生との接し方】                      ・学生が安心できる授業環境、雰囲気づくりを行い、見通しを持って意欲的に取り組めるよう、以下のように接している。                      ・毎時の目標、到達点の明確化⇒各回の授業で、どこまで到達すればよいのかを認識しながら取り組む                      ・パターン化した授業の流れ⇒学生が見通しを持って取り組める                      ・授業資料に、書き込みの欄を設け、学生が直接書き込むことができるようにしている。                      ⇒できるだけ、筆記具を持って書く習慣をつけることで、教員採用試験等への準備も行う。                      【授業の工夫(授業の方法, 内容等)】                      ・わかりやすい授業スライド ⇒ 難しい内容でも、興味関心をもって取り組むことができる。                      ・質問などをその都度できるような雰囲気づくりを行っている。⇒リスタートできる。取り残されない。                      ・Googleフォームで事前に授業資料をアップし、予習しやすいようにしている。                      ⇒予習への動機付け                      ・各回、Googleフォームで簡単な確認テストを行い、試験に役立てることができるようにしている。                      ⇒試験の準備を早くから行うことができるようにする。                      ・特別支援教育の関連領域との連携を保つよう、復習をかねて、他領域(例えば、病弱教育の授業のときに、肢体不自由の内容を復習するなど)の内容を取り扱っている。                      ⇒学生が、関連付けて認識できるようにする。</p>			

<b>4. 教育の成果</b>
<p>【達成できたこと、できなかったこと(達成レベル)】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業スライドがわかりやすいとの記入があった。⇒引き続き、わかりやすく興味をもつことができる授業資料を作成していきたい。</li> <li>・グループディスカッションの時間をとり、内容の発表を行った。発表の際、事前にグループを決めておかないと時間のかかることもあった。学生の自発的な意見発表をどう工夫すればよいか考えている。</li> <li>・毎回の課題を出せなかった学生がいた。⇒再々、課題提出の働きかけをしたが、そのほかに有効な取り組み方を検討する必要がある。</li> </ul> <p>【授業アンケートの結果】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎時の到達点の明確化と学生への理解を図ること</li> <li>・学生の授業外学習 とりわけ、予習にどのように取り組ませるか、具体的に示す。</li> <li>・授業内での振り返りや、復習をする場合、講義の時間を確保するために、どうすれば効率よくできるか検討する。学生の記憶が新しいうちに、振り返りのミニ課題などを速やかに行い提出するにはどのような働きかけが最も有効であるかと考える。</li> </ul>
<b>5. 今後の目標</b>
<p>【短期的目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 小学校専修をはじめ、乳幼児教育専修、中等国語・数学・音楽専修のうち、特別支援学校教員免許を取得する学生の割合を増やす。</li> <li>2. 春季・夏季教員採用試験対策講座等において、面接指導、模擬授業・場面指導の講座を受講する学生数を増やす。</li> <li>3. 特別支援教育にかかる実践的論文を執筆する。教職入門にかかる図書(分担執筆)を完成させる。数学教育学会において、「プログラミングを活用した特別支援教育における研究」(共同研究)の発表を行う。(2026年度基盤研究B: 科研費申請中)</li> </ol> <p>【長期的目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 特別支援教育の授業 学生が、特別支援学校や、小・中学校の特別支援学級、通常学級、及び通級指導教室で学ぶ「特別なニーズのある子ども」の実態や教育課程、指導内容・方法について興味を持って探究ができるよう、指導したい。さらに、共生社会の実現に向けて特別支援教育が果たす役割を理解し、自ら身近なテーマを見出し、考え、合理的配慮の在り方や課題について、参加体験型の学習を活用して深めさせたい。</li> <li>2. 教職に関する授業 昨今の子どもを取り巻く社会情勢の中で、教職はかけがえのない大切な職であること、教員の役割、職務内容、学校の組織運営等について、わかりやすく講義をしたい。子どもの学力の実態や新たな教育課題への対応を踏まえて、子どもの思考力や判断力を培い、協働的で深い学びを促進し、魅力ある授業づくりができるよう、教育現場の様子を伝えながら、学生を指導したい。自らの授業では、教員と学生のつながりを大切に、また、個別の相談や支援を丁寧に行い、多くの優秀な学生を学校現場に送り、社会貢献ができるよう、指導育成したい。 また、採用前の学生期からメンタルヘルスを向上させ、適切に保護者対応等ができるコミュニケーション力を身につけさせたい。自己の省察を大切に、大学での学びを学校現場に活かし、学び続ける学生を育成したい。</li> <li>3. 研究活動 特別支援教育(病弱教育、発達障害等)にかかる教育方法・内容にかかる研究、及び、他領域とコラボレーションした研究を行う。その成果は、学会誌掲載、書籍出版において成果報告できるように、進める。他大学とのコラボレーションによる、特別支援教育と隣接領域との実践的研究を進め、具体的にその内容を大学教育に還元する。</li> </ol>
<b>・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス, 授業評価アンケート等)</b>
<p>・担当授業のシラバス、各種学生支援の内容、授業アンケート等⇒大学webページ、及び、上記に内容を記載</p> <p>【研修会や学会への参加状況】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1)他大学との共同研究:「プログラミングを活用した特別支援教育における数学的理解深化に関する実証研究」(2026年度基盤研究B: 科研費申請中 山形大学大学院教育実践研究科教授等4名との共同研究⇒研究分担者)</li> <li>(2)数学教育学会秋季例会(2025.9.15)統計・情報教育分科会にて、「特別支援教育におけるプログラミングを用いた授業に関する一考察」の発表、学会論文集に概要収録</li> <li>(3)学部共同研究:「特別な支援が必要な児童生徒に対するプログラミング教育に関する最適な授業モデルに策定」(人間教育学部教員4名)において、奈良市立小学校特別支援学級(2校)にて、Legoブロックを用いたプログラミング教育の出前授業を実施。希望学生が参加し、地域連携支援としても展開中</li> <li>(4)教職入門(仮称)(大学教育出版):第1章「教員という仕事と学級経営」第5節特別支援学校を執筆。2026年度から、本学人間教育学部にて教職入門の教科書として使用予定。</li> <li>(5)特別支援教育にかかる論文発表(アンジェルマン症候群の心理社会的支援に関する研究):加藤美朗・山中矢展(2025). Angelman症候群一心理社会的支援のための文献研究一. 関西福祉科学大学紀要, 20, 55-55.</li> <li>(6)2026年度日本育療学会第30回記念学術集会(奈良大会):2026年8月29-30日奈良学園大学にて実施 事務局担当</li> </ol>

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	岡野 聡子
<b>1. 教育の責任</b>			
<b>1) 所属学科における教育的役割と位置づけ</b>			
<p>奈良学園大学人間教育学部は、「人を育てる専門職の基盤としての〈人間理解〉」を重視し、教育・保育・福祉・地域といった実践領域を横断しながら、理論と実践を往還できる人材の育成を目的として設置された学部である。私は、本学開学当初より人間教育学部に所属し、学部の教育理念やカリキュラム構想の形成段階から関与してきた立場として、学部教育の基盤を支える教育を担ってきた。とりわけ、初年次から卒業研究に至るまでの学修の連続性を意識し、学生が「人間を理解するとはどういうことか」「学びを社会や地域とどのようにつなぐのか」を段階的に深められるような教育に取り組んでいる。具体的には、キャリア形成科目、教職・保育者養成科目、ゼミナール、卒業研究を横断的に担当することで、学生の学修過程を点ではなく線として捉え、自己理解・専門性形成・社会的実践へとつなげる役割を担っている。これは、人間教育学部が掲げる「知識の習得にとどまらず、実践の中で学び続ける姿勢を育む」という教育方針と密接に関わるものである。また、人間教育学部における教育の特徴の一つである「対話」「省察」「経験に基づく学び」を重視した教育実践において、私は学生の語りや迷い、不確かさを学びの出発点として位置づける教育を行ってきた。これにより、学生が自らの経験を振り返り、意味づけし、次の行動へとつなげていく力を育成することを目指している。このように、私は人間教育学部の中で、学部の理念を具体的な教育実践として形にし、学生一人ひとりの成長を長期的視点で支える教育的役割を担っていると考えている。</p>			
<b>2) 担当授業科目 (2025年度)</b>			
<p>本学においては、人間教育学部の教育目標に基づき、キャリア形成、教職・保育者養成、初年次教育から卒業研究に至るまでの段階的な教育を担当している。</p>			
<b>①キャリア形成科目…キャリアデザイン、キャリアディベロップメント、キャリアスキルアップⅠ・Ⅱ、インターンシップ</b>			
<p>これらの科目では、学生が自己の関心・価値観・強みを言語化し、将来の進路を主体的に構想できるよう支援することを目的としている。特に、人間教育学部の学生が教育・福祉・一般企業など多様な進路を見据え、自らの経験を学びとして意味づける力を育むことを重視している。授業では、自己理解ワーク、グループディスカッション、実践的課題（履歴書作成、面接演習等）を取り入れ、理論と実践を往還させながらキャリア形成を支援している。</p>			
<b>②教職・保育者養成関連科目…子どもと環境、子どもと環境の指導法、人間教育実践力開発演習Ⅱ</b>			
<p>これらの科目では、幼児教育・保育における「環境」を、物理的環境にとどまらず、人・文化・地域との関係性として捉える視点の育成を目的としている。学生が子どもの主体的な学びを支える保育実践を構想できるよう、観察・記録・省察を重視した授業設計を行い、理論と現場を結びつける学修を展開している。</p>			
<b>③ゼミナール科目…人間教育学ゼミナール（基礎）、人間教育学ゼミナール（応用）</b>			
<p>ゼミナールでは、少人数指導の特性を生かし、学生一人ひとりの関心を起点とした探究活動を支援している。基礎段階では、文献の読み方、問いの立て方、議論の方法など、学術的基礎力の育成を重視し、応用段階では、卒業研究を見据えた調査・分析・表現力の向上を図っている。</p>			
<b>④その他の担当科目…基礎ゼミナールⅡ、卒業研究、人間教育学、保育表現力演習</b>			
<p>初年次教育から卒業研究までを継続的に担当することで、学生の成長過程を長期的に把握し、学修のつながりを意識した指導を行っている。特に卒業研究では、学生の問題意識を尊重しながら、研究倫理や方法論を踏まえた丁寧な個別指導を行っている。</p>			
<b>3) 各種学生支援</b>			
<p>正課教育に加え、学生の学修・進路を支える正課外の教育的支援にも積極的に取り組んでいる。</p>			
<b>①一般企業就職を希望する学生に対する履歴書指導・面接対策指導</b>			
<b>②乳幼児教育専修4年生を対象とした公立園面接指導</b>			
<b>③奈良学園大学ボランティアサークル顧問としての学生支援</b>			
<p>これらの支援では、学生一人ひとりの背景や志向を踏まえ、不安や迷いを言語化し、自ら選択する力を育てる関わりを重視している。</p>			
<b>2. 教育の理念・目的</b>			
<b>1) 自らの教育理念と目的</b>			
<p>私の教育理念は、理論と実践の統合を意識した教育活動を通して、学生が自らの経験を意味づけ、主体的に学び続ける力を育成することにある。知識を一方的に伝達するのではなく、学生自身の経験や問いを出発点とし、それを理論的枠組みと往還させながら理解を深めていく学修過程を重視している。キャリア形成科目における教育活動の目的は、単に職業選択に必要なスキルや職業観・勤労観を身につけさせることにとどまらない。心</p>			

理学・社会学・教育学・社会福祉学・経済学・政治学などの学際的な知見を手がかりに、「人生100年時代」と呼ばれる現代社会において、どのように生き、働き、社会と関わっていくのかを学生一人ひとりが主体的に考える力を育てることを目的としている。そのため、自己理解と社会理解を往還させる学修活動を通して、学生が自らの生き方を言語化し、将来を構想できるよう支援している。一方、教職科目における教育活動の目的は、知識として理解することにとどまらず、実際の保育・教育現場において子どもと向き合い、状況に応じて判断し行動できる実践力を育成することである。理論的背景を踏まえつつ、観察・記録・省察を通じて実践を振り返り、次の行動へとつなげる力の育成を重視している。このように、私の教育活動は、人間教育学部が重視する「理論と実践の往還」「対話と省察を通した学び」という教育方針を基盤とし、学生が学びを自らの人生や専門的実践に結びつけられるよう支援することを目的としている。

## 2) 価値観・信念

教育において私が大切にしている価値観の一つは、学生と教員の双方向的な関係性に基づいた授業づくりである。学生を一方向的な知識の受け手としてではなく、学びの主体として位置づけ、対話を通して共に考え、学びを深めていく姿勢を重視している。学生の語りや迷い、戸惑いは、未熟さとして排除されるものではなく、学びを深めるための重要な契機であると捉えている。そのため、授業やゼミナールにおいては、学生が安心して意見を表明し、経験を振り返ることができる学習環境の構成を心がけている。こうした関係性の中でこそ、学生は自らの考えを問いただし、他者との違いに気づきながら、自分なりの価値観や専門性を形成していくことができると考えている。

# 3. 教育の方法

## 1) 学生との接し方

学生との関わりにおいては、学生の話をも最後まで丁寧に聞くことを基本姿勢としている。学生の語りの背後には、個人的な経験や感情、価値観が複雑に絡み合っているため、即座に結論や助言を示すのではなく、まずは十分に受け止めることを重視している。その上で、学生の語りを心理的・社会的・教育的観点から整理し、問題を構造化したうえで、複数の選択肢や具体的な解決の方向性を提示するよう心がけている。こうした関わりを通して、学生自身が自分の状況を客観的に捉え、主体的に判断・行動できる力を育成することを目指している。

## 2) 授業の工夫（授業の方法、内容等）

キャリア形成科目においては、学生の主体的な学びを促すため、アクティブラーニングを積極的に取り入れている。自己理解ワークやグループディスカッションに加え、2年生・3年生後期には、社会課題の解決や社会変革をテーマとしたビジネスアイデアコンテスト等への応募を授業の一環として位置づけている。これにより、学生自身が考えたアイデアが社会の中でどの程度通用するのかを実感しながら、試行錯誤する機会を提供している。結果の成否にかかわらず、挑戦の過程を振り返り、学びとして意味づけることを重視し、学生が楽しみながら主体的に取り組める学習環境の構成を行っている。一方、教職科目においては、実践力の育成を目的とした段階的な学修構成を行っている。保育理論や保育方法論といった基礎理論を学んだ後、保育教材の開発、指導計画の立案、模擬的な保育実践へと学修を展開し、相互評価および自己省察を通して学びを深めている。このように、理論の理解、実践、振り返りを循環させることで、知識の定着だけでなく、状況に応じて判断し行動できる力の育成を図っている。

## 3) FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加

教育の質の向上を図るため、学外を含む研修活動にも継続的に参加している。具体的には、広陵町教育委員会の教育委員として、教育行政や学校・園の実践に関わる研修会に参加し、地域における教育課題や政策動向の把握に努めている。また、園内研修の講師として保育現場に関わることで、現場の実態や課題を直接把握し、大学での教育内容と現場との接続を意識した授業改善に生かしている。

## 4) 自らの専門分野の成長

自らの教育実践を理論的に深化させるため、日本保育学会、キャリア教育学会、日本地域福祉学会、日本教師学会等に所属し、研究発表や学会活動を通じて専門性の向上に努めている。研究活動を通して得られた知見は、授業内容や指導方法の改善に反映させ、教育実践と研究の往還を図ることで、より質の高い教育の実現を目指している。

# 4. 教育の成果

## 1) 達成できたこと、できなかったこと（達成レベル）

キャリア形成科目においては、授業内での振り返りシートや授業評価アンケートの自由記述を分析すると、「視野が広がった」「自分を見つめ直す機会となった」「これまで考えたことのなかった生き方や働き方を考えるようになった」といった回答が多く見られる。これらの結果から、学生が

自己理解と社会理解を往還させながら、自身の生き方や将来について考えるという授業の主目的は、概ね達成できていると評価している。一方で、達成が十分でない点として、レポート作成において自己の考えと引用部分の区別が不明確な学生が一定数見られることが挙げられる。これは毎年共通して見られる課題であり、学術的な文章作成に関する基礎的指導や、引用・参考文献の扱いに関する指導の必要性を改めて認識している。教職科目「子どもと環境」（1年次後期）では、グループによる教材開発に取り組ませた。グループ活動においては、各学生に役割を明確に割り当てることで、いわゆるフリーライダーは見られず、全員が教材開発のプロセスに主体的に関与していたことを確認している。このことから、協働的な学びを通して、保育実践に必要な役割意識や責任感の育成という点では、一定の成果が得られたと考えている。

## 2) 授業アンケートの結果

授業評価アンケートの結果を見ると、理解度、授業への満足度、教員の説明の分かりやすさ、学生の主体的参加を促す工夫といった各項目において、学内平均値を上回る評価を得ている。特に、学生の主体性を重視した授業構成や、対話を重ねながら進める授業スタイルについては、肯定的な評価が多く、これまで実践してきた教育方法が一定の成果を上げていることが示唆される。一方で、自由記述欄に見られる指摘や要望については、今後の授業改善に向けた重要な示唆として受け止め、次年度以降の教育活動に反映させていく必要があると考えている。

## 5. 今後の目標

### 1) 短期的目標（2～3年程度）

短期的には、これまで重視してきた学生と教員の双方向的関係性に基づく授業づくりを、より意識的・体系的に深化させることを目標としている。具体的には、授業内外で得られる学生の振り返りや質問、授業評価アンケートの自由記述を丁寧に読み取り、授業内容や方法の改善に継続的に反映させていく。とりわけ、学生の理解のつまずきや関心の変化を授業設計に取り込むことで、学生が自らの経験や考えを言語化しやすい学習環境を構成し、主体的な学びをさらに促進していきたい。そのために、振り返りシートの活用方法やフィードバックの在り方についても見直しを行い、学びの定着と深化を図る。

### 2) 長期的目標（10年程度を見据えて）

長期的には、キャリア形成科目における教育実践について、教育効果を客観的に検証できる仕組みを構築することを目標としている。これまで主として質的な記述や学生の語りを通して把握してきた学習成果について、今後はグループワークの成果物分析や協同性尺度等を用いた量的評価を取り入れ、学生のどのような能力がどの程度向上しているのかを明らかにしたいと考えている。これにより、キャリア形成科目が学生の自己理解、他者理解、協働的問題解決力といった能力の育成にどのように寄与しているのかを可視化し、教育実践の改善と理論的検討を往還させることを目指す。将来的には、こうした知見を学会等で発信し、人間教育学部におけるキャリア教育の質保証や教育改善にも貢献していきたい。

## ・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

本ティーチング・ポートフォリオに記載した教育活動の内容については、以下の資料を根拠としている。必要に応じて、これらの資料を参照されたい。

### ①シラバスについて

本学Webサイトに公開されている各授業科目のシラバスを参照のこと。

### ②各種学生支援の内容について

キャリアセンター運営委員としての立場から、一般企業への就職を希望する学生に対し、履歴書指導や面接対策等の就職支援を行っている。

### ③研修会・学会への参加状況について

2025年度は、Community Development Society(CDS)、Asian Qualitative Inquiry Association (AQIA)、日本保育学会、日本地域福祉学会において学会発表を行った。researchmap（研究者情報データベース）を参照のこと。

### ④授業評価アンケートについて

本学Webサイトに公開されている授業評価アンケートの結果を参照のこと。

学部・学科	人間教育学部	氏名	岡野 由美子
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>・担当授業科目 知的障害者の心理、障害の検査と評価、知的障害者の教育課程論と指導論、発達障害教育総論、視覚障害教育総論、特別支援学校教育実習（事前事後指導） 現代教育課題A（不登校・いじめ） 人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）、人間教育学ゼミナールⅡ（応用）、 卒業研究</p> <p>・各種学修支援 本学は教員を目指す学生が多く、教員採用試験に向けた面接練習、模擬授業練習等、オフィスアワーには個々への指導を実施する。中でも特別支援学校教員を目指す学生にはその専門分野の個別指導を行う。その他学生の就職に関する相談や情報提供は丁寧に行なっていく。</p>			
<b>2. 教育の理念・目的</b>			
<p>1)教職を目指す学生の育成を目的とする。様々な教育課題を知り、それに主体的に取り組む実践的な力を育む。 2)すべての教育現場で実施される特別な支援を要する児童生徒への指導、支援についての知識をつけ、その多様性に対応する力をつけさせる。まずは自分自身を理解すること、そして独りよがりにならず、自他の違いを認め、お互いを尊重するというを日々の教育活動全般を通じて学生に伝えていく。 主に上記の2点を重視している。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>&lt;学生との接し方&gt; 学生が自己理解を進め、卒業後の進路に向かい目標をもち主体的に学修を進めていくために、まずは学生の話に傾聴し、状況を把握して指導支援にあたるのが重要であると考え。大学が最後の教育を受ける機会である学生も多く、卒業後は自立し社会人となっていく。自ら、自分の個性と向き合い、何が得意か、何を目標しているのかを見つめること、そして、様々な課題に自力で向かうと同時に周囲の力を借りること、それによってより良い結果が得られるということに気づかせるような支援を丁寧に行う。学生の話に傾聴しながら自己を振り返らせる作業を通して自覚的に気づかせていく。</p> <p>&lt;授業の工夫&gt; 方法が分からない、取り組む道筋を具体的に描けず成績が伸びない、力がつかない等がないように、すべての授業において、評価のポイントを示すなど細かな指導、支援に取り組んでいる。 さまざまな教育課題に立ち向かい、対処していく教員を育成する立場として、主体的・対話的な学び、ディスカッション等さまざまな形態の授業を構築し、自ら学ぶ意欲を高め、他者と連携する力をつけさせる。 特別な支援を要する幼児児童生徒への対応は、学校現場では喫緊の課題である。その理論や実際の支援についての理解に重点を置き、勤務先で応用できるような実践力の育成に努めている。 毎授業ごとのリフレクションを行い、疑問点への回答、学修の振り返りに対するコメントなどを個別に返しつつ、全体への共有も適宜行うなど、理解の深まりと広がりを意識した授業展開を行う。 &lt;FD/SD活動等に関わる内外の研修会への参加&gt; 学内研修会への参加、研修で得た情報を取り入れた授業の構築を行っている。 &lt;自らの専門分野における成長&gt; 現在長崎大学大学院医療科学専攻分野にて、研究を行っている。 地域貢献として、特別支援教育相談室「からふる」を運営し、今年度約20件ほどの地域の方からの相談がある。発達検査の実施、助言など、丁寧に行い、今後も継続、発展的に進めていきたい。 特別支援教育に関する学会等への参加、日本LD学会では広報委員会副委員長を務め、最新情報や取り組みについて取材、啓発活動にも貢献している。これらの取組から得た知識や情報は授業に反映するようにしている。 県内外の特別支援教育に関連する研究会講師の依頼も多く受けており、現場のニーズに適した内容を展開するとともに、自己の専門的知識のブラッシュアップも行うよう取り組んでいる。</p>			
<b>4. 教育の成果</b>			
<p>・達成できたこと、できなかったこと 各授業における提出課題、リフレクションにおいて、ポイントを整理して書くことができるような力をつけてきている。双方向の授業を心がけており、リフレクションにおける感想や質問についてのフィードバックは次週の授業時に必ず行い、学習意欲の向上に繋がることができたと考える。</p> <p>・授業アンケートの結果 2025年度の前期授業評価については学生の総合的な満足度は概ね達成できている。話し方が聞きやすい、資料が分かりやすいなどの意見が多く挙げられていた。今後も継続して、学生にわかりやすい授業の構築をしていく。</p>			
<b>5. 今後の目標</b>			
<p>特別支援学校の教育実習に関し、学生が不安なく開始できるよう、指導案の作成や模擬授業、特別支援学校の様子などを授業で扱い、10日間を有意義なものにできるように取り組んでいく。</p>			

特別支援教育は、すべての教育機関で実施される大切な教育である。それぞれの障害について、正しく理解し、学ぶことが、将来の教育現場で生きて働く力となることを踏まえ、わかりやすい授業を実施する。また、学生相互に意見を交流したり、自ら調べたりする中で、新たな疑問をもったり、それについて調べたり学んだりすることができるよう、具体的な方法を示すなど、学ぶための方略を身につけることができるような授業を実施したい。

• **必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）**

・シラバス及び授業アンケートは本学HPに公開されている。

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	岡本恵太
<b>1. 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・国語科指導法</li> <li>・教育社会学A(初等)</li> <li>・教育社会学B(中等)</li> <li>・社会学</li> <li>・人間教育実践力開発演習IV(複数担,主担当)</li> <li>・言葉の理解</li> <li>・教職実践演習(複数担)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人間教育学ゼミナールI(基礎)</li> <li>・人間教育学ゼミナールII(応用)</li> <li>・卒業研究</li> <li>・教育実習I</li> <li>・教育実習II</li> <li>・進路相談</li> <li>・履修相談</li> </ul>		
<b>2. 教育の理念・目的 (なぜやっているか：教育目標)</b>			
<p>教師に必要な資質・能力としてのコミュニケーション力、企画力、行動力、課題解決力などの人間力を培うことを目標としている。そのために、次の3点を特に重視する。</p> <p>①現場での実践を想定し、具体的な方法や筋道を提示する。</p> <p>②実践に生きる形で、理論や考え方を提示する。</p>			
<b>3. 教育の方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)</b>			
<p>(1) 学生との接し方 普段から、学生とのコミュニケーションの機会を多くとるようこころがける。生活や学習上の悩みを聞き取り、共に方向性を見出す。特にゼミにおいては、普段から学生の問題意識等を聞き取り、学習の支援に生かしていく。</p> <p>(2) 授業の工夫 授業で提示するスライドを工夫し、考え方の筋道を目で見てわかるようにして理解を支援する。また、各授業で実践的な課題を提示し、教科の学習内容がが実践にどう生きるかを示す。論文やレポート等の指導にあたっては、できるかぎり個別指導の場を設定する。また、小テスト・小レポートなどを授業に組み込み、学生の理解度を常にチェックしながら授業を進めていく。</p> <p>(4) 学生のニーズに応じた進路指導 学生のニーズや課題を聞き取り、個に応じた支援を行う。</p>			
<b>4. 教育の成果 (どうだったか：結果と評価)</b>			
<p>教員の熱意やプレゼンテーション等資料の分かりやすさについては、おおむね効果があったと考える。また、小テストを取り入れた授業も、理解度等において一定の効果があった。一方、授業時間外の学習などを促すことには課題があった。また、さらに対話の時間を増やすなどの工夫が必要である。</p>			
<b>5. 今後の目標 (これからどうするか)</b>			
<p>1) アクティブラーニングを意識し、主体的な学習を促すこと。・授業の中において、教育実践に直結する課題について議論する場を設定する。・ICT機器(ロイロノート)の活用を試みる。</p> <p>2) 学生一人のニーズに応じた、進路指導やゼミにおける個人研究支援、卒論指導を実施する。・問題意識の喚起と研究への支援。</p>			
<b>・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス、授業評価アンケート等)</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉の理解シラバス</li> <li>・国語科指導法シラバス</li> </ul>			

英文科目名称：

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	1	2	選択
担当教員			
岡本 恵太			
水・3	KC2c101	DP1・5・6	
添付ファイル			

授業の目標・概要	言語能力を高めることは、人間としての能力、人間性を高めることにつながる。ここでは、言語の性質や働き、形式等の認識を深め、表現、理解を中心とした言語能力を高めることを追究する。日本語の特性としての言語、音韻、文字、語彙、構文、文法、方言等、その歴史性や法則性、言語減少などを具体的に見極め、言語に対する認識を深めていく。書写における低学年の硬筆、中高学年の毛筆指導の意義及び演習について理解を深める。
学習の到達目標	1 言語、音韻、文字、語彙、構文、文法、方言等、国語（日本語）の特徴を理解し、認識を深める。 2 自らの言語生活を振り返り、国語を尊重する態度を身に付ける。 3 児童の指導に役立てる基礎知識と表現力を身に付ける。
授業方法・形式	1 それぞれの学習テーマに対して、テキストや補助資料を活用しながら授業を進めていく。 2 必要に応じて、取り上げるテーマに関するディスカッションを行う。
授業計画	<p>第1回 言葉の発達について 言葉の獲得と発達について概要を理解する。</p> <p>第2回 語彙について 語彙の系統と構成、位相語、理解語彙、表現語彙についてまとめ、理解する。</p> <p>第3回 語彙を増やす 類義語・対義語、語種についてまとめ、理解する</p> <p>第4回 文字種を考える 平仮名、片仮名、漢字の使い分けについて学習するとともに、それぞれの文字種の長所と短所についてまとめ、理解する。</p> <p>第5回 日本語の特徴について 日本語の音声、音韻、アクセントの特徴について理解する。</p> <p>第6回 文の構成について 主語・述語・修飾語などの関係を理解し、日常的な言語生活における活用について考える。</p> <p>第7回 品詞について 品詞の種類とその特徴について理解するとともに、日常的な言語生活における活用を考える。</p> <p>第8回 辞と陳述 助動詞、助詞について、体言、用言の関係を明らかにしながら理解するとともに、文章表現における活用について考える。</p> <p>第9回 相手の気持ちに配慮する 敬語についての歴史や待遇表現について学び、敬語の種類に応じた使い方についてまとめる。</p> <p>第10回 方言を考える 方言の特徴や共通語の利便性、広がりについて理解するとともに、方言と共通語の使い分けについて考える。</p> <p>第11回 新語・流行語・若者言葉 言葉は時代とともに、変わっていくことを理解するとともに、教育現場における対応について考える。</p> <p>第12回 語の感性を研ぎ澄ませる オノマトペを手がかりにして、感覚や感情を適切に表現するための具体的な方法について考える。</p> <p>第13回 伝統的な言語文化 俳句を中心に、日本の伝統的な言語文化について学び、小学校における具体的な指導のアイデアを考える。</p> <p>第14回 書写（毛筆・硬筆） 毛筆書写の必要性について考え、学習に必要な用具についての理解を深めるとともに、硬筆書写の基本的な考え方を理解する。</p> <p>第15回 授業の総括 これまで身につけてきたことをまとめるとともに、本授業の学びを日常生活や教育実践にどのように生かすか考える。</p>
成績評価の基準	リフレクションシートの記述から、授業に対する取組み意欲や理解度を評価する。30% ワークシートの記述から授業に対する取組み意欲や理解度を評価する。20% 期末試験において総合的な理解を評価する。50%
課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	ワークシートを評価し、返却することによって期末試験に対する準備ができるようにする。

準備学習・復習及び授業時間外の課題	1 講義における課題をシラバスで理解し、中学校、高等学校の教科書や副読本等を活用し、復習しておく。 2 講義後に学んだ言葉に関する理解をまとめておく。 3 現在の言葉の使われ方に関心をもつ。 4 事前2時間、事後2時間程度の学修を要する。
履修上のアドバイス及び留意点	欠席した学生は、ワークシートを次回講義で受け取る。
教材・教科書	授業の際に必要なに応じて提示する。
参考書	『小学校学習指導要領解説国語編』文部科学省 阿部紘久『文章力の基本100題』光文社、2010.6
授業の特徴	<b>授業で実践するアクティブ・ラーニング</b> <input type="checkbox"/> PBL (課題解決型学習) <input type="checkbox"/> 反転授業 (知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業) <input checked="" type="checkbox"/> ディスカッション、ディベート <input checked="" type="checkbox"/> グループワーク <input type="checkbox"/> プレゼンテーション <input type="checkbox"/> 実習、フィールドワーク <input type="checkbox"/> その他  <b>その他アクティブ・ラーニング内容</b>  <b>授業でのICT活用</b> <input checked="" type="checkbox"/> 双方向型授業に活用する <input checked="" type="checkbox"/> 自主学習支援に活用する  <b>オープンな教材</b> <input type="checkbox"/> 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する <input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する <input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する  <b>担当教員の実務経験</b> <input checked="" type="checkbox"/> ある  <b>実務経験の内容</b> 33年間、小学の教員として勤務し、「国語科」の授業づくりにおいて、指導内容・指導方法・教材開発等の研究に取り組んできた。本講義では、教員としての経験を生かし、将来国語科の学習指導を行うために必要な言葉についての知識を学生に獲得させることを目指す。同時に、言葉の知識を教材研究や日常生活に生かすため、身近な事例を手掛かりにして、学生自身が発見し自分自身のものにしていけるよう働きかけていく。

英文科目名称：

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
前期	3	2	選択
担当教員			
岡本 恵太			
月・1	KC3e301	DP4・5・6	
添付ファイル			

授業の目標・概要	まず、学習指導要領の解説や実践研究の授業の視聴により「言葉による見方・考え方」の育成や「主体的・対話的で深い学び」をめざした国語科の授業についての理解を行う。次に、グループで学習指導案を作成しそれに基づいた模擬授業を行うことにより実践力を身に付ける。さらに、授業後は質疑応答と指導助言の時間を設け工夫されていた点や改善点などについて全体で討議し、それを参考にした改善指導案を作成する。
学習の到達目標	主体的・対話的で深い学びに向けた国語科指導の実現のため「国語科教育の意義と役割、目標と内容、学習指導計画、指導方法と評価の基本」等について理解する。さらに「言葉による見方・考え方」を育成するための教材研究や言語活動例を効果的に取り入れた指導法についての理解を深める。
授業方法・形式	1. 学習指導要領と関連して各章毎の内容を要約していく。 2. 具体的指導について小学校教材や参考図書を参照し、実践的に調べる。 3. 教育課題に広く学んでいく。
授業計画	<p>第1回 国語科教育の目標と内容 学習指導要領の総則及び「言葉による見方・考え方」を核とする国語科の目標、内容に関する学習指導要領のポイントについて</p> <p>第2回 学習指導要領に基づく「言葉による見方・考え方」を育成する学習指導計画 〔知識及び技能〕〔思考力、判断力、表現力等〕の二つの枠組みで整理されている「内容」をふまえた学習指導計画の作成上の留意事項や単元指導計画、学習指導案の作成について</p> <p>第3回 「主体的・対話的で深い学び」の実現による国語科に求められている指導の改善・充実 実践研究に基づく授業のDVD視聴による、学習内容の改善・充実をふまえた授業展開の概要と指導者が果たすべき役割の理解</p> <p>第4回 国語科の指導と評価 国語科指導における学習過程に即した評価のあり方について</p> <p>第5回 国語科に求められている指導の改善・充実のための教材研究(1) 「語彙指導の充実」「情報の扱い方に関する事項の新設」「考えの形成・深化の重視」「ICTの効果的な活用」等をふまえた教材分析について</p> <p>第6回 国語科に求められている指導の改善・充実のための教材研究(2) 「読書指導や学校図書館活用の重視」「我が国の言語文化の理解」「外国語科をはじめとする他教科との関連の重視」「障害のある児童・生徒などに対する指導内容や指導方法の工夫」「ICTの効果的な活用」等をふまえた教材分析について</p> <p>第7回 〔思考力、判断力、表現力等〕に示された各領域の指導事項および言語活動例とその指導(1) 「A 話すこと・聞くこと」における指導法とその留意点について</p> <p>第8回 〔思考力、判断力、表現力等〕に示された各領域の指導事項および言語活動例とその指導(2)</p> <p>第9回 〔思考力、判断力、表現力等〕に示された各領域の指導事項および言語活動例とその指導(3) 「C 読むこと」における指導法とその留意点について</p> <p>第10回 〔知識及び技能〕に位置づけられた「書写」に関する指導とその留意点 書写として行う硬筆・毛筆の指導のあり方、「点画の書き方」「書く速さ」等をふまえた指導の工夫等について</p> <p>第11回 模擬授業演習(1) 「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざす「A 話すこと・聞くこと」における指導の工夫に焦点をあてて追究</p> <p>第12回 模擬授業演習(2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざす「B 書くこと」における指導の工夫に焦点をあてて追究</p> <p>第13回 模擬授業演習(3) 「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざす「C 読むこと」における指導の工夫に焦点をあてて追究</p> <p>第14回 模擬授業演習(4) 「情報の扱い方」「読書指導」「書写」「ICTの効果的な活用」等における指導の工夫に焦点をあてて追究</p> <p>第15回 「言葉による見方・考え方」「主体的・対話的で深い学び」に向けた国語指導についてのまとめ 「言葉による見方・考え方」の育成をめざす観点からの振り返り</p>
成績評価の基準	毎回の小レポート(40%)、指導案作成・模擬授業(30%)、期末レポート(30%)
課題(試験やレポート等)に対するフィードバック	毎回の小レポートについて、コメントをつけるかまたは、次回の授業で取り上げてコメントする。

の方法	
準備学習・復習及び授業時間外の課題	(準備学修)「小学校学習指導要領解説」「国語編」(平成29年告示)から、授業内容に関連した所を読む。 また、授業と関連する国語の教材を読み、予備知識を増やす…20時間 (授業時間外の課題) 提示したテーマや課題に沿って実践事例等を収集し、課題レポートにまとめる…20時間 (復習) 授業での学修内容について理解度を確認し、課題レポートや学習指導案としてまとめる。授業中に実施した模擬授業についてこれまでの学習をもとにふりかえり、リフレクションレポートを書く。…20時間
履修上のアドバイス及び留意点	資料の予備配布は行わないため、欠席した学生は、次回講義までに各自対応しておく。
教材・教科書	文部科学省「小学校学習指導要領」、「小学校学習指導要領解説」「国語編」(平成29年告示)
参考書	必要なときに、随時連絡する。
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■PBL(課題解決型学習)</li> <li>□反転授業(知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業)</li> <li>■ディスカッション、ディベート</li> <li>■グループワーク</li> <li>□プレゼンテーション</li> <li>□実習、フィールドワーク</li> <li>□その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■双方向型授業に活用する</li> <li>□自主学习支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学习で活用する</li> <li>□他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li>□他大学等が提供するオープンな教材を自主学习で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p> <p>33年間、小学の教員として勤務し、「国語科」の授業づくりにおいて、指導内容・指導方法・教材開発等の研究に取り組んできた。本講義では、教員としての経験を生かし、具体的な実践事例に即して、国語科で身につけるべき資質・能力を明らかにする。同時に、教材研究の手法や「つけたいたい力」を明確にした授業の構想と評価の在り方についても、実践事例を手掛かりに講義する。また、本講義では、学生による模擬授業を通して、発問、指示、板書、児童の支援等について、学生自身が発見し自分自身のものにしていけるよう働きかけていく。</p>

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	鍵本 有理
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>担当授業科目は下に掲げたとおりである。</p> <p>研究者志望ではない学生にとっても、大学における本来の学問に触れる経験は有意義であり、高校とは違って、自ら考え、動くことを身につけさせ、豊かな人間性を育みたい。</p> <p>特に、専門の国語学（日本語学）という学問を通じて、何事にも興味を持ち調べる能力を養い、場合によっては定説・通説をも疑うこともできる学生が育てられれば本望であると考えている。</p> <p><b>【担当授業科目】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・国語学入門</li> <li>・国語学Ⅰ</li> <li>・国語学Ⅱ</li> <li>・国語学特論</li> <li>・教職表現力演習</li> <li>・国語表現力演習</li> <li>・語学・文学総合演習Ⅰ（国語学）</li> <li>・人間教育学ゼミナール（基礎）</li> <li>・人間教育学ゼミナール（応用）</li> </ul> <p><b>【各種学生支援】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「学生」としてのスキル指導（スケジュール管理やファイリングの手法、大学教育としてのアカデミックスキル）</li> <li>・（専門分野と関連した指導）参考図書検索方法や引用の仕方、文章の書き方・研究指導（人間教育学ゼミナールでは図書館と協力）</li> </ul>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p><b>【教育理念と目的・価値観・信念】</b></p> <p>大衆化した大学において、今こそ大学での学びとは何か、考える必要がある。研究者志望ではない学生にとっても、大学において専門的な学問に触れる経験は有意義であり、何が正解か「わからない」世界を実感させ、高校とは違い「学生」として、まず自ら考え、行動することを身につけさせたい。</p> <p>私の専門である国語学（日本語学）という学問を通じて、何事にも興味を持ち調べる能力を養い、場合によっては定説・通説をも疑うこともできる学生が育てられれば本望である。そのような能力が身につけば、実際の教育現場でも、誤った行動や判断を防ぐことができるであろう。</p> <p>具体的には、以下の目的を掲げ、この理念の実現を図る。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①日本語学や国語教育に必要な基本的文献について知る 講義と演習を通じて、国語教員として必要な知識を身につける</li> <li>②何が課題なのか自ら発見する能力を養う 教員として授業を行うだけでなく、物事の本質を見極める力として必要である</li> <li>③引用の仕方を通じて、情報の真偽を見極め、他人の意見を尊重する態度を涵養する レポート・レジュメ作成を通じて、この能力を育成する</li> <li>④調べたことをまとめ、人にわかるよう説明する能力を身につける 演習発表を通じて、教員だけでなく社会人としても必要な能力である</li> </ol>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>2. の教育の理念を実現するために、具体的には、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎回課題を出しており、前回の内容の振り返りを兼ねて、最初の10分ほどはその答え合わせと解説を行っている。</li> </ul>			

- ・高校での古典文法の知識が不十分な（ほとんどない）学生もいるため、大学レベルの内容に入る前に、講義中課題として古典文法の問題を解かせ、必要な知識の復習もしくは新規学習をさせるようにしている。
- ・学生の言葉への関心を高めるため、新聞やテレビで取り上げられた言葉の問題、また最近のローマ字教育政策の変化など、時事的なことがらなどもスライドを利用して紹介するようにしている。
- ・演習発表では、レジュメ作成ができない学生もいるため、単に本を紹介するだけでなく実際にcommonsに移動して本を探させ、教室に本を運ばせて、作業の導入まで指導するようにしている。
- ・レジュメ、レポート作成課題については、タイトルや学籍番号・名前を記載する位置や引用の仕方までわかるような見本を作成し、学生に提示している。
- ・引用の仕方についてはなかなか身につかないため、学年毎にまずは形式から学習させ、3年次のゼミナールからはなぜ引用が必要なのか、根本的な理念についてもさまざまな参考書を利用しながら、適宜解説している。
- ・小規模校であるので、これまで勤務した高等専門学校の経験（高校～大学年代の者を「学生」として扱い、自律性をはぐくむ）を生かし、学生には自身で掲示・連絡を確認することを原則としながら、教員が重要な連絡事項について再度確認するなどし、社会人となったときに自分で各種手続きができることを目指している。

## 4. 教育の成果

### ① 授業（教育活動）でうまくいっているところ

専門科目の入門としての位置づけとなる授業、専門的な内容が中心の授業であるが、学生に関心をもってもらえ、成果は出ているようである。今後も新聞記事などを参考に身近にある最新の話題も取り入れ、スライド作成も工夫していきたい。  
着任当初は、声が聞き取りにくい・ゆっくり進んでほしいとの声もあったが、その点も含め全体的に改善できたと考える。

授業の分量については「適切・概ね適切」が100%、資料や板書についても「わかりやすい・概ねわかりやすい」が100%であったので、一定の評価は得られているようである。学生の回答から、授業内容としてはかなり充実したものが提供できたと考える。

学生からの意見は以下の通り。

- ・休んでいてもフォローしてくれる安心感・黒板の板書で、重要なポイントが分かりやすく示されていたので理解することができた
- ・毎授業の課題により自分の理解度が明確になっており、自主学習に繋げやすかった・先生の声のトーンが聞きやすく集中して聞けた、声が聞き取りやすい
- ・新しい日本語の気づきや言葉について知れて刺激的な授業だった
- ・国語学が学べる
- ・モニターに映し出されてゆっくり進んでくださるので有難い

### ② 授業（教育活動）の課題

「国語学Ⅱ」は「国語学入門」「国語学Ⅰ」を履修していることを前提とする、日本語史（主に古典語を対象）の授業であるので、安易な履修をした他専修の一部学生にとってはかなり難しい内容になった可能性がある。

また、再三の注意にも関わらず、テキストを購入・履修しない学生がいたため、今後はまず履修前の指導についても充実させていきたい。

## 5. 今後の目標

- (1) 国語学入門・Ⅰ・Ⅱの授業内容について、あらためて整理し、復習をふまえながら新規のことがらを学習できるよう、再構築する
- (2) 最近の研究成果（「役割語」など）をさらに取り入れるべく、自己研鑽に励む
- (3) 大学の教員であるので、教育はもちろん、研究についても日ごろから時間が割けるようにしたい

### ・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス, 授業評価アンケート等)

- ・ いくつかの科目についてのシラバス  
本学Webサイトに公開されているシラバスを参照。
- ・ 各種学生支援の内容  
Active Academyに登録されている指導記録を参照。
- ・ 研究会や学会への参加状況  
毎年複数回対面またはオンラインの研究会や学会に参加している。
- ・ いくつかの科目についての授業アンケート等  
本学Webサイトに公開されている授業評価アンケートを参照。

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	川端咲子
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>主に、国文学に関連する授業を担当。国文学関連では文学史を中心に授業を行う。教職表現力演習に関しては、学生の基礎学力向上のため特に「読む・書く・発言する」ための取り組みを行う。開発演習Ⅳでは小論文指導を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎ゼミナール（通年）</li> <li>・教職表現力演習・国語表現力演習（オムニバス 半期分担当）</li> <li>・人間教育実践力開発演習Ⅳ（通年）</li> <li>・国文学入門（前期）</li> <li>・国文学Ⅰ（後期）国文学Ⅱ（前期）</li> <li>・国文学特論（前期）</li> <li>・文学（前期）</li> <li>・語学・文学総合演習Ⅱ（後期）（通年）</li> </ul>			
<b>2. 教育の理念・目的</b>			
<p>幅広い視野を持つ人間として社会に出る学生を育てることが教育目的である。そのためには、大学の4年間で広く深い知識を獲得し、獲得した知識をもとに様々な事象の中から問題点を発見し、自ら探求する力を身につける事が重要であると考えている。</p> <p>近年アクティブラーニングの重要性は教育の場における当然のこととなっている。この点について全く意義はない。ただし、しっかりと知識のインプットがあってこそそのアウトプットであるというのが私の価値観であり信念である。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>（授業の方法）日本文学は古典文学、近代文学、現代文学と区分される。中学高校の教材として扱われるのは圧倒的に近代・現代文学が多いが、授業で取り扱うのは古典文学を中心としている。理由としては以下のことが挙げられる。①自身の専門が古典文学であること。②近代・現代文学に比べて、古典文学の世界を知るためにはより多くの手助けが必要であること。③文学の歴史という点では古典文学の時代は近代・現代文学の時代を遙かに上回る長い期間であること。④高校までの教育を考えた場合、古典文学の方が未知の世界が広がっていること。</p> <p>一例として、「国文学Ⅰ」では、連歌・俳諧・俳句の成立と展開を説明する講義を行った上で、それぞれの作品を鑑賞するという授業を行った。連歌・俳諧という高校までの国語では触れないであろう文学ジャンルをあえて取り上げ、古代から近代までの展開を伝えることで、日本文学の奥行きを深く理解して欲しいという意図による。また、高校までに必ず授業で取り上げられる俳句が連歌・俳諧を踏まえていかにして誕生したのかを説明した。古典文学が単に古いものではなく、現代の文学に繋がるものであるということ、しっかりと伝えることができたのではないかと考える。「国文学Ⅱ」では学生に古典の作品の一つ選んで紹介させる授業を行った。紹介するためには理解しなければならない。それぞれ担当した作品について調べることで、新たな知見を得られたのではないかと考える。</p> <p>（内外の研修会）特になし</p> <p>（自らの専門分野の成長）古典文学の中では一番新しい時期にある近世文学を専門とする立場として、文学の伝播と受容について考えることが多かった。</p>			
<b>4. 教育の成果</b>			
<p>学生にとっては未知のジャンルを紹介することで、自分たちが知っている古典文学がすべてではないことは理解できたと思う。またいくつかの作品に対しては現代の人間の思考と似たことがあることに気づいた学生も少なからずいた（授業後の課題での記述より）。ただし、インプットを重視しすぎたためにアウトプットがほとんどできなかったことは大きな問題点であった。</p> <p>また、人間教育実践力開発演習Ⅳの授業中ならびに課外に論文指導を行ったが、ほとんど書く訓練を続けてきていない学生に対して、有効な指導方法を模索する必要があることを実感した。その中で、2023年度は、「教職表現力演習」（通年）で「書く力」の育成に特化した授業を人間教育学科1年生全員に対して国語専修教員で担当した。この成果がどうであるかを見極めて、引き続き「書く力」獲得のための方法を模索していきたい。</p>			
<b>5. 今後の目標</b>			
<p>昨年度同様、国文学の授業すべてにおいて、知識の獲得と問題点の発見力・探求力の獲得を両立させる方法を探っていくことが今後の課題である。しかし国語の教員を志望する学生に対して、「国文学」の知識を与えなおかつ発見力・探究心の獲得をさせるには、授業時間が少なすぎるのが現状である。3年生以上には「国文学」そのものの授業はほとんどない。2年間の授業をいかに有効に進めていけるのかは今後の課題といえる。「人間力」を高めるという学科の学習理念に対して日本文学、特に古典文学をどのように活用していくのかを考えていきたい。教員を養成する大学の教員としても、近世文学研究者としても「なぜ古典を学ぶのか」という問いに対して古典を学ぶことの必要性を主張できるような授業を考えていかなければならない。</p>			

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

- ・ 「教職表現力演習」2023年度シラバス
- ・ 「国文学Ⅰ」2023年度後期シラバス
- ・ 「国文学Ⅱ」2023年度前期シラバス
- ・ 教員採用試験のための小論文指導を時間外に実施。
- ・ 2023年6月10日・11日、11月5日・6日 日本近世文学学会参加
- ・ 同志社大学古典教材研究センター主催の研究集会（年2回）に参加

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	高橋千香子
<b>1. 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)</b>			
<p>○担当授業科目 (令和6年度)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「幼児教育相談支援」(前期 3年次生対象 幼稚園免許必修科目)</li> <li>・「子育て支援」(前期 3年次生対象 保育士資格必修科目)</li> <li>・「子ども家庭支援の心理学」(後期 3年次生対象 保育士必修科目)</li> <li>・「保育実践演習」(後期 4年次生対象 保育士必修科目)</li> <li>・「臨床心理学」(後期 2年次生対象 リハビリテーション学科必修科目)</li> <li>・「基礎ゼミナールⅡ」(通年 2年次生対象 卒業必修科目)</li> <li>・「人間教育実践力開発演習Ⅱ」(通年 2年次生対象 学校園支援ボランティア活動を含む)</li> <li>・「人間教育学ゼミナールⅡ(応用)」(通年 4年次生対象)</li> <li>・「卒業研究」(後期 4年次生対象)</li> </ul> <p>臨床心理士として教育相談や家庭児童相談に従事していた経験を生かし、主として子どもの心理発達、保育相談、子育て支援、家庭支援などを学ぶ科目を担当している。令和2年度からは保健医療学部リハビリテーション学科の専門科目の「臨床心理学」(令和5年度以前の科目名は「臨床心理」)を担当している。保育士専門演習科目の「保育実践演習」は、現職経験のある他の担当教員と複数で担当している。本学独自に設定されている演習科目の「人間教育実践力開発演習Ⅱ」は、本学就任以降毎年担当しており、保育者として必要な知識や思考力、学校園支援ボランティア活動を通じた保育実践力を育成し、次年度の実習へとつなぐ取り組みを行っている。「基礎ゼミナールⅡ」では、基礎学力向上の取り組みやアカデミックスキルの習得等、他専修の担当教員と協働して実施している。「人間教育学ゼミナールⅡ(応用)」は、卒業年次のゼミ学生の研究テーマに則って研究活動をサポートし、その中で1名が卒業論文を執筆し提出に至った。</p> <p>○学生支援</p> <p>4年次生2名、2年次生11名のアドバイザー(担任)として、一人ひとりの学生に応じた学習面や生活面、進路選択や就職活動、保育士採用試験へのサポートを行っている。</p>			
<b>2. 教育の理念・目的 (なぜやっているか：教育目標)</b>			
<p>本学の教育理念にある「誠実で協調性のある、心身ともに豊かでたくましい実践力を持った人材」を育成したいと考えている。本学では保育士・教師・看護師・リハビリ専門職等の対人援助職を育成している。対人援助職とは、人と直接関わりながら対象者を支援する職業であり、人への共感力や誠実さ、感情調整力が求められる。また、正解がひとつではなく、支援等が長期に渡る可能性があるため、不確かさに耐える力が求められる。さらに、対象者との関係性そのものが支援につながるため、より深い自己理解が必要となる。以上より育成したい学生像としては、人間教育学部においては一人ひとりの子どもや保護者と専門家として誠実に向き合い、さまざまな関わり合いの中で、喜びだけでなく苦しみにも共感し、発達促進的に支援し、なおかつ共に成長していける保育者を育成したい。また、良い時も悪い時も自らの状況を受け止めるための自己理解力や心の柔軟性、忍耐力をもった人になってほしいと考える。そのためには正しい知識と人間性が必要であり、生涯を通して、変化を怖れず、学び続けることの大切さを知り、それを実践できる人材を育成したいと考えている。</p>			
<b>3. 教育の方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)</b>			
<p>○学生との接し方</p> <p>学生とはつねに誠実に向き合い、学生の話をよく聞くことを心がけている。授業では教授内容が学生にきちんと伝わっているか、学生の視点を持ちながらすすめるようにしている。どの授業においても、パワーポイントと穴埋め資料を準備し、見やすさや書き込みやすさを考えて作成している。教示の際は学生に伝わる言葉を考え、質問に対しては丁寧に応答するとともに、学生自らが考え、答えを導き出すことができるよう心がけている。</p> <p>○授業における工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事例学習およびグループワークの実践：「幼児教育相談支援」および「子育て支援」では、教育相談や子育て相談、児童虐待の場面等の事例をもとに、保育者として適切な理解と関わり方について全員で考える事例学習を重視している。まず、自分がその立場だったらどのように感じ、考えて行動するかを各自で考え、文章にした後、隣同士やグループでディスカッションを行い、最後に全体に向けて発表する。この方法により、他者の多様な考えを知り、自らの考えと照らし合わせることで、保育者としての思考力や対応力を高めることができると考えている。</li> <li>・ロールプレイの実践：「幼児教育相談支援」「臨床心理学」ではカウンセリングの傾聴技術を学ぶ。そのため、その単元ではペアまたは3人一組になり、「話を聴く姿勢・聴かない姿勢」を相互に体験したり、「相談者」「保育者」「観察者」となって実際の相談場面を体験したりする。実践後は、まず振り返りシートに自らの体験を記入し、その後、各自のシートをもとにグループで話し合う流れで実施している。この学びを通してメタ認知を賦活させ、自己理解を深めるとともに実践力につながるよう工夫している。</li> <li>・ネットや新聞記事における子ども・子育て関連のニュースやトピックスの発表：「子ども家庭支援の心理学」において、授業の冒頭に1～2名ずつ、自分が興味をもった子ども・子育て関連のニュースやトピックスの資料を作成・発表し、意見や感想を述べる時間をつくっている。子ども・子育てに関する時事問題に触れるとともに、人前で発表したり、他者の意見を聞く経験の蓄積になると考えている。</li> </ul>			

・振り返りシートの活用：単独担当の科目では、ほぼすべての授業で穴埋め資料を配付し、その最後に、そのプリントでの学びを振り返り、記入する欄を設けている。そのすべてに目を通し、できるだけ一言コメントを入れて返却するようにしている。

以上のように、授業では知識の習得とともに思考することや対話することを通して学びを重視している。なお、臨床心理士・公認心理師として自らのスキルの維持向上に努めるため、大学教員の傍ら子ども家庭相談の臨床実践を継続している。学会やセミナー、複数の定期的な研究会や勉強会に参加し、自ら学び続けることを実践している。

#### 4. 教育の成果（どうだったか：結果と評価）

○授業評価アンケートの総合満足度（5点満点）および自由記述より

<前期の専門科目>

・「幼児教育相談支援」総合満足度4.17（回答者12名）自由記述：「プリントが見やすくまとめられていて見返しやすい」「声が聞き取りやすい」「先生が生徒のことをよく見て授業していて、ロールプレイをしたり、音読や考えを当てていて、集中して授業を受けることができた」などの肯定的な記述があった一方で「文字の色がごちゃごちゃしていて、何処を書けば良いか分からない」「スライドをすすめるのが早い」などの記述もあった。

・「子育て支援」総合満足度4.09（回答者11名）自由記述：「グループワークがあったから良かった」「ビデオを見る時間もあって、事例のイメージがしやすかった」「資料を多様に使っていてよかった」などの記述があり、改善を求める記述は特になかった。

以上のように前期の2科目は全体結果の総合満足度4.08を少し上回ったが、例年に比べると低い値であった。授業ではパワーポイントと書き込み式のプリントを併用しているが、教えたい内容や強調したい部分が増えて、追加することによりスライドが見づらくなっていたり、急に口頭のみでの説明になったりして混乱する学生もいることに、今回のアンケートで改めて気づかされた。

<後期の専門科目>

・「子ども家庭支援の心理学」総合満足度4.0（回答者7名）自由記述は特になかった。

・「臨床心理学」総合満足度4.48（回答者31名）自由記述：「重要な部分がかっこ抜きになっていて勉強しやすく覚えやすかった。聴きたくて授業で楽しかった」「分かりやすいように説明してくださって、一人一人を見ている感じで聴きやすかった」「質問に答えてくれる」などの記述があった。「DVDの視聴によって乳幼児期の特性を理解しやすかった」との記述もみられた。一方で「分量をもう少し減らしてほしい」「スライドが早くて書けない時があった」「特に重要な部分を明確にしてほしい」「臨床の話をもっと聞きたかった」などの記述もみられた。

以上のように後期の2科目は、全体結果の総合満足度4.12と比較すると「臨床心理学」は大きく上回ったが、「子ども家庭支援の心理学」では平均値を下回る結果となった。本科目は前期の2科目と対象学生が同じで、内容が重複する部分がある。先にも述べたように、本授業では冒頭に子ども・子育てに関するニュースやトピックスのプレゼン発表を行っているが、それ以外にも学生が意欲的に授業に取り組む工夫の必要性が感じられた。

#### 5. 今後の目標（これからどうするか）

○授業の改善

・授業評価アンケートで指摘されたように、改めて教授内容を精査し、パワーポイントや配付資料を適切な分量に整理する。その他、毎時のポイントを明確にし、臨床の事例を増やすなどして、より学生の受講意欲を高め、満足度の高い授業を目指したい。

・特に「子育て支援」や「子ども家庭支援の心理学」の内容においては、法律や制度の改正が目まぐるしく、教えたい内容が毎年増えていくため、改めて内容を整理する必要性を感じた。今後、保育者による「子ども家庭支援」への期待は、より一層高まっていくと考えられるため、事例学習やグループディスカッションなどを増やし、実習や実践に役立つ内容にしていきたい。その際、テキストや資料にすでに掲載されている事例だけでなく、昨今の保育現場でよく出会う、時代の変化に即した最新の事例をリサーチし、学生に提示したいと考える。また、私自身の臨床実践について、秘密保持の原則を守った上で、どのように話せば学生の心に正確に伝わるかが課題であると考えているため、教員としての表現力も高めていきたい。

○短期的目標および長期的目標

短期目標は、先にも述べたとおりである。日頃から臨床心理士・公認心理師として自らのスキルの維持向上のため、子ども家庭相談の実践を継続している。また、学会やセミナー、複数の定期的な研究会や勉強会に参加し、自ら学び続けることを実践している。その最新の内容をできるだけ学生に届けられるようにしたい。

長期的目標としては、保育現場の求める保育者の資質や能力、およびそれらの養成方法を研究し、授業内容や学生支援に生かしていきたいと考えている。また臨床心理的援助の実践や研究を通して、保育者を目指している学生のみならず、リハビリテーションを学ぶ学生にも役立つ授業や学生支援を行っていきたい。

#### ・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

・シラバス、授業評価アンケート（本学HP公開中のため添付省略）

・学会、セミナー、研究会、勉強会への参加状況・・・令和6年度は、学会への参加は2回、オンラインによるセミナー（通年10回）、継続研究会（通年10回）、その中でカウンセリングの事例検討における事例提供2回、奈良県臨床心理士会主催の研修会、その他各種研修会に複数参加。

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	田原 喜宏
<b>1. 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)</b>			
<p>担当科目: 数学入門, 数学の世界, 確率・統計基礎, 確率・統計応用, 基礎ゼミナール, 教育実践力開発演習I                  その他学修支援: 数学道場(週1回)</p>			
<b>2. 教育の理念・目的 (なぜやっているか：教育目標)</b>			
<p>高等学校までの数学と大学での数学では違いを感じる学生も多いが, 実際には定義→定理→例題という流れは本質的に変わらない. とはいえ高等学校までの難しさは「難しい例題」であり, 大学の数学では「定義の理解の難しさ」が主眼に置かれる.                  中学・高校の教員として教壇に立つ場合においては, 例題だけでなくきちんと定義を理解することの重要性について理解を促すようにしています.</p>			
<b>3. 教育の方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)</b>			
<p>1年の科目(数学入門)において毎週課題を提示し, とくに定義をしっかりと理解できているかどうかを問う問題を課している.                  全員に違う問題を考えて欲しいところであるが, 流石に量と時間が追いつかないため同様の問題になっている.</p>			
<b>4. 教育の成果 (どうだったか：結果と評価)</b>			
<p>数学を単なる計算の手段としてではなく, 定義の本質を理解する学問であることは一部の学生には理解させることに成功したようである. また, 普段から演習問題をきちんと解く学生とそうでない学生の間に明らかな有意差が現れた.</p>			
<b>5. 今後の目標 (これからどうするか)</b>			
<p>定義の重要性について理解できた学生もいる一方で, 高等学校までの数学も覚束無いレベルであったり, 大学における数学の主眼を理解することができない学生も少なからず存在している. こういった認識を改め「学ぶ姿勢」について学ぶことを教育する方法を模索して行きたい.</p>			
<b>・ 必要に応じて根拠資料を添付 (シラバス, 授業評価アンケート等)</b>			
Empty space for attachments			

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	富山敦史
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>○学生に対して何を行っているか  「学びに困難を抱える児童生徒が、学ぶ喜びを喚起できる授業や支援の開発・創造」をテーマに教育・研究活動を行っています。  学生の学修には、</p> <p>①国語科の授業を児童生徒にとって魅力あるものにする、  ②学びに困難を抱える児童生徒に対する具体的な支援ができること、  ③これらの実現のために、時間をかけてじっくりと文献読解や調査、研究に持続的に取り組むことのできる資質、能力を自ら育てていくことを求めています。その前提として、私の授業においては、学生個々の特性に応じた学び方を重視したアプローチの構築に日々努力しています。</p> <p>○担当授業科目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・国語科教育法Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ</li> <li>・基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ</li> <li>・人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）</li> <li>・人間教育実践力開発演習Ⅰ・Ⅱ</li> <li>・教育実習事前事後指導（中・高）</li> <li>・教職表現力演習</li> <li>・教職実践演習（中・高）</li> <li>・教育実習Ⅰ・Ⅱ（中・高）</li> </ul> <p>○各種学生支援</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2023年入学生アドバイザー</li> <li>・校友会のメンバーに対するアドバイスや支援の実施（ボランティア）</li> <li>・ICTやSNSを使用した進路相談活動（教採対策指導・公務員、企業への就活指導）の実施</li> </ul>			
<b>2. 教育の理念・目的</b>			
<p>○どのような理念・目的等に基づいて行っているか  私の専門分野は、幼保から高校の教育臨床を根幹に、30年に亘る中学校教員の実践に基づく生徒の実態を踏まえた「国語科教育学」の構築、大学生の時からライフワークとして継続研究している「中国古典文学」（人としてどう生きるべきか、生き方を探究すること）、学校現場等における「読み書きに困難を抱える児童生徒への支援（ICT支援含む）」の3つを柱にしています。上記の専門分野を根幹に据えて、教育を学んでいる学生諸君</p>			

には以下の理念と目的をもって教育を進めていきたいと考えています。

・自らの教育理念と目的

教員の仕事とは、「子どもたちの自己肯定感を高める毎日の授業の提供と子どもたち個々との具体的な関わり」と「子どもたちがしあわせな未来を築いていくための可能性の追究」だと私は考えます。教員として一番大切なことは、「目の前の子どもたち一人ひとりを個人として、まるごと尊敬できること」であると考えています。すなわち、困難を抱えている目の前の子どもたちに、そのニーズに合った「学びの環境」をいかに提供するかが教員に与えられた使命だといえます。このような教員に成長していく前提条件としては、「子どもの目線に立てる」教員から具体的に「子どもに寄り添える」教員になること、真の「他者理解」が求められます。このことは「他者を理解できる力量が自分にはあるのだろうか」という問いを自分自身に突きつけるものであり、「自分が何者であるのか」という「自己理解」を自分自身に求めてくるもの、また同時に「他者理解」の限界をも認識できていることが必須だと考えます。「子ども理解」へのアプローチは、まず「自己を語ること」、そして「他者を語ること」が、最終的には自己を理解すること、目の前の他者を理解すること、「子ども理解」へと繋がっていく（ナラティブ・アプローチモデル）ことを認識できることだと考えています。

以上を踏まえて、常に「教育という営みにできることは何か」という問いを常に自身に問い続けられる教員（己の無力さや教育の力の限界を知るも希望を信じることをあきらめない）を共に目指していこうと考えています。そして、生徒も教員も共に自分の弱点をさらけ出しても、認め、認められる教育（ケアし、ケアされる教育、ありのままの「私」・「あなた」をまるごと受け止め合うこと）を学生諸君と共に創り出していきたいと願っています。

・価値観・信念

「教職」は、多様な背景や課題をもつ子どもたちが、それぞれの個性を活かして自立し、社会で他者と共に幸せに生きていく力を育む「対人援助職」です。様々な教育課題に対応できる最新の施設環境が整う本学で、お互いの課題を受け止め合える学友や親和的な教員たちと共に学生諸君の「教職」の夢を実現させたいと考えます。そのための前提として、学生諸君には、本学の最新の教育設備環境を活かし、一人一人の子どもの実態を踏まえた具体的な子ども理解、指導・支援、評価等を学び、「なぜそうなのか」という本質的な「問い」をもつことを大切にして、「どの子も取り残さない」「子ども第一」の教育を実現するために学修を深めて欲しいと考えます。まずは失敗を恐れずチャレンジすることを、私の全身全霊を傾けて応援します。この項の最後に、私の教育理念をあらわす言葉を中国の古典から引用して示します。

- ①『論語』子曰、不曰如之何如之何者、吾未如之何也已矣。【衛靈公第十五】
- ②『論語』子曰、不憤不啓、不悱不発、挙一隅不以三隅反。則不復也【述而第七 8】
- ③『論語』子曰、知之者不如好之者。好之者不如楽之者。【雍也第六 18】
- ④『莊子』知魚樂。【外篇秋水第十七】

### 3. 教育の方法

○どのような方法で2の実現を図ろうとしているか

・学生との接し方

合理的配慮の実現を含む学生個々の特性に応じた学び方を重視したアプローチの構築に努めています。

・授業の工夫（授業の方法、内容等）

どの授業においても学生の実態を踏まえ、学生の興味関心を喚起する課題の提供および学修事項の基礎基本となるものを知識理解に止めず、生きて使える技能として定着できる授業を毎回創意工夫を凝らし提供しています。

また、常にモニタリングを行い、全員による毎授業のリフレクションと対話的雙方向的授業の実現をめざしています。

○FD/SD活動等にかか

わる内外の研修会への参加（所属学会・研究会）

日本国語教育学会

- ・全国大学国語教育学会
- ・全国漢文教育学会
- ・日本中国学会
- ・中唐文学会
- ・日本杜甫学会
- ・東方学会
- ・日本漢字学会
- ・中国文化学会
- ・東山之會
- ・杜甫散文研究会
- ・日本LD学会
- ・発達性ディスレクシア研究会
- ・日本ESD学会
- 子どものレジリエンス研究会

○自らの専門分

野の成長

・杜甫散文研究会

会員として「唐故范陽太君盧氏墓誌」の注釈を担当（科研費の共同研究協力者として）→研究終了後出版予定

・日本杜甫学会会員

として、勉強出版から刊行予定の『アジア遊学』の「杜甫と安史の乱特集」において、「夔州における抒情の深化―「秋興八首」「詠懐古跡五首」の詩律と抒情」を執筆、出版社にて編集集中。

#### 4. 教育の成果

○その方法によりどのようなことが実現できたか

- ・課外活動におけるゼミナール活動の実現（各自の研究テーマを深め、就職活動にも資する多様なゼミ活動、例えば、各種学術研究会等への参加やICTを活用したオンライン教育懇話会での発表等を実施し、参加した学生諸君は将来への展望を得ることができました。
- ・達成できなかったことおよび今後の課題については、後掲の授業アンケートの結果にも表れているように、教員免許状を取得できる水準に到達するためには、学生自身の学修意欲が大きく左右します。また、理論や知識だけでなく、それらを教育現場で実際に活用していくには、身体にしみ込ませる必要があります。その前提としての授業における稽古や鍛錬が、学生諸君にとって大きな壁となっていることは否めない事実です。いかに興味関心を喚起する授業であっても、そこから生じた「問い」を探究することに自身で喜びを見出すことが肝要です。しかし、その道程は容易なものではなく、時間と忍耐が必要です。いかにこの一筋縄ではいかない探究の過程における学生諸君のモチベーションを維持していくための4つの観点（①共感【気づき、うなづき、思いやり】②寛容【受け入れ、ゆるし、愛すること】③関係性【関わる力、関係を創る力】④レジリエンス【落ち込みから立ち直る心の弾力性】）を踏まえた関わりができるかが、本学における私の大きな課題であり、日々試行錯誤の連続でもあります。

#### 5. 今後の目標

○短期的目標

1. 杜甫を中心とした唐代詩壇研究さまざまな困難に直面する度に、変容を遂げた杜甫の詩論、詩律を同時代人と比較することによって、同時代人には理解できなかった杜甫の革新性、先駆性についての研究。
  2. 中国古典（文学・思想）の叡智を学校教育へ普及させるための研究（レジリエンスの向上）。中国古典（文学・思想）が包含する「人はいかに生きるべきか」という叡智を中学校・高等学校の教育課程（国語科・社会科・道徳・探究等）に位置づけるための研究。
  3. 学びのニーズに対応する学習環境の構築と提供に関する研究（読み書き困難の支援）
- 平成28年「中教審答申」や平成29年告示「学習指導要領」で掲げられた児童生徒の教育的ニーズの多様化に応える配慮、支援を学校現場で具現化するためSociety5.0やGIGAスクール構想を踏まえたLearning Difference〈学び方の違い〉を重視した実践研究。

○長期的目標

「個性を尊重しながら各人の成長を促し、人類の未来と社会の発展に貢献する」という本学園建学の精神のもと、園児、児童、生徒、学生、教職員等すべての構成員が、互いの個性を大切に、お互いの強みを発揮し、成長できる学園を目指す質の高い本質に迫る教育・研究活動を行い、「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会実現のための国際目標であるSDGsの実現に貢献する。

ことばだけでなく、あらゆるコミュニケーション手段を働かせて、①共感（気づき、うなづき、思いやり）②寛容（受け入れ、ゆるし、愛すること）③関係性（関わる力、関係を創る力）④レジリエンス（落ち込みから立ち直る心の弾力性）の4観点を踏まえ、多様な考えや背景をもつ人と人とを繋いでいける学びの環境を構成し、人と繋がる喜びを実感できる教育を推進し、さまざまな「学び」を探究し続ける教員を養成する。

## ・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

○シラバス、授業評価案アンケートを参照。

○各種学生支援の内容

- ・ オンライン教育懇話会（月1回zoomによる開催 参加者：学生・現職幼保小中高教員、大学教員他）
- ・ オンライン授業研究会（学生の要望に応じて随時開催、授業構築法、生徒支援等）
- ・ 教員採用試験対策指導（学生の要望に応じて随時開催、板書指導、模擬授業、特別支援等）
- ・ 面接対策指導（学生の要望により随時開催、教員採用面接、公務員・企業採用面接）

○主な著書・論文

- ・ 書評 読字差異の可能性は無限 - 文字優先社会において「文字を読めない」とはどういうことか（書評：マシュー・ルベリー著『読めない人が「読む」世界 読むことの多様性』原書房）、週刊 読書人、2024年5月3日号

正岡子規「杜甫秋興八首」（短歌）の原典探索(1)、ポトナム 101(1176) 28-31、2024年4月

・ 読み書き障害の児童生徒の学習支援に資する教員用手引き書、公益財団法人日本教育公務員弘済会助成（2021年4月-2022年3月）、富山 敦史 (Atsushi TOMIYAMA) - 資料公開 - researchmap

・ 「能」は面白い！ 羽衣（DVD教材）、伝統音楽普及促進事業実行委員会：富山敦史、河村晴久、大倉源次郎、森田保美、有松遼一、藤田隆則、奥忍、永井正人、村上美智子、西村大輔、今里昌宏、仲道郁代、河村奈穂子、清水元美、西野春雄（富山担当範囲：解説の構成・執筆、指導上の留意点、学習指導要領との照合、指導計画の作成）、エイキョウビデオ、2020年3月

・ 高等学校教科書「言語文化（必修）」の短歌創作について、ポトナム 99(1156) 36-40、2022年8月

・ ブッククラブメソッドを活用した短歌の創作・鑑賞の試み、ポトナム 99(1152) 82-86、2022年4月

・ 橘小学校との連携による教育現場に根ざした現代的・実践的な教員養成に係る研究報告（授業支援）－授業支援を通じた学生の授業観の変容に着目して－ 富山敦史、佐野智子、芹沢拓実、袴田奈知、伊藤綾音、教育実践報告誌 5(2) 52-61、2022年3月

・ 『学習指導要領』「指導上の配慮事項」を具現化するために－授業で個別最適化環境を作り出すICT活用一、教育実践報告誌 4(2) 68-77、2021年3月

・ 「能」は面白い！中学生・大学生とともに「能」の魅力を考える、常葉大学教育学部紀要 (41) 325-348、2021年3月

・ 学びに向かう学習環境の提供－最適な支援を提供するために－日本国語教育学会、月刊国語教育研究 53(557) 32-35、2018年9月

・ 杜甫の「詩家自覚」異説：詩を残すということ、常葉大学教育学部紀要 (38) 55-68、2017年12月

・ どうすれば毛筆で上手く文字が書けるのか、常葉大学教育学部紀要 (38) 447-461、2017年12月

・ 杜甫と孟雲卿「三吏三別」における文学観の受容と対峙、奈良教育大学 次世代教員養成センター研究紀要第1号 1(1) 35-43、2015年3月

・ 「語り」で学ぶ古典学習～「能楽」「平家物語」の「語り」を通して～、奈良教育大学附属中学校 研究紀要 第43集 (43) 21-30、2014年10月

・ 学校ぐるみで取り組む漢字・語彙指導－教科書理解の礎となる漢字・語彙の指導、日本国語教育学会、月刊国語教育研究 49(501) 16-21、2014年1月

・ 対話を通して「読み」を広げ深める指導～多田孝志「対話とは何か」・池田晶子「言葉の力」を通して～、奈良教育大学附属中学校 研究紀要第42集 (42) 17-29、2013年10月

・ 生徒の学ぶ意欲を高める学校ぐるみの取組－小・中連携の視点から、奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要 Vol.22(22) 131-133、2013年3月

・ 夔州における杜甫「拗体七律」の試み、奈良教育大学国文 (35) 12-34、2012年3月

杜甫と郎官－詩人の自覚と足掻き－和漢語文研究 (9) 30-5、2011年11月

詳細は、<https://researchmap.jp/sallygarden/>を参照。

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	西江なお子
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>家庭科指導法／衣食住の理解／人間教育実践力開発演習Ⅳ／教職実践演習／人間教育学ゼミナール基礎／人間教育学ゼミナール応用</p> <p><b>【学生支援】</b>            担当する各科目の特性や到達目標に応じ、教職課程に求められる専門的知識・技能の確実な定着を図るとともに、学生一人ひとりの理解度や課題に応じたきめ細かな指導を行っている。授業では、講義形式にとどまらず、ディスカッションやグループワーク、模擬授業等のアクティブラーニングを積極的に取り入れ、学生が主体的に考え、発信し、協働的に学ぶ力の育成を重視している。            また、ICT機器を効果的に活用し、将来の学校現場で即戦力として活躍できる実践的指導力の育成を目指して支援している。</p> <p>「人間教育実践力開発演習Ⅳ」においては、複数の担当教員と緊密に連携し、教員として求められる資質・能力の体系的な育成に取り組み、理論と実践を往還させながら、教育現場で通用する実践力の形成を重視した指導を徹底している。</p> <p>人間教育学ゼミナールにおいては、必要に応じて保証人と連携を図り、学生が安心して主体的に学修に取り組める環境づくりに努めている。教職志望学生に対しては、教員採用試験に関する最新情報の提供に加え、教育時事問題への対応、面接指導、模擬授業・授業づくりの個別指導など、進路や課題に応じたきめ細かな支援を行い、合格に向けた実践的サポートを継続的に実施している。</p>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>「人を支える人になる」という理念のもと、誰一人取りこぼさない教育を基盤に、全ての学生が自分の可能性を信じ、自信をもって成長できる学びの場づくりを大切にしている。幼稚園・小学校教員としての経験を活かし、教職の魅力や責任を伝えるとともに、教育分野に限らず、社会のさまざまな場で人を支える力を育むことを重視している。授業・ゼミ・個別支援を通して、学生一人ひとりの強みを引き出し、人間教育学部で学ぶ意義を実感できるよう伴走し、専門性と人間性を備えた社会人の育成を使命としている。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p><b>【学生との接し方】</b>            学生一人ひとりの背景や目標に応じた個別最適な支援を重視し、自己実現に向けた丁寧な指導を行っている。教職志望の有無にかかわらず、学生が「自分の強み」や「社会での役割」を見出せるよう、日常的な対話や個別面談を通して伴走型の指導を実践している。            教員養成課程の特色を活かし、授業内では常に「現場の視点」で考える場面を設定するとともに、学生が受け身にならず主体的に学べる授業構成を工夫している。理解度や習熟度の差に対しては、個別対応やICT機器の活用等により柔軟に支援し、誰一人取りこぼさない学修環境の構築に努めている。</p> <p><b>【授業の工夫】</b></p>			

#### 家庭科指導法

家庭科の教育目的や教科の本質理解を基盤に、衣食住、消費者問題、環境課題など、児童を取り巻く現代的課題を多角的に考察させている。教材研究・指導案作成・模擬授業を段階的に課し、全学生に対して個別フィードバックを行うことで、実践に直結する指導力の育成を図っている。理論と実践を往還させる構成により、現場で活用できる授業構想力の形成を重視している。

#### 衣食住の理解

家庭分野に関する基礎的知識と実践的技能の定着を目的に、実技やグループワークを取り入れた体験型授業を展開している。家族や身近な人間関係におけるコミュニケーション、食育を踏まえた家事技術、環境配慮型の製作活動などを通して、生活を科学的に捉える視点の育成を図っている。

#### 人間教育実践力開発演習Ⅳ

コミュニケーション力や課題解決力など、社会で求められる基盤的能力の育成を目的に、教育課題や時事問題の調査・分析、グループディスカッション、模擬面接、模擬授業等を実施している。実践的な演習を通して、進路を問わず社会で活かせる力の育成を重視している。

#### 【FD・SD活動】

学内FD研修に積極的に参加し、授業方法やカリキュラム内容の改善に継続的に取り組んでいる。得られた知見は自身の授業設計に反映させ、教育の質保証と高度化に努めている。

#### 【専門分野の成長と教育への還元】

家庭科教育および消費者教育を専門分野とし、日本家庭科教育学会支部役員、日本消費者教育学会副支部長として研究活動を推進している。あわせて、科学研究費助成事業「汎用的な新たな『いのちの教育』の授業プログラムの開発～動物介在教育を基盤として～」の研究として、MR技術を活用した教材開発や授業プログラムの構築に取り組んでいる。企業との連携も視野に入れた産学連携による教材開発・実証研究を進め、教育現場に還元可能な実践モデルの確立を目指している。

学会活動や科研費研究を通して得られた知見は、「衣食住の理解」や「家庭科指導法」等の授業に積極的に反映させ、学生が最新の研究動向に触れながら主体的に議論・調査できる学習環境を整えている。これにより、研究と教育の往還を重視した授業実践を行い、学生の専門性と探究力の育成に努めている。

## 4. 教育の成果

具体的には、家庭科指導法における授業アンケートの自由記述欄には、「指導案の具体的な書き方やポイントが分かりやすかった」、「先生の声が聞き取りやすく、授業を受けやすい」、「指導案の書き方を詳しく説明してもらえたのがよかった」、「一つ一つ丁寧に指導してもらえ、とても学びやすい授業だった」、「学生主体の授業展開で、まさにお手本だと感じた」など、授業に対する満足度の高い意見が多数見られた。これらの回答から、授業において意識してきた「分かりやすく丁寧な指導」が学生に十分伝わっていたことがうかがえる。

数値データにおいても、総合的な満足度は4.69、毎時間の授業の要点の明確さは4.75、教員の話し方の聞き取りやすさは4.63と、いずれの項目も4.3を超える評価が得られた。これらの結果から、本科目に対する学生の満足度は概ね高く、授業内容および指導方法が学修効果の向上に寄与していたと捉えることができる。

今後も、個々の学生の実態を的確に把握し、必要に応じて個別支援を行いながら、学びの充実に向けた指導を継続していく。また、学生が教員として求められる資質・能力を着実に身に付けられるよう、丁寧で伴走型の教育実践を今後も推進していきたい。

## 5. 今後の目標

#### 短期目標

家庭科教育・消費者教育・いのちの教育に関する研究成果を、担当科目へ積極的に還元し、理論と実践が往還する授業改善を推進する。科研費研究や教材開発、産学連携で得られた知見を授業内容や課題設定に反映させ、学生が最新の教育課題に主体的に向き合える学習環境を整備する。

また、入学初期から各科目を通して教職の魅力や社会的意義を伝え、教員志望学生の拡大と学習意欲の向上を図る。模擬授業、指導案作成、個別指導を通して、教員採用試験突破に向けた基礎的学力と実践力の育成を重点的

に行う。

長期目標

家庭科教育・消費者教育・いのちの教育の研究を深化させ、社会実装可能な教育モデルの構築を目指すとともに、その成果を教育に継続的に還元する体制を確立する。産学連携・地域連携をさらに発展させ、実証的研究に基づく教育プログラムを開発・発信していく。

加えて、教員志望学生の質的向上を図り、高い専門性と使命感を備えた教育者を安定的に輩出できる教育体制の構築を長期的目標とする。学生一人ひとりの成長段階に応じた系統的支援を行い、自ら学び続ける教育者の育成に貢献していきたい。

・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス, 授業評価アンケート等)

・シラバス、授業評価アンケート(本学HP参照)

学部・学科	人間教育学部	氏名	林 悠子
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>人間教育学部乳幼児教育専修の教員として、乳幼児教育専修専門科目である「子どもと表現(体育)」「子どもと表現の指導法」「教職実践演習(幼・小)」「教育実習事前事後指導」「教育実習(幼)Ⅰ・Ⅱ」を担当し、幼稚園教諭・保育士資格の取得を目指す学生らの指導を行っている。また、小学校専修専門科目である「運動・健康の理解」、音楽専修専門科目である「音楽表現ⅠB(リズム&amp;ダンス)」を担当している。</p> <p>自身の専門領域であるスポーツ科学・体育学をベースにして、乳幼児教育における「表現」「健康」に関わる領域、次の発達段階である小学校における「体育」のみならず、広く身体と心の発達や、身体表現と音楽表現に関わった分野を担当している。また、学生の実践力や乳幼児教育についての専門性を高めるべく、教育現場と連携をしながら教育実習事前事後指導ならびに教育実習を担当している。3年次生からの「人間教育学ゼミナールⅠ(基礎)」「人間教育学ゼミナールⅡ(応用)」を通じて、学生のアカデミックスキルを育てると同時に社会人としてのスキルを養うべく学生の進路支援を行っている。今年度から女子バスケットボール部の顧問を務め、人間教育学部と保健医療学部の両学部にも所属する学生らの部活動が円滑に行えるよう、チーム作りの支援となるよう面談をし公式戦への帯同を行うなどしている。</p>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>本学の教育理念には、「現実に立脚した学術の研究と教育を通じて、明日の社会を開く学識と実務能力を兼ね備えた指導的人材の育成を目指し、時代の進展に対応し得る広い視野と創造性をつちかい、誠実にして協調性のある心身ともに豊かでたくましい実践力を持った人材を養成する」と掲げられている。この理念を深く胸に刻み、特に“学識と実務能力を確かな力として身につけた学生”を育てることに使命感を抱いている。</p> <p>私自身の専門であるスポーツ科学・体育学、そして心理学の視点からも、心身の健全さと豊かな人間性を兼ね備えた学生を育成したいという思いが強く、知識だけでなく、人としての強さやしなやかさを育み、未来の社会を力強く切り拓いていける人材を送り出したいと考えている。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>学生が「学識」と「実務能力」を確かな力として身につけるためには、まず基礎的知識の定着が不可欠であると考えている。そのため、教科書や参考資料を丁寧に読み込み、重要な内容を的確に要約する力を育てるべく、レジュメの構成や学習課題に工夫を凝らしている。</p> <p>また、「子どもと表現(体育)」「運動・健康の理解」などの科目では、理論と実技を一体的に扱うことを重視している。幼児や小学生を対象とした体育実技では、その運動の多くが学生自身がすでにできているため、つい「考えずにただ動く」「ただ楽しむ」状態になりがちである。そこで、なぜその運動を行うのか、どのように指導すべきか、どんな意図やねらいがあるのかなどを常に言語化させることを大切にしている。視覚的な情報に頼りがちな現代の学生に対し、深く思考し、意味を理解しながら実践できる力を育むことを目指している。</p> <p>さらに、学生が言語化したレポートを分析し、その成果を学会発表としてまとめることで、自身の教授法や授業内容を客観的に振り返り、改善につなげている。教育実践を研究として循環させることで、より質の高い学びを学生に提供できるよう努めている。</p>			
<b>4. 教育の成果</b>			
<p>毎年度、「子どもと表現(体育)」における学生評価では、「実技も教室の授業も楽しい」、「遊びをグループで考えるのが楽しい」と概ね好評である。「子どもの表現の指導法(体育)」では、指導案を作成し、個人またはペアでの設定保育を行い相互評価をすることで、保育内容の理解や指導方法の理解が深まっている。</p> <p>「運動・健康の理解」においては「スライドの文字数が多い」「記述が多い」との意見があり、学習指導要領解説や体育科教育学についての講義の部分では難解で繰り返しとなる内容も多いため、簡略しつつわかりやすい講義内容に気をつけたい。運動実技においては、三つの柱に応じた毎時の目標と内容を説明し、実践を経て、活動の振り返りをレポート報告をさせることで、教師としての視点や指導のポイントを改めて学習することができている。</p>			
<b>5. 今後の目標</b>			
<p>これまでも登美ヶ丘幼稚園・小学校・中学校・高等学校との間で授業見学や教育実習の受け入れなど一定の交流が続けられており、幼稚園から高等学校へとつながる発育発達の流れを一貫して捉えられる環境は本学ならではの貴重な資源である。今後はこの大きな強みを最大限に活かし、継続的な授業見学や子どもの見守り、教育支援など、日常的に連携できる体制をさらに発展させていきたい。</p> <p>将来的には、この環境を活かして子どもの発育発達を長期的に追跡する縦断的研究を実施し、教育現場に還元できる知見を積み重ねていくことができればよいと考えている。</p>			
<p>・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス, 授業評価アンケート等)</p>			
<p>○「子どもと表現(体育)」「運動・健康の理解」シラバス参照</p>			

# 奈良学園大学ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	松岡克典
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>本学において、主に小学校教諭免許取得にかかわる科目を担当している。特に、公立小学校・国立小学校・私立小学校の教育現場の実務経験を生かし、授業のねらい、指導案作成の仕方や指導の在り方、子どもの様子、保護者の対応など、実践教育の基礎について具体的に指導している。</p> <p>本年度は、人間教育学部の科目として、「算数科指導法」「数の理解」「人間教育学ゼミナールⅠ」「人間教育学ゼミナールⅡ」「卒業研究」「教育方法・技術論A」「教育方法・技術論B」を単独で開講しており、「人間教育実践力開発演習Ⅲ」「教職実践演習」「教育実習事前事後指導」「教育実習Ⅰ」「教育実習Ⅱ」はオムニバスまたは共同で開講している。</p> <p>専門分野が算数教育であるため、実践に役立つような教材研究の仕方や教師の働きかけについて具体的に伝え、基本的な概念から捉え直すようにし、小学校教員となった場合に基本的な視点から捉える考え方を身に付けさせようとしている。</p> <p>2024年度の委員 教職課程保育委員会・IR情報活用推進委員会</p>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>教育とは人間愛であるという立場で進める。それは、31年間小学校で実践教育を行ってきた経験から大切なことだと学生に伝えたいからである。教師は、担任になると決まった瞬間から、全く知らない子供たちであっても、全力をあげて尽くそうとする。この「人間愛に基づく教育・指導」を、実践でも生かすことができるよう、多くの具体的な場面を取り上げ、より望ましい人間愛に基づく指導法について考察していくようにする。</p> <p>私は、本学の教育活動において、以下の3点を重視している。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 小学校教育に関する専門的知識と実践力を身につけること</li> <li>2) 子どもや家庭、保護者を取り巻く状況など、社会の出来事に関心をもつこと</li> <li>3) 学びを通じた自己の成長を意識すること</li> </ol>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>上述の教育理念を達成するため、例えば1年次後期の必修科目「数の理解」では、次のような授業を行っている。</p> <p>この科目では、小学校算数科で扱う教育内容の背景や関連内容を中心に扱い、主体的・対話的で深い学びに繋がる授業づくりのための教材研究の手がかりが得られるように、具体的な活動を取り入れながら考察していく。</p> <p>授業の際は、実際に小学校で使用している教科書や学習指導要領解説の該当ページを示し、書かれている内容の理解や行間をよむということを意識させるようにしている。また、算数科の授業DVD視聴を通して、実際の授業の様子や子どもの考えを具体的に学ぶことができるようにしている。そして、アクティブアカデミーのwebフォルダに授業の内容を掲載し、いつでも授業の振り返りができるようにしている。また、毎時間「小テスト」を行い、前時の学修内容の理解を深めている。さらに、「課題レポート」を提出させ、本時の復習と次時の予習に取り組みさせるように工夫している。</p> <p>現在の教育現場の実態を把握するために、公開授業や研究授業に積極的に参加し、様々な小学校と交流を深めている。</p> <p>自らの専門分野の成長のために、学会での発表や、論文投稿を行い、研究の成果や方向性を確かめている。</p>			

#### 4. 教育の成果

2024年度前期「算数科指導法」の授業評価アンケートにおいては、全体結果の平均を少し上回る結果であった。模擬授業の指導や普段の授業でも学生の反応を確認しながら、場に応じた指導ができたという手応えがあった。また、授業時間外の学習の必要性を伝えること、具体的な指示、授業態度に対する指導などが、昨年度と比較して向上した。

学生全員に模擬授業を実施し、学生の個々の学びの様子を把握できるようになったことが大きい。今後も全体と個のさらなる指導方法を身に付けたい。そして、意欲や興味を持続させる工夫をしていきたい。

毎回の授業を振り返り、学生の実態に即した授業内容および方法を検討しながら、緊張感を持って教育改善に取り組んでいる。そして、学生を認める教育にこころがけながら教師養成教員としての自覚および責任感を持って教育に携わっている。また、学生の意欲・態度を引き出す授業となるように努力している。そのためには、学生と授業担当者との信頼関係が重要であると捉え、授業はもちろん授業外においても学生とのラポールを築くことができた。

#### 5. 今後の目標

##### ○短期的な目標

- ・授業担当科目「算数科指導法」の充実  
教育者としての表現力についての学生の理解を深め、学生の主体性をさらに引き出す授業を目指したい。
- ・授業担当科目「数の理解」の学生理解度の向上  
算数を学ぶ学生の理解を深め、授業力の基礎となる算数教育を促進したい。
- ・学生指導の徹底  
学修成果の向上につながる学生個々の指導を徹底したい。教員採用試験の合格率を上げる。

##### ○中・長期的な目標

- ・大学教員としての資質・能力の向上
- ・奈良学園小学校との連携推進
- ・算数科授業デザインの開発をテーマとした研究推進

#### ・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス, 授業評価アンケート等)

・毎回の授業を振り返り、学生の実態に即した授業内容および方法を検討しながら、緊張感を持って教育改善に取り組んでいる。そして、学生を認める教育にこころがけながら教師養成教員としての自覚および責任感を持って教育に携わっている。また、学生の意欲・態度を引き出す授業となるように努力している。そのためには、学生と授業担当者との信頼関係が重要であると捉え、授業はもちろん授業外においても学生とのラポールを築くように取り組んでいる。

- ・いくつかの科目についてのシラバス本学Webサイトに公開されているシラバスを参照のこと。
- ・各種学生支援の内容 Active Academyに登録されている指導記録を参照のこと。
- ・研修会や学会へは毎年複数回研修会や学会に参加を行っている。
- ・いくつかの科目についての授業アンケート等本学Webサイトに公開されている授業評価アンケートを参照のこと。

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	森瀬智子
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>現在は人間教育学部の中等音楽専修の科目の他、小学校免許必修科目も担当しているため小学校専修、乳幼児専修他、小学校免許科目を履修している学生を指導している。中等音楽専修の学生については、71名在籍しており、必修選択の科目では多くの学生が3年次より声楽を履修している。中等音楽専修の教員希望の学生の多くが所属するゼミを担当している。</p> <p>【担当授業科目】①合唱Ⅰ(24人) ②合唱Ⅱ(11人) ③西洋の音楽史と理解(12人) ④諸民族の音楽(15人) ⇒中高音楽免許必修科目 ⑤声楽実技Ⅰ(14人) ⑥声楽実技Ⅱ(10人) ⑦声楽演奏法演習Ⅰ(14人) ⑧声楽演奏法演習Ⅱ(15人) ⇒中高音楽免許選択必修科目</p> <p>⑨音楽の理解(90人) ⑩音楽科指導法(44人) ⇒小学校免許科目</p> <p>⑪人間教育学ゼミナールⅠ(基礎)(6名) ⑫人間教育学ゼミナール(応用)(6名)⇒卒業必修科目</p> <p>⑬人間教育実践力開発演習Ⅳ(音楽専修は3名)⇒大学独自科目</p> <p>【委員会】財務委員会、登美ヶ丘連携部会では地域の方に対して演奏を披露する会にゼミ生と共に出演した。</p> <p>【学習支援】音楽専修学生を中心に希望者への授業外個別レッスンと講義、希望者(小学校専修、乳幼児専修等)への授業外ピアノレッスン、春休み、夏休みに音楽・小学校・乳幼児専修学生(希望者)教授2次試験に向けての弾き歌いとピアノ実技のレッスンの実施。アンサンブルサークル、音楽科授業研究会サークルの顧問。 【教育方針との関連】授業担当科目の①～⑧は、音楽科教員になる上で必ず身に着けるべき知識と技能が要求される科目であり、本学の建学の精神に照らし合わせても、必ず学生に身に着けさせる必要のあるものである。</p>			
<b>2. 教育の理念・目的</b>			
<p>自分で考えて行動できる自律した音楽を通して社会に貢献できる人材の育成、幼児・児童・生徒があこがれるロールモデルになる教員の養成を理念としている。元来、音楽とは楽しく、また人の心を癒してくれるものでもある。教員が音楽に親しみ音楽の素晴らしさを身をもって伝えることで、子どもは音楽を楽しめるのだと感じ、自ら様々な音を試し、音楽に触れようとする。それが自己の表現に結びつき、認められることによって自己肯定感も高まる。このような経験が生涯音楽に親しむ基盤となり、また音楽によってそれぞれの生活を豊かにすることにも繋がっていく。教員となる、又は音楽に関する仕事に携わる学生には、楽しさを伝えられるだけの音楽の技能とそれを伝える手法を獲得させることを常に意識している。また、教員採用試験合格水準の専門知識の習得を支援することを常に考えており、授業の中で学生が刺激あって相互に獲得できるようなシステムの構築を目指している。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の自律を促すために、「自分が今何をやる時か考えて行動する」ということを、教員が問い続けたことで、中高生が変容していったことを実務家教員の経験として伝え、学生にもこれを問い続け自律を促す。</li> <li>・ロールモデルとなる教員養成のために、学びたいと学生が望めば、惜しみなく自分が得てきた音楽教育の技を伝え、音楽技能を高めたいと望めば、レッスンも幼・小・中専修問わずに行っている。また、あこがれがあこがれを生むため、まず教員は楽しんで音楽を教え、子どもと音楽を一緒に楽しむための技能が必要であることを伝えている。</li> <li>・学生同士であこがれがあこがれを生むように、学び合い、刺激し合う関係性を育めるよう、協同学習を柱とした授業を紹介、展開している。深い学びに通じる一人ひとりが役割分担と責任をもった協同学習については、学生も効果を感じている。</li> <li>・協同学習に長年取り組んでいる学校の音楽科の研究授業の指導助言者を務め、関西のいくつかの自治体の音楽研究部から協同学習や歌唱・合唱・鑑賞等の授業作りの講師を依頼されることから、今年度はある自治体が主催している作曲家による中学校共通教材の楽典分析の講習会で教員の中に混じってゼミ生も研修を受けさせてもらえるように仕組んだ。教員と共に学ぶ経験によって、学生はより教員になりたいという気持ちを強くし、学ぶ楽しさを感じ、教材研究に興味をもって取り組むようになった。</li> <li>・専門分野においては、学会で得られた新しい知見を取り入れ、30年間蓄積してきたメソッドを見直すことで、歌唱発声における新しいアプローチ方法を実践し、効果を得ることができた。3月には専門分野の声楽と合唱のプログラムでチャリティーコンサートを主催し、ホールが1か月前には満席になるほど盛況で、赤十字に寄付を行った。この演奏会が生涯音楽について考えるきっかけや、音楽の楽しさを伝える方法の示唆を学生に与え、卒業演奏会にもつながるようにと考えており、今後はチャリティーの演奏会に学生が企画演奏する舞台の実現を目指す。</li> <li>・FD/SDの学内外の研修においては時間が許す限り参加し、学び続けている。</li> <li>・授業の工夫(授業の方法、内容等):協同学習を柱として音楽の授業を仕組んでいる。特に音楽科指導法や音楽の理解、や西洋音楽史等においては一人一役を明確にし、協同学習では何について自分がどのようにどれだけ貢献しなければいけないのか、ということの理解を促し、積極的に小集団に関わることで学生が達成感をえられるように課題を工夫している。</li> </ul>			

#### 4. 教育の成果

小学校免許科目『音楽科指導法』では、学生の入学時での音楽の理解の差を感じていたため、昨年度までの内容に毎回数分でも鍵盤を弾ける時間を取り入れた。その結果、初回の授業では音符について苦手意識をもっていた学生が、最後には科目の達成目標の一つである簡易伴奏で弾き歌いをすることができる姿が見られた。このことよって今まで音楽に触れていなかった学生も、本人にその気があり、丁寧に取り組むと、半年でもそこまで力をつけることができるということが明らかになった。まだ不十分な学生に対しては、補講期間を設け、日頃ピアノに接していない学生も1曲は共通教材の弾き歌いができるようマンツーマンで指導を行った。また、授業での学生の音楽の理解度から、音楽力を調査した後各グループの力が均等になるようにグループ分けをし、協同学習を効果的に進めることのできる工夫を行った。同じく必修の『音楽の理解』についても同様の方法で協同学習を取り入れた。学生のリフレクションからは、4人で協同して課題を進めていくため、楽しんで課題解決ができ理解を深めることができた等の記述が見られた。授業アンケートでは(『音楽科指導法』授業評価総合4.44点)(『音楽の理解』4.52)で学部内全科目平均は4.08の結果と比較しても高い評価であった。

講義形式である『諸民族の音楽』では、映像を視聴して考える等は自分ごととして集中して学習できたようである。しかし、協同学習の手法を使った授業の展開方法を伝えることはできたが、協同学習は個人が役割分担をもち、話し合い、課題を解決する方法であるため、授業の進捗と計画の関係から、協同で学習を多くとり進めることはできなかった。(授業評価総合4.75点)

実技を伴う科目の授業アンケートでは、声楽Ⅰは4.92、声楽Ⅱは4.88、声楽演奏法演習Ⅰは4.86、声楽演奏法演習Ⅱは4.7、合唱Ⅰは4.6、合唱Ⅱは4.56、という結果となった。学生からは、呼吸法から発声への理論と実技のつながりが明確で、どのようにすればよいのか具体的に分かり易く歌が上手くなる、と好評である。大学入学まで全く声楽の経験のなかった学生4人が学内オーディションで選ばれ、卒業演奏会では声楽を選び披露した。『西洋音楽史』では、映像資料も好評であった。また音楽の指導案の書き方も理解でき、鑑賞の授業の方法が分かったという感想もあり、この科目も高評価であった。

#### 5. 今後の目標

【授業の改善】・音楽科の協同学習の手法を学生にもっと学びたい、と意欲を持たせる為に、学生が興味をもった小学校音楽で使う常時活動の言葉と同じくらいの頻度で学生に協同学習について話をし、紹介していく。効果が見えてくると、学生も自律して授業時間外にも学修に取り組むことが増える。徹底してこの手法を学生にマスターさせるために協同できる授業では毎時間協同の課題設定を行う。

・音楽教員の研修会で協同の授業の課題の与え方等を説明し実践した際、ぜひ取り入れたいと好評であったため、音楽科が協同学習を取り入れるための指針となるような協同学習の音楽教員向けのテキスト作成を目指す。領域別にし、内容は学生も使えるものとし、学内の授業でも使用できるものとする。【教育活動で実現したい目標】(短期目標)

・歌唱については、生徒のレベルに合わせたポップスを用いた協同学習の単元を考え、実際学生に体験させ、学習の自律を目指す授業実践を学生と共にを行う。2年次の『諸民族の音楽』や『西洋の音楽史と理論』においては、協同学習の手法を使った授業の指導案を作成し現場で実践を行う。またゼミでは協同学習の手法で学習を進めた後、その手法を用いた中学校の授業見学の設定をする。その第一段階として、私が指導助言を務める協同学習の手法を使った音楽科授業の研究会へゼミの学生とともに訪れたり、教員の研究会にも学生を引率している。このような学生が学ぶことのできる仕組みを構築する。次年度は卒業生が教員を勤める学校で授業実践を行う予定である。ゼミの学生が作成した協同学習の手法を用いた鑑賞領域の指導案を中学校や高等学校の音楽の授業で実践し、検討⇒改善を行うことを繰り返し、新規性のある鑑賞授業を学生と共に創造する。このサイクルを定着させたい。教育活動の実践を学会で発表する。

・音楽専修学生発案の第2回演奏会のマネジメントをゼミの4回生で引き続き行った。昨年度より、学生主導で企画が進むようになってきたため、次は集客力のある演奏会に成長していくことを目指す。(長期的目標)

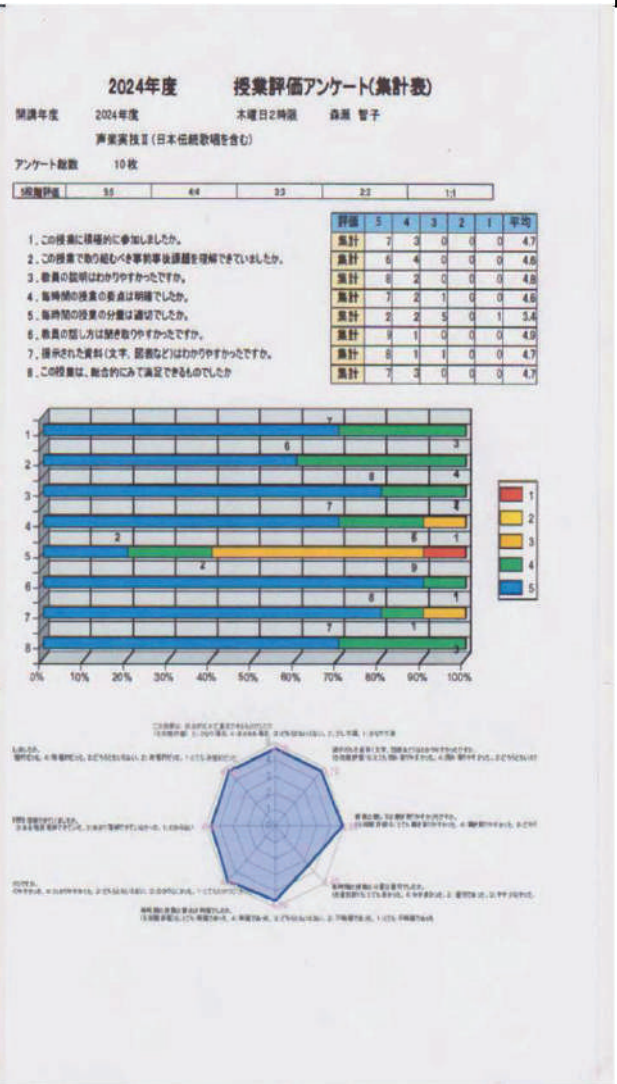
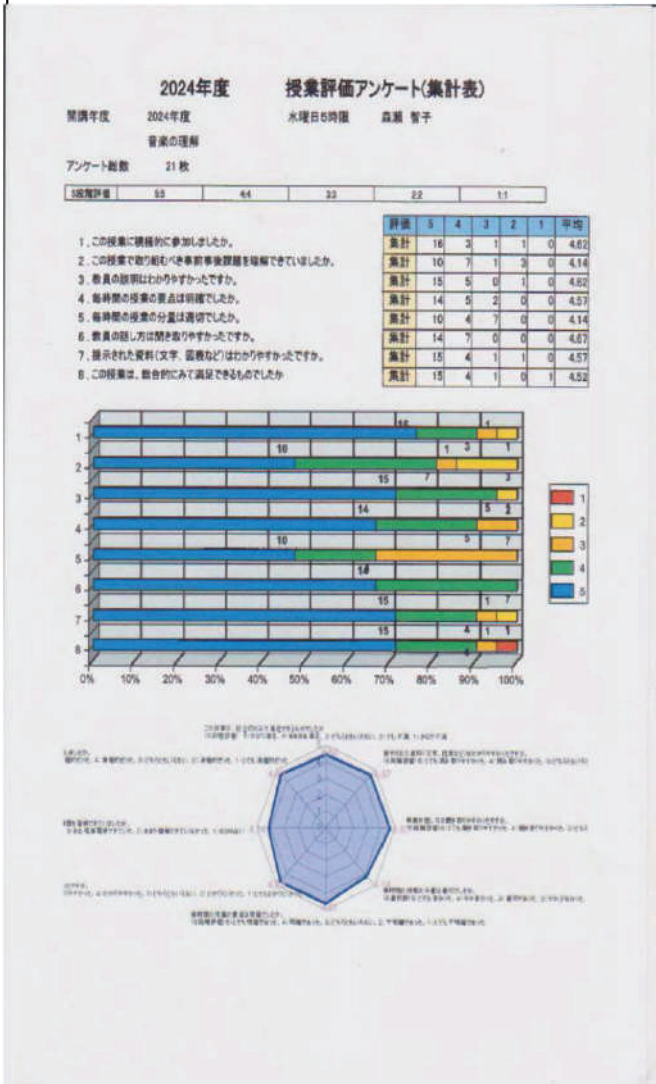
・音楽科の新規性のある授業案集を編纂する。音楽専修から音楽科教員として毎年5名以上が巣立ってくれるように、音楽科教員養成のカリキュラムの見直しと支援方法の構築を目指す。

・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス, 授業評価アンケート等)

【学生支援内容】・常に学生が声を掛けやすいように研究室の扉は開き、いつでも学生対応ができる状態を整えている。学生から希望又は、学修が必要な学生に対してはこちらから声を掛け、授業の空き時間や長期休暇に個人指導や補講を行っている。内容は声楽やピアノ、弾き歌い、琴、ギター、合唱指揮法、西洋音楽史、諸民族の音楽、教員採用試験の過去問講座など多岐に渡っており、個に対して必要な指導を行っている。・ゼミ生に対しては時間の許す限り、遠方でも教育実習を参観することになっている。また、少しでも力がつくように積極的に音楽科教員として必要なものであると判断した場合は文楽やピアノ独奏、ミュージカルなど学生と一緒に本物を鑑賞する機会を設けている。

【研修会や学会への参加状況】・研修会や学会には可能な限り参加しており、発表も行う予定である。

【授業評価アンケート】



【授業シラバス】

講義科目名称： 音楽科指導法

授業コード： 213102 213202

英文科目名称：

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	2	2	選択
担当教員			
森瀬 智子			
水・1	KC3e206	DP1・2・4・5・6	
添付ファイル			
授業の目標・概要	まず実践研究の授業の視聴や解説により「主体的・対話的で深い学び」をめざした音楽科の授業についての理解をする。次に、グループで学習指導案を作成しそれに基づいた模擬授業を行うことにより実践力を身に付ける。さらに、授業後は質疑応答と指導助言の時間を設け工夫されていた点や改善点などについて全体で討議し、それを参考にした改善指導案を作成する。		
学習の到達目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主体的・対話的で深い学びに向けた音楽科指導の実現のため「音楽科教育の意義と役割、目標と内容、学習指導計画、指導方法と評価の基本」等について理解することができる。</li> <li>・音楽的な見方・考え方を働かせるために、社会や生活における音楽的事象について関心をもち、それらと豊かに関わるための資質・能力を育てる教材研究を行うことができる。</li> <li>・音楽的活動を効果的に取り入れた指導法についての理解を深めることができる。</li> </ul>		
授業方法・形式	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. それぞれの学習テーマに対して、テキストや補助資料を活用しながら授業を進めていく。</li> <li>2. 必要に応じて、取り上げるテーマに関するディスカッションを行う。</li> <li>3. 協同学習の手法を用いる。</li> </ol>		
授業計画	<p>第1回 音楽科教育の目標と内容 学習指導要領の総則及び音楽の目標、内容などを基に学習指導要領のポイントについて</p> <p>第2回 学習指導要領に基づいた学習指導計画 学習指導計画の作成上の留意事項や単元指導計画、学習指導案の作成について</p> <p>第3回 主体的・対話的で深い学びをめざした、生活における音・音楽についての授業 実践研究に基づく授業をDVDで視聴し授業展開の概要を理解</p> <p>第4回 主体的・対話的で深い学びをめざした、社会における音・音楽についての授業 対話型鑑賞を導入した音楽科授業のDVD視聴による指導者が果たすべき役割についての理解</p> <p>第5回 音楽科の指導と評価 音楽科指導における学習過程に即した評価のあり方について</p> <p>第6回 音楽的な見方・考え方と生活の音・音楽との結びつきにおいて、曲想・音楽構造理解につなげる 教材研究（下学年の事例） 指導内容と既習内容との関連を明確にするための教材分析について</p> <p>第7回 音楽的な見方・考え方と社会の音・音楽との結びつきにおいて、曲想・音楽構造理解につなげる 教材研究（上学年の事例） 指導内容と既習内容との関連を明確にするための教材分析について</p> <p>第8回 下学年の音楽指導における音楽的活動とその指導 音楽的活動を効果的に取り入れた指導法とその留意点について</p> <p>第9回 上学年の音楽指導における音楽的活動とその指導 音楽的活動を効果的に取り入れた指導法とその留意点について</p> <p>第10回 音楽科の指導における効果的なICTの活用 音楽的な見方・考え方を育てる、音楽動画の作成・活用法について</p> <p>第11回 模擬授業演習(1) 音楽的な見方・考え方を働かせ、音楽的課題発見の段階に焦点をあてて追究</p> <p>第12回 模擬授業演習(2) 音楽表現を工夫、味わう段階に焦点をあてて追究</p> <p>第13回 模擬授業演習(3) 音楽活動の楽しさの体験を、音楽を愛好する心情につなげる段階に焦点をあてて追究</p> <p>第14回 模擬授業演習(4) 音楽に対する感性を育み、音楽に親しむ態度につなげる段階に焦点をあてて追究</p> <p>第15回 主体的・対話的で深い学びに向けた音楽指導科についてのまとめ 「音楽的な見方・考え方」の育成をめざす観点からの振り返り</p>		
成績評価の基準	毎回の小レポート(30%)、指導案作成・模擬授業(40%)、小テスト・定期試験(30%)		
課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎回の小レポートに対してコメントを記載し返却するので理解を深めること。</li> <li>・小テストでは解答例を開示するので復習に活用し、より理解を深めること。</li> <li>・教職履修カルテに成績の評価コメントが表示されるので、ふり返りに活用し、課題発見、知識・技能向上に努めること。</li> </ul>		

準備学習・復習及び授業時間外の課題	1. あらかじめテキストを読み、疑問については調べてわからないことを授業内で質問して解決する。(予習15時間) 2. 復習をする際には小学校教科書も参照し、学んだ事柄と関連させつつ教材についての認識を深める。(復習15時間) 3. 『小学校学習指導要領解説 音楽編』を参照し、指導内容を確認し、学習指導案作成に活用する。(作成15時間、修正15時間)
履修上のアドバイス及び留意点	「音楽科教育法」の基礎知識としての科目「音楽の理解」の楽典内容を理解していることが望ましい。指導案作成や模擬授業等において、協同的に課題解決できるようにグループでの活発な意見交換を心がけて授業に臨むこと。
教材・教科書	1. 初等科音楽教育研究会編 『改訂版 最新 初等科音楽教育法 2017年告示「小学校学習指導要領」準拠小学校教員養成課程用』(2020. 2) 音楽之友社  *既に 初等科音楽教育研究会編 『最新・初等科音楽教育法 2017年告示「小学校学習指導要領」準拠小学校教員養成課程用』(2018. 3) 音楽之友社 を購入している場合は、上記2. の購入は不要。 *前期「音楽の理解」で使用したテキストと同じテキストです。
参考書	授業時に示す。

授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ PBL (課題解決型学習)</li> <li>□ 反転授業 (知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業)</li> <li>■ ディスカッション、ディベート</li> <li>■ グループワーク</li> <li>□ プレゼンテーション</li> <li>□ 実習、フィールドワーク</li> <li>□ その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容 各自が役割をもった協同学習の手法を用いたグループ活動を行う。</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 双方向型授業に活用する</li> <li>□ 自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li>□ 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li>□ 他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ある</li> </ul> <p>実務経験の内容 中学校・高等学校で30年間音楽科の教員として教科の指導内容研究に取り組んできた経験や新任教員の指導員を務めた経験を活かした考えることのできる深い学びを目指した授業を展開する。</p>
-------	--

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	山田 明広
<b>1. 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)</b>			
<p>○<b>担当授業科目 (2025年度) :</b></p> <p>・漢文学入門 ・漢文学Ⅰ ・漢文学Ⅱ ・語学・文学総合演習Ⅲ (漢文学) ・漢文学特論 ・人間教育学ゼミナールⅠ (基礎) ・人間教育学ゼミナールⅡ (応用) ・基礎ゼミナールⅠ ・教育実習Ⅰ (中・高) ・教育実習Ⅱ (中) ・日本語表現Ⅱ</p> <p>・人間教育実践力開発演習Ⅰ</p> <p>○<b>各種学生支援:</b></p> <p>・社会・国際連携センターの運営委員として、本学提携校である屏東科技大学での台湾文化交流研修および蘇州科技大学とのオンライン交流会の実施と参加学生の指導を担当している。</p> <p>・中等国語専修1年次生 (2025年度) のアドバイザーとして、学生の学習面および学校生活面でのサポートをしている。</p>			
<b>2. 教育の理念・目的 (なぜやっているか：教育目標)</b>			
<p>○<b>教育の理念・信念:</b></p> <p>何事にも基礎が重要。基礎の集積が理解へとつながり、そして自発的学習や発展的学習へとつながり、最後には研究へとつながっていく。</p> <p>○<b>教育の目的:</b></p> <p>・専門知識や読解力をできるだけ身に付けさせることを通して、学ぶことによって新たな知識を得たり何かをできるようになったりすることの楽しさや喜びを伝え、それにより自ら学び・考え・研究する態度や能力を涵養する。</p> <p>・社会人として身に付けておくべき態度や知識を身に付けさせる。</p>			
<b>3. 教育の方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)</b>			
<p>○<b>授業の方法・内容:</b></p> <p><b>A, 漢文学関連科目〔漢文学入門、漢文学Ⅰ、漢文学Ⅱ、語学・文学総合演習Ⅲ (漢文学)、漢文学特論〕について</b></p> <p>①まず、漢文の基礎である漢文法・句形を講義形式で丁寧に解説し、演習問題に取り組みさせる。解説の際には、ただただ漢文の句形のみを扱うだけでなく、古典文法や現代中国語文法、漢字の特殊な読みおよび意味などにも言及し、できる限り覚えやすくなるように工夫する。また、漢文訓読独特の言い回しを身に付けさせるため、漢文の短文を暗唱させる。毎時間、課題として演習問題を課すとともに、さらに各単元が終わるごとに小テストを実施する。このようにして、漢文の基礎である漢文法・句形を習得させる。</p> <p>②次に、故事成語のもととなった文章から、戦国諸子百家の文章、漢詩、歴史、散文、小説などに至るまでの各ジャンルの漢文による文章を順に選んで読んでいく。同時に、関連する思想や文学、歴史的事象についても講義し、知識を身に付けさせる。学生には課題として事前にノートに書き下し文と現代語訳を書かせるとともに、分からない語句の意味を調べさせておく。このようにして、漢文の読解力を養うとともに、漢文読解に必要な知識を身に付けさせる。</p> <p>③漢文の読解力がある程度身に着くと、漢文の構造について講義した上で、返り点のみの文章や白文の読解に取り組む。これら1~3を通して、漢文を独力で読解できる能力を養い、ひいては漢文読解を伴う研究を行う能力を身につけさせる。</p> <p><b>B, ゼミナール〔人間教育学ゼミナールⅠ (基礎)、人間教育学ゼミナールⅡ (応用)〕について</b></p> <p>「国際理解に向けての日中比較文化研究」というテーマの下、</p> <p>①「人間教育学ゼミナールⅠ (基礎)」 (3年次生対象) においては、基本的な知識を得るべく、中華圏の文化および中華圏の文化と日本の文化との関連についての講義を行い、学んだことをまとめ、討論させている。また、適宜、フィールドワークを取り入れ、学んだことが机上だけのものにならないよう、できる限り実際に体験させている。</p> <p>②「人間教育学ゼミナールⅡ (応用)」 (4年次生対象) においては、学生個人が個別に設定したテーマについて調べさせ発表させている。また、特に希望する者には、卒業論文を書かせ、その指導も行っている。さらに、就職試験や面接に関する指導も行っている。</p> <p>○<b>学生との接し方:</b></p> <p>・学生が授業により積極的に取り組むことができ、さらに気軽に質問に来られるよう、授業においては、厳しく接するべき時には厳しく接するものの、基本的には穏やかな態度で学生に接し、時には雑談などを取り入れるなどして、教員と学生が相互にコミュニケーションを取りやすい雰囲気を作るよう心掛けている。</p> <p>・学生一人一人の個性や特性を把握し、それに合わせた対応をするよう心掛けている。</p> <p>・学生が問題を抱えた場合には、一緒に親身になって考えてあげるよう心掛けている。</p>			

#### 4. 教育の成果 (どうだったか：結果と評価)

○達成できたこと、できなかったこと：

・ これまでに数名の学生が、中学校ないし高校での教育実習の研究授業において漢文を主とする授業を行うなど漢文の授業を行うことのできる学生は育成することができた。しかし、自ら進んで漢文の作品を読んだり漢文の白文を独力で読解しようとしたりするような漢文に興味・関心を持ち進んで学ぼうとする学生はいまだ育成できていない。

#### 5. 今後の目標 (これからどうするか)

○短期的目標：

- ・ 漢文に関心を持ち、中学校ないし高校での教育実習においてある程度自信を持って漢文の授業を行える学生を輩出する。
- ・ 海外のことに興味を持ち、海外留学や海外との交流に関する活動に進んで参加する学生を輩出する。

○長期的目標：

・ できるだけ多くの学生に漢文の白文を独力で読解できるなど漢文に関する発展的な能力を身に付けさせ、ゆくゆくは高等学校国語科教員採用試験合格者、ひいては漢文を用いた研究を行う研究者となるべく関連の大学院へと進学する者を輩出させる。

#### ・ 必要に応じて根拠資料を添付 (シラバス, 授業評価アンケート等)

- ・ 学生評価アンケート
- ・ シラバス

学部・学科	人間教育	氏名	オチャンテ カルロス
-------	------	----	------------

## 1. 教育の責任

### ①外国語の指導（英語、スペイン語）

英語関連科目では4技能を活かした外国語指導を行っている。スペイン語の授業ではロマンス語の世界（言語と文化）を紹介し、日本語との国語比較を常に行っている。

- ・英会話Ⅰ（25人程度）
- ・英会話Ⅱ（25人程度）
- ・スペイン語会話（20人程度）
- ・スペイン語基礎Ⅰ（30人程度）

### ②小学校で外国語（英語）を指導行うための授業

小学校低学年では話す・聞くの指導、高学年では、読む・書くの外国語指導を行っている。

- ・外国語の理解（70人程度）
- ・外国語科の指導法・小学校外国語活動の指導法（70人程度）

### ③現代教育課題における異文化教育

多様化する日本の公立学校において、異文化教育、多文化教育の理解を深め、外国に繋がる子どもの背景と対応を学ぶ。

- ・現代教育課題D（学校における異文化理解）（32人程度）

### ④英会話におけるSA（スチューデント・アシスタント）の活動・教員を目指す学生をSAとして設け、英語指導力を身につけさせる指導を行っています。

SA活動を通して英語指導に自信が身につけ、後輩へのロールモデルとしての役割を果たしている。

### ⑤研究及びキャリア（進路）指導

- ・教職実践演習Ⅳ（20名程度）

### ⑥採用試験、英語対策、ICT指導、語学研修

- ・4回生対象に教員採用試験の英語対策講座をエクステンションの形式で行っている。
- ・4回生対象に採用試験で求められるICT力の指導を行っている。
- ・毎週火曜のランチタイムに参加自由型の英会話教室を行なっている。
- ・台湾文化交流研修の事前英語学習の学生指導・セブ島語学研修の事前英語学習の学生指導

## 2. 教育の理念

人間教育学部として「人間」または「良い教育者」目指すため、新しい時代において視野の広い学生の育成を授業で目指しています。

今後グローバル社会の中で多言語や他民族における国際理解、多文化共生へ

の理解（価値観）を深めることを常に意識しながら生活でき生の育成を目指し、近代社会における ICT 教育の円滑な適応能力の育成を目指している。

教育理念は、学生の自己肯定感を高め、自分の考えを持ち、それを他者に伝える力を育てることにある。そのために、学生が安心して意見を述べられる対話的な学習環境を整え、肯定的に理解される経験を積み重ねることを重視している。

学生が身の回りの課題や社会の多様なニーズに関心を持ち、多面的に物事を捉えながら円滑にコミュニケーションを図れる人間へと成長することを目標としている。また、学習内容が将来のキャリア形成や地域社会での実践につながるよう意識し、実生活との関連性を持たせた授業設計を行っている。

優れた教育者とは、すべての学生と誠実に向き合い、謙虚な姿勢で学び続ける教員であると考えている。学生一人一人のニーズを理解し、関心を引き出すことで学びへの意欲を高めることが、学生の自己肯定感の向上につながり、主体的な学習者の育成につながると考えている。

### 3. 教育の方法

#### 1. 工夫していることとそのねらい

本授業は 90 分間で構成されており、教員主体の一方向的な講義にとどまらず、学生が主体的に参加し、意見を共有できる時間を多く設けている点に特徴がある。ペアワークやグループワークを積極的に取り入れ、学生同士が話し合

いながら考えを深めることで、対話的かつアクティブ・ラーニング型の授業運営を行っている。授業後のアンケート結果からも、学生の授業への関心が高いことが示されており、対話的な授業の実現に一定の成果が見られる。

また、共有資料を活用した授業設計を行い、授業内容を振り返りやすい環境を整えている。ICTを活用して教材を配布・共有することで、復習を促すだけでなく、やむを得ず欠席した学生に対しても学習の遅れを最小限に抑える工夫を行っている。

スピーキング活動においては、学生の生活や関心に即したトピックを教材に取り入れることで、発言への心理的ハードルを下げ、自分の意見を表現しやすい環境づくりを意識している。さらに、ITリテラシーおよび人工知能の正しい活用方法についても指導し、情報を主体的に判断・活用できる力の育成を目指している。

これらの工夫のねらいは、学生が受け身ではなく、学びの主体として授業に参加し、互いの意見を尊重しながら思考を深めていく力を育成することにある。

## 2. 心がけていること

授業においては、学生一人一人の意見に耳を傾け、どの意見も尊重する姿勢を大切にしている。学生の個性や特徴を生かしながら授業を進め、進度についても常に確認し、理解度に応じた柔軟な対応を心がけている。

特に、発言が苦手な学生に対しては、無理に発言を求めるのではなく、グループ活動の役割分担や雰囲気づくりを工夫することで、全員がバランスよく参加できるよう配慮している。また、ICTの活用についても、過度に依存するのではなく、学習効果を高めるための補助的手段としてバランスよく取り入れている。

さらに、多文化理解や人権意識の醸成を重視し、学生一人一人の違いを認め合うインクルーシブな学習環境の形成を目指している。

## 4. 教育の成果

### ① 授業（教育活動）でうまくいっているところ

授業評価アンケートや学生のコメントから、学生との良好なコミュニケーションが授業運営の基盤となっていることが確認できる。学生が自分の意見を発言

できる場を確保することで、対話的教育の実践が進み、主体的な学習態度の育成につながっている。

また、パソコンやインターネットを活用しながら、ITリテラシーを意識した授業を行っており、ICTを過不足なく取り入れた授業設計が一定の成果を上げている。

## ② 授業（教育活動）の課題

一方で、課題（レポート）の設計については改善の余地がある。特に、人工知能の活用が進む中で、学生が安易に依存するのではなく、自ら考え、表現する力を養うための課題設定が今後の課題である。

また、やむを得ず欠席した学生への対応についても、さらなる配慮が必要である。教材配布だけでなく、授業内容の理解を支援する仕組みを整えることが求められる。加えて、内向的（introvert）な学生への支援についても、より個別性を意識した対応を検討していきたい。

## 5. 今後の目標

### ① 短期的目標

短期的には、対話的な授業形式が苦手な学生への対応を改善することを目標とする。具体的には、グループ構成に工夫を加え、学生同士の心理的距離を縮めるためのウォームアップ活動を授業の初期段階に取り入れる。これにより、発言への不安を軽減し、対話的活動に無理なく参加できる授業環境を整えていきたい。

また、授業中の学生の反応や理解度をより丁寧に把握し、必要に応じて活動内容や進行方法を調整することで、全ての学生が安心して学べる場を形成することを目指す。

### ② 長期的目標

長期的には、学生一人一人をより深く理解することを重視し、個人差や人間的な特徴、長所や短所を踏まえた指導を行える教員になることを目標とする。学生との継続的なコミュニケーションを通じて信頼関係を築き、それぞれの特性に応じた学習支援を実践することで、より効果的な教育活動につなげていきたい。

これらの取り組みを通して、学生が自己肯定感を高め、安心して意見を表現しながら成長できる教育環境を構築することを、長期的な教育目標としている。

- 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

- 現代課題教育 D (学校における異文化理解) シラバス (添付)
- 異文化コミュニケーション シラバス (添付)
- 授業アンケート (添付)

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	3	2	選択
担当教員			
オチャンテ カルロス			
木・2	KA3i311	DP4・5・6	
添付ファイル			

授業の目標・概要	<p>本講義では異文化教育の基礎を身につけると共に、「多文化社会」になりつつある日本の現状について学ぶこととする。また、公立学校に通うニューカマーの子どもたちの学校生活と現状を知り、外国にルーツを持つ子どもたちがどのようなニーズを抱えているのか、異国で生活する、そして異国で学ぶ難しさについて、教育での実践を例に理解していくこととする。学校における異文化的環境を肯定的な概念として捉え、「共に学べる」環境作りの重要性について言及する。</p>
学習の到達目標	<p>将来、教員を目指している学生が、学校における異文化と多文化教育の概要を理解する。徐々に増えている外国にルーツを持つ子どもたちの現状と背景を知り、彼らへの指導と支援の方法を考え、理解する。多文化教育のニーズに対応でき、文化や言葉の違いを超え、相互の違いを受け入れる教員の育成を目指す。</p>
授業方法・形式	<p>授業は講義形式を基本とするが、毎回異なるテーマを取り上げるため、議論などのグループディスカッションを行う。感想文の作成も行う。受講生が自発的に発言し、共に考える時間を持つ。グーグルクラスルームで課題等のマネジメントを行う。</p>
授業計画	<p>第1回 学校における異文化とは 授業の内容を紹介しながら、学校における異文化の実態について知る。</p> <p>第2回 異文化教育とは 日本における異文化教育の実態について概説する。</p> <p>第3回 日本の多文化化社会の現状と実態 入国管理局法令の改正による、外国人登録者数の増加や、来日している外国人労働者の問題について。</p> <p>第4回 EUなど移民受け入れ国の異文化教育の実態について</p> <p>第5回 ニューカマーの子どもたちの増加と実態 現在の公立学校に学ぶ日本語指導が必要とする子どもたちの実態について知る。</p> <p>第6回 ニューカマーの子どもたちの受け入れにあたって、学校運営上の課題と国際教室での成果</p> <p>第7回 ニューカマーの子どもたちの学校生活、文化について知る 外国にルーツを持つ子どもたちの立場から、彼らが抱えているニーズについて検討する。</p> <p>第8回 ニューカマーの子どもたちの言語取得問題 生活言語と学習言語について概説する。スペイン語の模擬事業を実践しながら、学生が異国で学ぶ難しさについて検討し、理解する。</p> <p>第9回 外国にルーツを持つ子どもたちの家庭と学校の連携の重要性 教育制度の違いを知り、学校からの便り・お知らせについて、分かりやすく伝えるための工夫を考える。</p> <p>第10回 外国にルーツを持つ子どもたちの高校への進学と将来への展望 進学するにあたって現れるジレンマとドロップアウトするケースについて概説する。</p> <p>第11回 皆に分かりやすい授業とは 事例研究を見ながら、「共に学べる」分かりやすい授業作りについて考え、検討する。</p> <p>第12回 学級担任としての役割 先生としての個人の認識とクラス運営での受け入れる環境</p> <p>第13回 教育委員会も含む学校組織で受け入れる環境 実践的な例を見ながら、都道府県の実態について概説する。</p> <p>第14回 国際理解教育とは 学校において、多文化交流を通しての気づき、互いの違いを受け入れ、多様な考え方を持つ子どもたちの育成を目指す。</p> <p>第15回 授業の総括として、これまで身につけた論述方法についてまとめる。</p>
成績評価の基準	<p>毎回の授業中に行う小レポートと毎回の課題レポートを中心に評価し、授業に対する理解度をチェックしていく。(30%) さらに、個別計画書の作成の緻密さなどを評価する。(30%) さらに学期末テストにおいて総合的な理解を確認する。(40%)</p>
課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	<p>グーグルクラスルームで課題のマネジメントを行う。</p>
準備学習・復習及び授業時間外の課	<p>授業中に配布するレジュメに参考書などを紹介するため、授業時間外でそれらを読んでくることをおすすめする。授業で学んでいく異文化理解の基礎的な知識を日常生活に活かして、行動に移してしていく。</p>

題	
履修上のアドバイス及び留意点	人間教育学の基礎に関する科目で学んだ知識を活かし、学校や教室の中の異文化を理解し、開かれた考え方を持ちながら、様々な指導の場面で活用する。日本で暮らす外国人、特に「日系ブラジル人やペルー人など南米出身の人たち」に関連するニュースや記事に目を通すことや、図書館またはインターネット等でニューカマーが抱えている問題について情報を得ておくこと。
教材・教科書	教科書は使用しないが、必要なプリントを配布する。また参考書も紹介する。
参考書	参考書として、宮島喬 外国人の子どもの教育：就学の現状と教育を受ける権利 東京大学出版会 2014 西山教行，細川英雄，大木充 「異文化間教育とは何かーグローバル人材育成のために」(リテラシーズ叢書4) くろしお出版 2015
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■PBL（課題解決型学習）</li> <li>□反転授業（知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業）</li> <li>■ディスカッション、ディベート</li> <li>■グループワーク</li> <li>■プレゼンテーション</li> <li>□実習、フィールドワーク</li> <li>□その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□双方向型授業に活用する</li> <li>■自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li>■他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li>□他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p>

英文科目名称：

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
前期	1	2	選択
担当教員			
オチャンテ カルロス			
水・4	GA2a162	DP 1・3	
添付ファイル			

授業の目標・概要	われわれの日常は、広義のコミュニケーション、すなわち他者と何らかのメッセージを絶え間なくやり取りすることで成り立っている。個人のあいだのこうした相互行為によって、「文化」は絶え間なく生起し変化し続けながら、わたしたちの日常に立ち現れている。この講義では、未知なる他者に働きかけるための方法でありかつその成果でもある、ドキュメンタリー映画（および民族誌映画）を題材として取り上げる。映像作品を手がかりに、慣れ親しんできた日常に対する再理解を促し、それを変化・深化させうる実践的なコミュニケーションの具体的なあり方とその可能性を考える。
学習の到達目標	多様性への関心がますます高まっている現代社会にあって、異なる文化と向き合い、対話を通じて相互に理解を深めることは、わたしたちにとって身近な課題である。この講義では、文化に関わる幅広い事象の背景や課題を読み解くことを通じて、それらを他者の問題ではなく、自分自身の問題としてとらえ、考える力を養うことを目指す。
授業方法・形式	映像を含めた各種の資料を活用しながら授業を進める。授業では小課題を実施し、考えたことや理解したことを自分の言葉でまとめる時間を設ける。
授業計画	<p>第1回 インTRODクシヨン 授業の概要や進め方、成績評価方法を確認する。</p> <p>第2回 文化とコミュニケーション① 異文化、自文化、コミュニケーション (1)</p> <p>第3回 文化とコミュニケーション② 異文化、自文化、コミュニケーション (2)</p> <p>第4回 文化とコミュニケーション③ カテゴリー化と権力関係</p> <p>第5回 まとめ (1) 第2回～第4回の授業内容を振り返り、考えを発展させる。</p> <p>第6回 グローバル化とコミュニケーション① 移民と多文化主義</p> <p>第7回 グローバル化とコミュニケーション② ニューカマー (1)</p> <p>第8回 グローバル化とコミュニケーション③ ニューカマー (2)</p> <p>第9回 近現代の日本社会とコミュニケーション オールドカマー</p> <p>第10回 まとめ (2) 第6回～第9回の授業内容を振り返り、考えを発展させる。</p> <p>第11回 内なる多文化とコミュニケーション① ハンセン病と隔離の歴史</p> <p>第12回 内なる多文化とコミュニケーション② 優生思想と障がい者</p> <p>第13回 内なる多文化とコミュニケーション③ ろう文化一言語としての手話</p> <p>第14回 内なる多文化とコミュニケーション④ メンタルヘルスをめぐる問題</p> <p>第15回 まとめ (3) 第11回～第14回の授業内容を振り返り、考えを発展させる。</p>
成績評価の基準	授業内で実施する小課題 (40%) や、まとめの回に実施するレポート (60%) を踏まえて、総合的に評価します。
課題 (試験やレポート等) に対するフィードバックの方法	小課題等の内容を適宜紹介し、授業内で扱ったテーマについて理解を深めたり、受講者全体で共有したりするための時間を設ける予定です。
準備学習・復習及び授業時間外の課題	授業計画には、「文化」「グローバル化」「共生」などのキーワードが並んでいます。これらのキーワードを手がかりに、関連するニュースや書籍などから積極的に情報を得て、予習や復習に役立ててください。
履修上のアドバイス及び留意点	授業で取り上げるさまざまなトピックの中から、自分なりの関心を見つけ、主体的・発展的に学ぶことを期待します。授業を通じて興味を持ったことについて調べてみる、身近な人と話してみるなど、考えを深めて他

	の人と共有する時間を大切にしてください。
教材・教科書	特に使用しません。
参考書	池田理知子編著 2010.『よくわかる異文化コミュニケーション』ミネルヴァ書房. 塩原良和 2012.『共に生きる—多民族・多文化社会における対話』弘文堂. 米本昌平・松原洋子・櫛島次郎・市野川容孝 2019.『優生学と人間社会—生命科学の世紀はどこへ向かうのか』講談社.
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input checked="" type="checkbox"/> PBL (課題解決型学習)</li> <li><input type="checkbox"/> 反転授業 (知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業)</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> ディスカッション、ディベート</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> グループワーク</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> プレゼンテーション</li> <li><input type="checkbox"/> 実習、フィールドワーク</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 双方向型授業に活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input checked="" type="checkbox"/> 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p>

# 2024年度 授業評価アンケート(集計表)

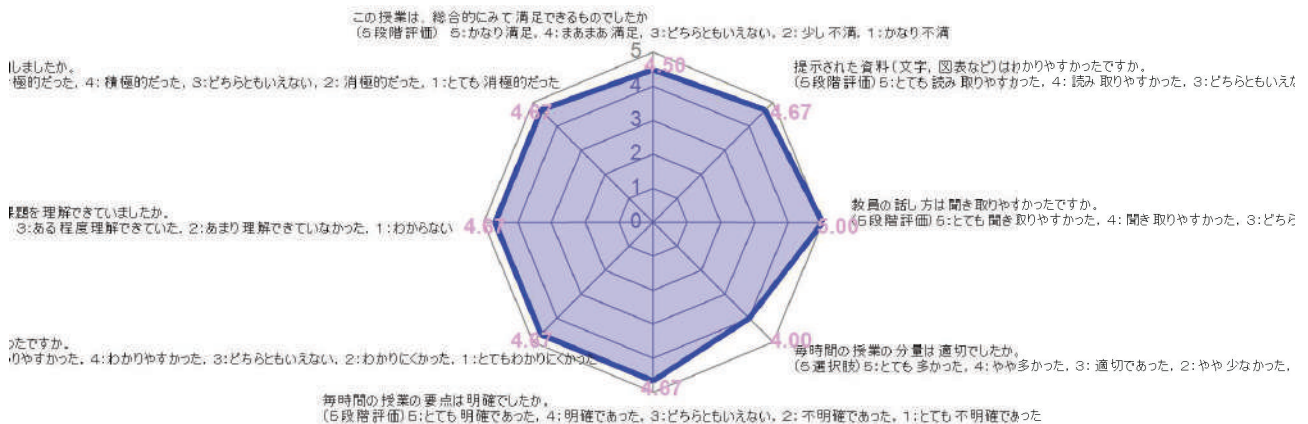
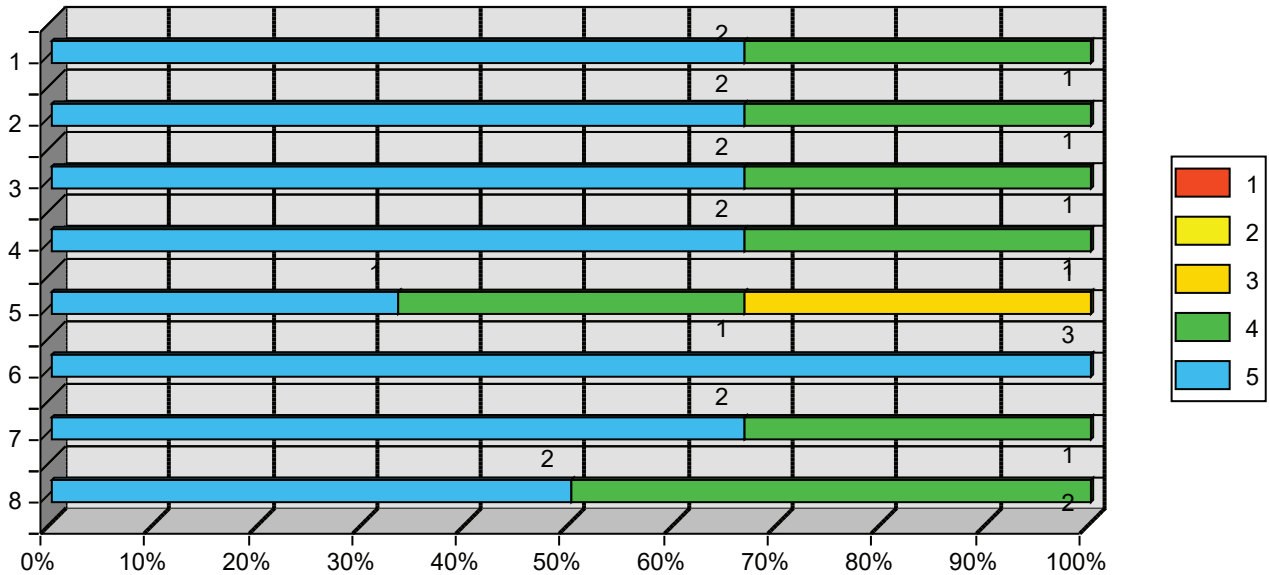
開講年度 2024年度 水曜日2時限 オチャンテ カルロス  
現代教育課題D(学校における異文化理解)

アンケート総数 4枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1
-------	-----	-----	-----	-----	-----

- この授業に積極的に参加しましたか。
- この授業で取り組むべき事前事後課題を理解できていましたか。
- 教員の説明はわかりやすかったですか。
- 毎時間の授業の要点は明確でしたか。
- 毎時間の授業の分量は適切でしたか。
- 教員の話し方は聞き取りやすかったですか。
- 提示された資料(文字, 図表など)はわかりやすかったですか。
- この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか

評価	5	4	3	2	1	平均
集計	2	1	0	0	0	4.67
集計	2	1	0	0	0	4.67
集計	2	1	0	0	0	4.67
集計	1	1	1	0	0	4
集計	3	0	0	0	0	5
集計	2	1	0	0	0	4.67
集計	2	2	0	0	0	4.5



# 2024年度 授業評価アンケート(集計表)

開講年度 2024年度

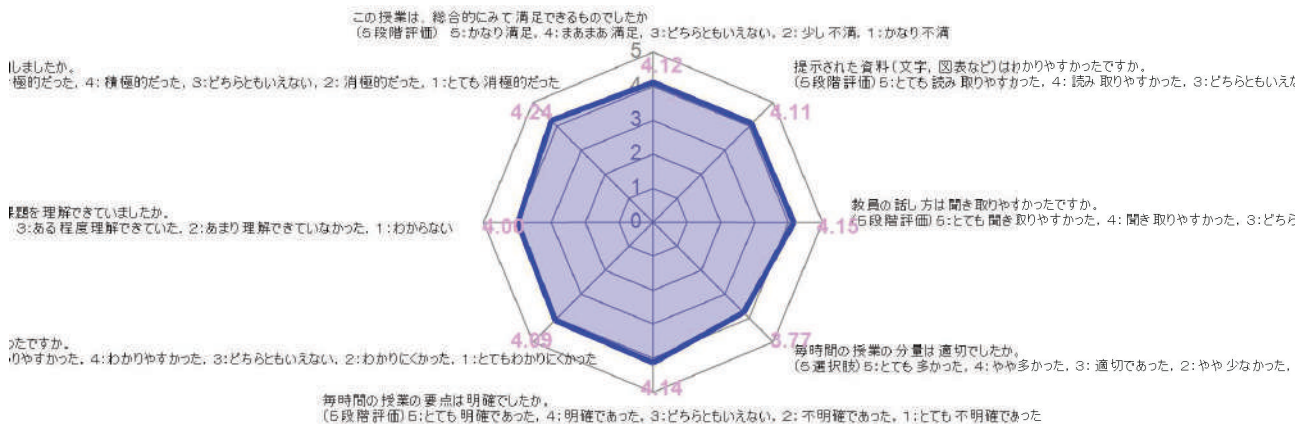
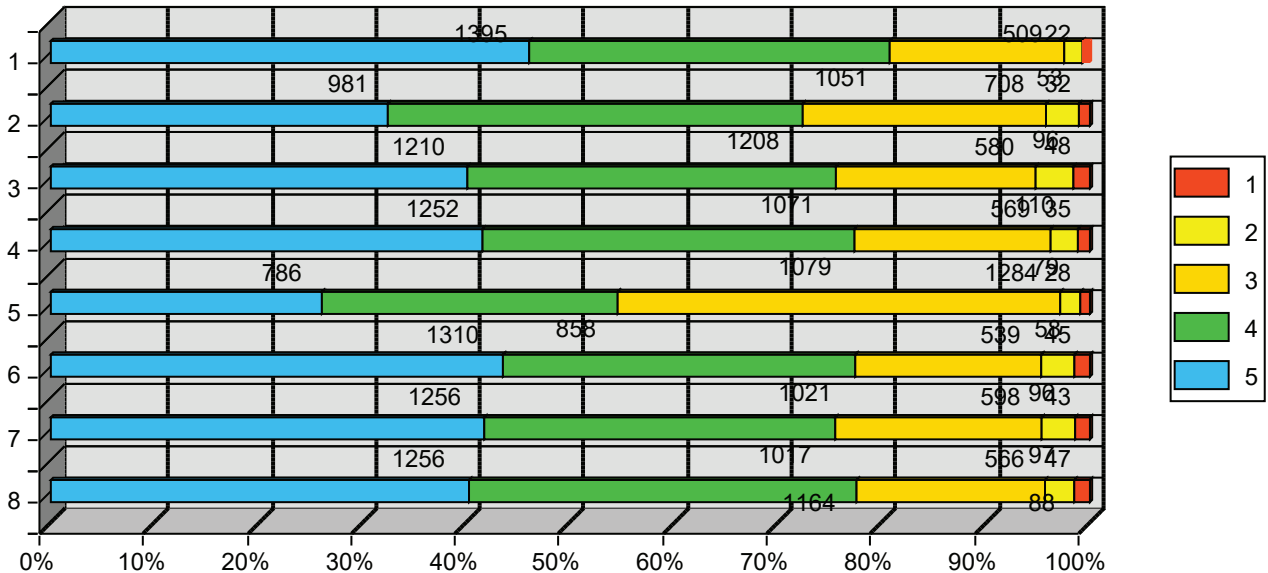
全体結果

アンケート総数 3121 枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1
-------	-----	-----	-----	-----	-----

- この授業に積極的に参加しましたか。
- この授業で取り組むべき事前事後課題を理解できていましたか。
- 教員の説明はわかりやすかったですか。
- 毎時間の授業の要点は明確でしたか。
- 毎時間の授業の分量は適切でしたか。
- 教員の話し方は聞き取りやすかったですか。
- 提示された資料(文字, 図表など)はわかりやすかったですか。
- この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか

評価	5	4	3	2	1	平均
1. この授業に積極的に参加しましたか。	1395	1051	509	53	22	4.24
2. この授業で取り組むべき事前事後課題を理解できていましたか。	981	1208	708	96	32	4.00
3. 教員の説明はわかりやすかったですか。	1210	1071	580	110	48	4.09
4. 毎時間の授業の要点は明確でしたか。	1252	1079	569	79	35	4.14
5. 毎時間の授業の分量は適切でしたか。	786	858	1284	58	28	3.77
6. 教員の話し方は聞き取りやすかったですか。	1310	1021	539	96	45	4.15
7. 提示された資料(文字, 図表など)はわかりやすかったですか。	1256	1017	598	97	43	4.11
8. この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか	1256	1164	566	88	47	4.12



# 2024年度

# 授業評価アンケート(集計表)

開講年度

2024年度

水曜日3時限

オチャンテ カルロス

外国語の理解

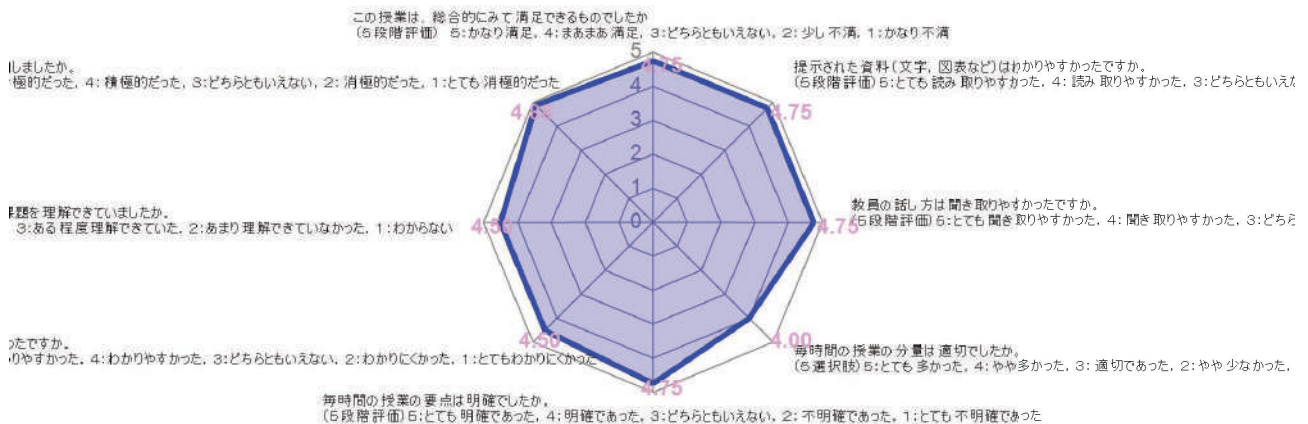
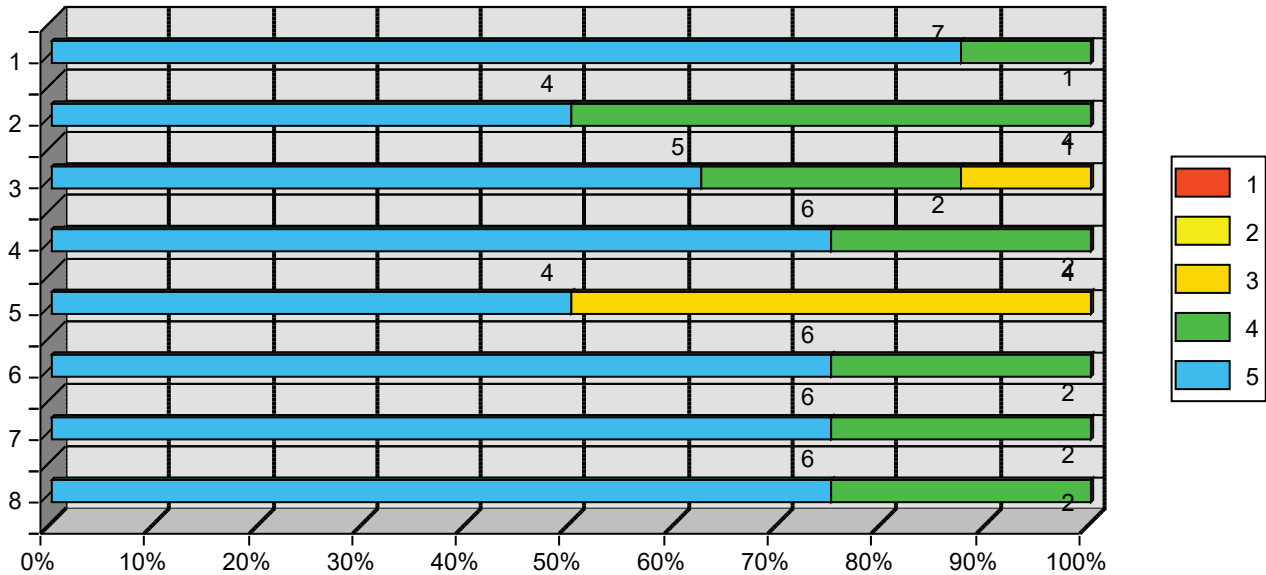
アンケート総数

8枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1
-------	-----	-----	-----	-----	-----

1. この授業に積極的に参加しましたか。
2. この授業で取り組むべき事前事後課題を理解できていましたか。
3. 教員の説明はわかりやすかったですか。
4. 毎時間の授業の要点は明確でしたか。
5. 毎時間の授業の分量は適切でしたか。
6. 教員の話し方は聞き取りやすかったですか。
7. 提示された資料(文字, 図表など)はわかりやすかったですか。
8. この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか

評価	5	4	3	2	1	平均
集計	7	1	0	0	0	4.88
集計	4	4	0	0	0	4.5
集計	5	2	1	0	0	4.5
集計	6	2	0	0	0	4.75
集計	4	0	4	0	0	4
集計	6	2	0	0	0	4.75
集計	6	2	0	0	0	4.75
集計	6	2	0	0	0	4.75



# 2024年度 授業評価アンケート(集計表)

開講年度 2024年度

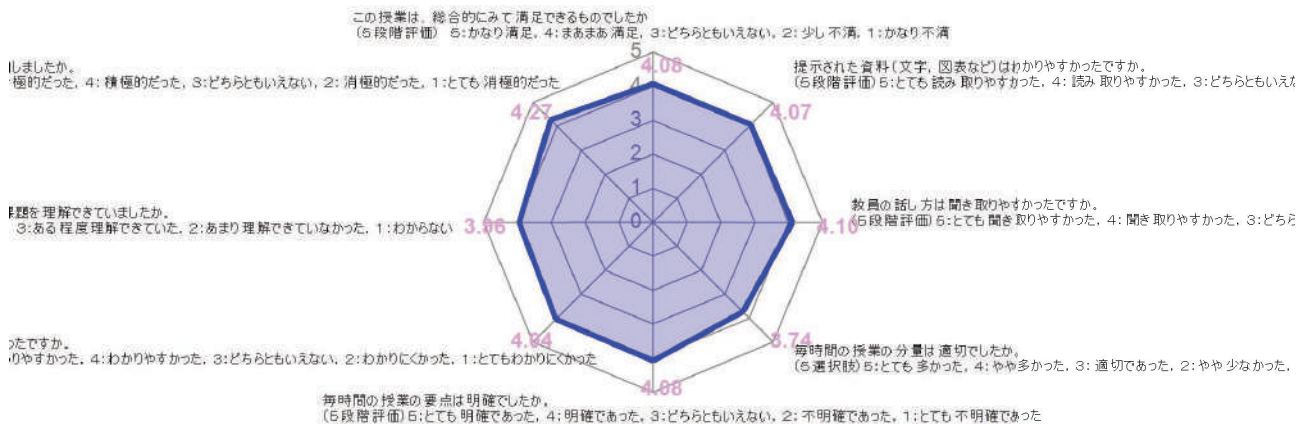
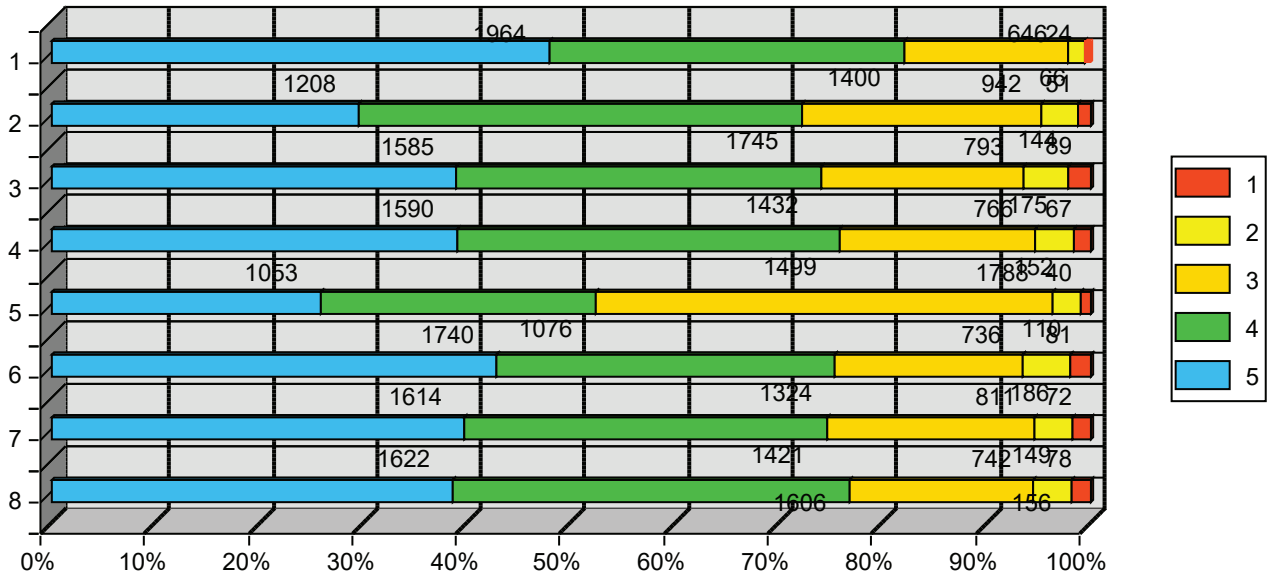
全体結果

アンケート総数 4204 枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1
-------	-----	-----	-----	-----	-----

- この授業に積極的に参加しましたか。
- この授業で取り組むべき事前事後課題を理解できていましたか。
- 教員の説明はわかりやすかったですか。
- 毎時間の授業の要点は明確でしたか。
- 毎時間の授業の分量は適切でしたか。
- 教員の話し方は聞き取りやすかったですか。
- 提示された資料(文字, 図表など)はわかりやすかったですか。
- この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか

評価	5	4	3	2	1	平均
1. この授業に積極的に参加しましたか。	1964	1400	646	66	24	4.27
2. この授業で取り組むべき事前事後課題を理解できていましたか。	1208	1745	942	144	51	3.96
3. 教員の説明はわかりやすかったですか。	1585	1432	793	175	89	4.04
4. 毎時間の授業の要点は明確でしたか。	1590	1499	766	152	67	4.08
5. 毎時間の授業の分量は適切でしたか。	1053	1076	1788	110	40	3.74
6. 教員の話し方は聞き取りやすかったですか。	1740	1324	736	186	81	4.1
7. 提示された資料(文字, 図表など)はわかりやすかったですか。	1614	1421	811	149	72	4.07
8. この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか	1622	1606	742	156	78	4.08



学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	田中紀子
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>2023年から奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の講師として、2025年から准教授として勤務している。中学校・高等学校の教員を目指す学生（主に中等数学専修の学生）に向けた教育を行っており、学部の授業12科目（ゼミナール、卒業研究を含む）を担当している。以下、担当授業科目、各種学生支援に分けて述べる。</p> <p>○担当授業科目：数学科教育法Ⅰ，数学科教育法Ⅱ，数学科教育法Ⅲ，数学科教育法Ⅳ，人間教育実践力開発演習Ⅲ，教育実習事前事後指導，教育実習Ⅰ（中・高），教育実習Ⅱ（中），人間教育学ゼミナールⅠ（基礎），人間教育学ゼミナールⅡ（応用），教職実践演習（中・高），卒業研究</p> <p>○各種学生支援：数学道場用のテキスト開発（高等学校数学Ⅲの内容や，教育実習・教員採用試験に必要な数学の学修支援テキスト），教採対策講座（教員採用試験に向けて，模擬授業や個人面接，ロールプレイの学修講座の講師・運営），教職実践演習における外部講師依頼，ゼミナールⅠ（基礎）ゼミナールⅡ（応用）登録者の教育実習訪問指導や教員採用試験関係書類のチェック・大学推薦書の作成・指導助言，ゼミナール生やその保護者との面談・教育相談，数学専修の学生の数学科学習指導案の作成のための指導・助言，卒業研究の指導，オープンキャンパス等における授業実施</p>			
<b>2. 教育の理念・目的</b>			
<p>教育に対する理念と教育の目的について，分けて述べる。</p> <p>○理念：日本の子どもたちはPISA調査で世界的に見て高水準であるものの，学習の楽しみが感得できていない生徒が多い。また，数学を使った仕事につきたいという子どもたちは世界平均を下回っている。教育に高い関心を持ち、中学校・高等学校の数学科教師を目指す学生の資質・能力を養成するとともに，本学の教育理念である「人間教育力を身に付けさせる（人を支える人になる）」ことを念頭に講義やゼミ指導・学生支援に携わっている。</p> <p>○教育の目的：私が本学において教育の目的としているのは，学生が人間教育学としてのアカデミックスキルを駆使し，専門分野の文献や論文によって見識を深めるとともに中学校や高等学校における教育実習や研究会参加などに主体的積極的に関わり、自らの専門性を深める能力を培い，教師としての実践力・即戦力を育成することである。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>教育の理念を達成するための目的と，それを達成するための具体的方法について，学生との接し方，授業の工夫，学内外研修会への参加の3点に分けて述べる。</p> <p>○学生との接し方：学生が授業の主体であるという姿勢が教員には重要だと考える。講義では安全安心な環境（多様な発言が受け入れられる場）の提供を，またいつでも相談・質問に足を運びやすい研究室の雰囲気づくりをし，親和的に対話することを心がけている。</p> <p>○授業の工夫：数学科教育法Ⅰから数学科教育法Ⅳでは，中学校学習指導要領解説・高等学校学習指導要領解説を基に主体的・対話的で深い学びを目指した数学科指導に関わる幅広い知識と，数学的な見方・考え方を主体的に身に付けることができるようグループワークを適所に設け，教材研究，学習指導案の作成，模擬授業等を行う。模擬授業や数学科指導案は学生一人ひとりに作成させ，他の学生に向けて発表する場を設けるなど，学生一人ひとりが授業の主体となるように，心がけている。また人間教育学ゼミナールⅠ（基礎），人間教育学ゼミナールⅡ（応用）では，学生自身の興味・関心のあるテーマを設定し、深く掘り下げて探究し、協議等を踏まえてレポートや論文にまとめる。また，学生がテーマを設定した教育時事について皆で議論するなど，学生の興味・関心に応じた授業構成にしている。修得した知識及び演習等をふまえて、人間教育学における問題を科学的根拠に基づいて解決する姿勢と能力を高める。特に卒業研究では、「数学教育」「探究活動」等に関わる学生の興味・関心に基づいた課題設定と研究計画を立案し，調査・実験・探究を実施し，論文等の作成と研究成果の発表を实践させる。</p> <p>○学内外研修会への参加：FD/SD活動等にかかわる学内外研修会へ参加している。研究分野「数学教育」では，理数探究（SSH）等の探究活動を広める活動を，「数学教育史」では戦中にあった特別科学教育学級の調査を，「数学史」では江戸時代の和算研究や確率論史に関わる研究を、継続的に行っている。数学科教育法やゼミナール等の授業で，成果を教育内容に活かしている。</p>			
<b>4. 教育の成果</b>			

学生からの授業評価と授業のリフレクションを実施しており、その内容等について述べる。

○学生からの授業評価：数学科教育法や教職実践演習，教育実習事前事後指導等の科目については，学期ごとに学生による授業評価アンケートを実施している。数学科教育法Ⅱから数学科教育法Ⅳ，教職実践演習，教育実習事前事後指導等の学生アンケート結果は，比較的良好である。数学科教育法Ⅰでは，学生の「学ぶ側の見方」から「教える側の見方」への転換への誘導や，学生の授業ニーズに十分こたえられていない点があるなどの課題がみられた。

○授業の振り返り：毎授業の終わりにリフレクションを書かせている。数学科教育法では，学生は他の学生の模擬授業や指導案への意見，授業内容の理解，積極性などについて記述している。数学専修の学生は，学内でも中高の数学科教員を目指す割合が高く，また令和8年度卒業生は中高の新任教師になる学生も多く，資質能力や意欲の醸成について一定程度成果があげられている。

## 5. 今後の目標

上記のことから，教育改善に向けた今後の目標として，3点を挙げる。

○数学専修の学生の進路実現に有益な授業や教育実習訪問指導，学生支援を行い，教員志望者・合格率増加に寄与する。また，引き続き「楽しみの育成」に軸をおいた教育の提供に尽力する。

○教育委員会事業，私立・公立中高探究型事業支援，奈良学園中・高等学校におけるSSH事業支援，日本学生科学賞応用数学部門中央審査等の社会貢献事業を引き続き行い，現代の教育課題や未来に向けた教育の方向性について積極的に情報収集を行う。

○研究活動では，高等学校における「探究」や「特別科学教育学級」等の数学教育史，「和算」，確率論史等に関わる研究活動を継続的に行う。国内学会への参加・発表（特に「探究」「特別科学教育学級」確率論史に関して），国際会議への参加・発表（特に数学教育史や「和算」分野に関して）や，学会誌への投稿を継続的に行う。

### ・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

○各科目のシラバス：[https://tango.naragakuen-u.jp/aa\\_web/syllabus/se0010.aspx?me=EU&opi=mt0010](https://tango.naragakuen-u.jp/aa_web/syllabus/se0010.aspx?me=EU&opi=mt0010)

○学生支援の内容：1. 教育の責任○各種学生支援参照

○研修会や学会への参加状況：2025年は東アジア数学史国際会議招待講演（昆明），数学史哲学と数学史国際会議講演（呼和浩特），日中交流会と松宮文庫完成式招待（呼和浩特），日本数学教育学会（総合研究大会高専大学部会発表，同大会における高等学校の指導助言者），日本数学会（基礎論歴史分科会運営委員，春季総合分科会・秋季研究大会発表），日本数学史学会（研究大会発表，2027年塵劫記400年記念準備委員会委員），数学教育学会（特別科学教育学級について発表），奈良セミナー（数学教育）参加・発表，探究に関わる科学研究費事業参加，授業研究に関わる科学研究費協力者，京都数学史セミナー発表（算用記に関する内容），津田塾大学数学史シンポジウム参加・発表（確率論史に関する内容），近畿和算セミナー参加・発表，飯高Zoomセミナー参加・発表等を予定している。

○授業アンケート：奈良学園大学授業アンケート結果参照

## 奈良学園大学ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学科	氏名	太田雄久
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>2015年度より、人間教育学部の教員として、主として小学校教員を目指す学生の指導をしている。大学教員になる前は、大阪府内にある国立大学附属小学校および公立小学校で児童の指導を行っていた。専門分野は理科教育である。</p> <p>現在は、専門分野である理科教育に関連する科目である「理科指導法」「自然の理解」、また教育実習関連科目である「教育実習事前事後指導(幼・小)」「教育実習(幼・小)」などの科目を担当している。これらの担当している科目は、全て小学校教員免許取得のための必修科目である。理科という教科を核としながら、学生の授業実践力の向上や児童の指導の際に必要なスキルの向上を目指し、指導を行っている。</p> <p>また、今年度は学生支援委員として、合理的配慮や新入生研修等に関わる業務にも携わっている。</p>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>私の教育理念は「授業実践力を身に付けた教員を養成することを通じた児童、生徒への教育の質的向上」である。このような理念を設定している最も大きな理由として挙げられるのは、小学校教員として児童の指導を行ってきた経験である。初任者の頃は日々の授業や指導をこなすだけであった。しかし、小学校教員のキャリアを重ねるにつれて、自分なりの授業論を持つようになり、その授業論を拠り所としながら授業実践を重ねてきた。こうすることで、独りよがりの授業ではなく、「児童がどのように学ぶと良いのか」ということを常に考えながら授業を行うようになった。このような考えに変わってからは、児童の学ぶ意欲や学力も向上した。加えて、生徒指導の面でも重大な指導場面が発生することも少なくなっていく。児童が学校で過ごす時間の中で最も長いのは学習時間(授業)であることから、その時間が充実することで、学習と生徒指導の両面で良い成果が出てきたと言えるであろう。</p> <p>現在、私自身は大学教員であるため、児童への直接的な指導はできない。私の理念を具現化するためには、現在指導している学生の授業実践力を向上させること、これが理念を具現化するための目的となる。また特に、担当している科目のうち、理科教育に関わる科目である「理科指導法」や「自然の理解」での具体的な到達目標は、「小学校学習指導要領解説理科編の内容を理解することができる」「小学校理科の授業を計画、実践することができる」「観察、実験等の指導に必要な安全についての配慮事項や実験器具等の特性を理解することができる」などとなる。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>先述した目標を達成するための方法を、「理科指導法」「自然の理解」の2つの科目で述べる。</p> <p><b>【理科指導法】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1回の授業を、原則として講義30分、演習60分とする</li> <li>・講義では授業づくりに必要な知識等を教授し、それをもとに演習として模擬授業の授業構成や指導案の作成を行う</li> <li>・原則、毎時間で課題を課す</li> <li>・課題では、演習で取り組んだ成果を提出させる             <ul style="list-style-type: none"> <li>*課題を提出するたびに模擬授業の指導案が作られていく仕組みになっている</li> </ul> </li> <li>・演習時は、小学校学習指導要領解説理科編、小学校理科の教科書の2つを主たる資料とする</li> <li>・演習時は、各学生の進捗状況を把握するとともに、各学生の個別指導にあたる             <ul style="list-style-type: none"> <li>*答えは言わない。助言のみ。学生自身が考えを持っていない場合は助言しない。</li> </ul> </li> </ul> <p>このような指導方法を取っているねらいは、学生自らが「自分の小学校理科の授業をつくることができる」ようにするためである。</p> <p><b>【自然の理解】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校学習指導要領解説理科編の内容理解に関する授業は講義形式</li> <li>・小学校理解で扱う自然の事物・現象についての理解(教材理解)については、観察、実験等を取り入れる</li> <li>・原則、毎時間で課題を課す</li> <li>・課題は、各授業で学修した内容の定着を図るようなものとする</li> </ul> <p>このような指導方法を取っているねらいは、1年次前期開講科目であるため、1年次生に大学での学び方を経験させること、小学生が理科をどのように学ぶのかを経験させることの2点である。</p>			

<p><b>4. 教育の成果</b></p>
<p>理科指導法と自然の理解の2つの科目について、成果を述べる。</p> <p>理科指導法では、毎回の講義内容や取り組んだ課題の内容をもとにして、受講した学生は模擬授業の指導案を作成し、それをもとに模擬授業を実践することができた。また、その中で予備実験等の授業準備や安全面についての配慮事項の重要性にも気付くことができた。その根拠としては、学生が行った授業評価アンケートの結果が挙げられる。具体的には、「積極的に参加したか」「教員の説明はわかりやすかったか」「毎回の授業の要点は明確だったか」「総合的にみて満足できるものであったか」の項目で、全受講生の評価点の平均値が4.0以上(満点は5.0点)であった。</p> <p>自然の理解では、15回の講義を通して、受講したほとんどの学生が、理科の授業を実践するにあたって必要な知識や技能を獲得できた。その根拠としては、学生が行った授業評価アンケートの結果が挙げられる。具体的には、「積極的に参加したか」「教員の説明はわかりやすかったか」「毎回の授業の要点は明確だったか」「総合的にみて満足できるものであったか」の項目で、全受講生の評価点の平均値が4.0以上(満点は5.0点)であった。</p>
<p><b>5. 今後の目標</b></p>
<p>成果でも述べたように、学生の授業評価は比較的良好なことから、今後の目標としては、より学生のニーズに即した授業を行うことである。具体的には、理科指導法、自然の理解ともにシラバスの中の授業計画の改善が挙げられる。具体的には、理科指導法の模擬授業を計画、準備、実践を単独(現在はペアで1授業を行っている。)で行うことができるような計画に変更することである。自然の理解では、より多くの小学校理科の学習内容を扱えるように授業計画を変更するようにする。変更の際には、次の学習指導要領改訂の動向も踏まえた上で、毎年授業計画の改善の必要性を検討していくようにする。</p>
<p>・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス、授業評価アンケート等)</p>

## 奈良学園大学ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	中田浩司
<b>1. 教育の責任</b>			
担当授業科目: 教育原理(2コマ), 道德教育の指導法(2コマ), 基礎ゼミナールI, 人間教育力開発実践演習I			
<b>2. 教育の理念</b>			
私の教育理念の核は、学生一人ひとりが「自律的な思考」を確立することにある。単に知識を習得するだけでなく、教員が一方的に答えを与えるのではなく、学生が自ら「なぜそうなるのか」ということを考える機会を提供することが自身の役割であると考えている。さらに、教職課程の専任教員として、創意工夫を凝らすことができる「実践的指導力」を備えた教員を養成し、現場の課題に対して主体的に解を導き出せる人材を社会へ送り出すこと、また、教職に就かない学生に対しても教職課程での学びを通して「論理的・批判的な思考」など汎用的能力を涵養することを自らの理念としている。			
<b>3. 教育の方法</b>			
①対話型・問題解決型授業：「教育原理」においては、単なる知識の伝達に留まらず、「正解のない事例（ケーススタディ）」を提示し、学生同士の議論やプレゼンテーションを行っている。②リフレクションの構造化：「道德教育の指導法」においては、「何ができたか」だけでなく、「なぜそのような方法を選んだか」を言語化するリフレクションを行っている。それを踏まえて教員としての実践的指導力を養成している。③学生への接し方: 学生の自主性・自律性を尊重する一方で、失敗を恐れずに、挑戦する心を育てている。			
<b>4. 教育の成果</b>			
教育原理においては、教育時事について学生どうしの議論、ペアワーク等を重視し、現在の日本の教育が抱える問題について理解度が深まったとの声があった。			
<b>5. 今後の目標</b>			
教員自身が「生涯学び続ける学習者（Lifelong Learner）」のモデルとなり、学生とともに成長し続けることを第一の目標とする。また、自らの大学教員としての教育技法の向上、学生対応をより適切にできるように心がけていきたい。具体的には、自らが属する「日本アカデミックアドバイジング協会」の研究会に参加しながらそこで得られた最新の知見を、日々の業務に活かしていきたい。また、令和6年に受講した「授業づくりワークショップ」（大阪大学）で学んだ方法論をよりブラッシュアップすること、またかつて受講・修了した千葉大学「アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム」の提供する各種研修セミナーに参加していきたい。			
<ul style="list-style-type: none"> <li>必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）</li> </ul>			
教育原理シラバス 大阪大学第25回授業づくりワークショップ修了証			

英文科目名称：

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	1	2	選択
担当教員			
中田 浩司			
火・1	KA3d104	DP1・2・4・6	
添付ファイル			

授業の目標・概要	序盤では、教育の目的・方法の意義を講義したうえで、その後は西洋・日本の代表的な教育思想の歴史的な変遷と現代の教育との連続性について概観する。 中盤では、現代教育の骨格をなす教育行政と学校の在り方について考察を深め、後半は、現代教育の政策的課題について関心を共有しつつ、新聞教材の活用と小グループでの議論を基に、教育改革の進展についても考察を加えていきたい。
学習の到達目標	①教育の基本的諸概念を正確に理解する。 ②西洋・日本の教育思想の歴史的変遷と社会背景とともに、現在の教との連続性について理解する。 ③NIE学習を推進するので、日々の新聞に掲載される教育に関する情報に触れ、授業において深く掘り下げ、学校教育への具体的な活用について考察できる。
授業方法・形式	講義
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション 授業の目的・概要 予習：教科書の「まえがき」を読んで、“教職課程への学び”の覚悟を確認しておく。(2時間) 復習：本時を振り返り、「振り返りレポート」にポイントをまとめる。(2時間)</p> <p>第2回 教育の基本原則 教育とはなにか？ 予習：教科書「第1章」を事前に読み、事前に「教育とはなにか」の問いに対して、自分の考えをまとめる。(2時間) 復習：本時を振り返り、「振り返りレポート」に自分の考えをまとめる。(2時間)</p> <p>第3回 西洋の教育思想(1) ヨーロッパの古代・中世の思想 予習：第2章1・2・3を事前に読み、ヨーロッパの古代から中世までの時代の流れを理解しておく。(2時間) 復習：本時を振り返り、「振り返りレポート」に自分の考えをまとめる。(2時間)</p> <p>第4回 西洋の教育思想(2) ルネサンス・17・18世紀の教育思想 予習：第2章4～7を事前に読み、ヨーロッパ近世・近代までの時代の流れを理解しておく。(2時間) 復習：本時を振り返り、「振り返りレポート」に自分の考えをまとめる。(2時間)</p> <p>第5回 日本の教育思想(1) 古代から近世の教育 予習：教科書の1.古代から近世の教育を事前に読んで、日本の古代から近世までの歴史の流れを理解しておく。(2時間) 復習：本時を振り返り、「振り返りレポート」に自分の考えをまとめる。(2時間)</p> <p>第6回 日本の教育思想(2) 近代・現代の教育 予習：教科書の近代前・後期と現代の教育を事前に読んで、近世から現代までの時代の流れを理解しておく。(2時間) 復習：本時を振り返り、「振り返りレポート」に自分の考えをまとめる。(2時間)</p> <p>第7回 日本の教育行政 文部科学省と教育委員会の役割 予習：教科書の第4章を事前に読んで、日本の教育行政を掌る行政機関の役割について、理解しておく。(2時間) 復習：本時を振り返り、「振り返りレポート」に自分の考えをまとめる。(2時間)</p> <p>第8回 教育課程 (教育課程の編成とカリキュラムマネジメントの確立) 予習：いまなぜカリキュラムマネジメントなのかの問いに対して自分なりの考えを準備しておく。(2時間) 復習：本時を振り返り、「振り返りレポート」に自分の考えをまとめる。(2時間)</p> <p>第9回 学校の経営組織 予習：学校内における教職員の職務内容において校務分掌について調べてくる。(2時間) 復習：本時を振り返り、「振り返りレポート」に自分の考えをまとめる。(2時間)</p> <p>第10回 教師の仕事と評価 予習：日本の教職員の職務に対する評価はどのような方法で行われているか調べてくる。(2時間) 復習：本時を振り返り、「振り返りレポート」に自分の考えをまとめる。(2時間)</p> <p>第11回 現代教育の課題(1) 第11回から第15回までの具体的な「現代教育の課題」については、学生からのアンケートを活用(学びたい課題)して設定する。よって、課題が決定次第、授業の中で発表する</p> <p>第12回 現代教育の課題(2) 第11回から第15回までの具体的な「現代教育の課題」については、学生からのアンケートを活用(学びたい課題)して設定する。よって、課題が決定次第、授業の中で発表する</p> <p>第13回 現代教育の課題(3) 第11回から第15回までの具体的な「現代教育の課題」については、学生からのアンケートを活用(学びたい課題)して設定する。よって、課題が決定次第、授業の中で発表する</p> <p>第14回 現代教育の課題(4) 第11回から第15回までの具体的な「現代教育の課題」については、学生からのアンケートを活用</p>

	<p>(学びたい課題)として設定する。よって、課題が決定次第、授業の中で発表する</p> <p>第15回 現代教育の課題(5)</p> <p>第11回から第15回までの具体的な「現代教育の課題」については、学生からのアンケートを活用(学びたい課題)として設定する。よって、課題が決定次第、授業の中で発表する</p>
成績評価の基準	教科書内に掲載 それ以外については、適時提示する。
課題(試験やレポート等)に対するフィードバックの方法	授業後の「振り返りレポート」を、翌週に提出、評価をして返却 当日外以外はレポートの提出は受け付けない(提出期限の厳守)
準備学習・復習及び授業時間外の課題	授業善意教科書の該当単元を十分に読み込んでから、授業に臨むこと。授業にNIE学習を取り込むので、平素から新聞に掲載されている教育問題に対して常に興味を持ち熟読しておくこと。
履修上のアドバイス及び留意点	授業には課題意識を持って、積極的に取り組むこと。 遅刻・欠席はしないこと
教材・教科書	『教育原理 事始め』 中田正浩編著 大学教育出版(2018)
参考書	教科書内に掲載 それ以外については、適時提示する。

授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■PBL(課題解決型学習)</li> <li>□反転授業(知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業)</li> <li>□ディスカッション、ディベート</li> <li>□グループワーク</li> <li>■プレゼンテーション</li> <li>□実習、フィールドワーク</li> <li>□その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■双方向型授業に活用する</li> <li>□自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li>□他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li>□他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p>
-------	--



# 修了証書

中田 浩司 殿

あなたは第 25 回大阪大学授業  
づくりワークショップにおいて  
全課程を修了しましたので  
これを証します

令和 6 年 9 月 6 日

大阪大学理事・副学長

は) 中 敏 彦

# 奈良学園大学ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	間井谷容代
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>保育者養成における教育の責任を重く受け止め、学生一人ひとりが安心して学び専門職として成長していくことができるように伴走的な指導を行っている。</p> <p>担当教科である障害児保育、施設実習関連科目(施設実習指導Ⅰ・Ⅱ、施設実習Ⅰ・Ⅱ)では、子どもを一人の存在として捉える視点を基盤にインクルーシブ保育や保育と療育の連携について、具体的事例を通して理解を深める指導を行っている。実習事前事後の指導では、学生の経験や感情を丁寧に振り返り、戸惑いや葛藤も学びとして位置付けている。子どもの健康・子どもの健康指導法では、健康を知識として学ぶだけでなく、生活・遊び・保育実践と結びつけて総合的に捉える視点を重視している。保育実践演習では、これまでの学びや実習経験を統合し正解を求めるのではなく、対話を通して考えを深める力を育成している。</p> <p>人間教育学ゼミナール(基礎・応用)では、実際の保育・療育の現場に赴き、体験を通して学ぶことを重視している。学生は現場での体験をもとに、子どもや保育者の姿を観察・記録し、大学に持ち帰り振り返り検討を行う。この課程を通して、知識と実践を往還させながら考える力や、保育者としての視点を養うことを目的としている。また卒業研究においては、こうした体験を踏まえ自ら課題を設定し、自分の言葉で考察・発信できるように指導をしている。いずれの教科においても、学生の状況に応じた関わりを大切に、学びを現場につなげる伴走的な教育を実践している。</p>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>教育は、その場限りのものではなく、学生の将来に関わる責任ある営みである。学生一人ひとりの背景や状況を尊重し、安心して学べる環境の中でこそ、主体的な学びが生まれると考える。</p> <p>保育者養成においては、知識や技能の習得を身に付ける自体が目的ではなく、子ども一人ひとりの育ちに向き合い、悩みながらも考え続ける姿勢を育てることが重要である。</p> <p>そのため、授業・実習・人間教育学において、理論と実践を結びつけ、現場での体験を通して学びを深める指導を重視している。また、インクルーシブ保育の視点を基盤に多様な子どもや家庭・支援の在り方に目を向け、専門職としての責任と倫理観を備えた保育者の育成を目指している。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>方法としては、どの教科においても学生が安心して学び、主体的に考えられる環境づくりを重視している。授業では、グループ討議や事例検討を取り入れ、学生同士の対話を通して多様な視点に気づき、自ら考えを深められるよう工夫している。</p> <p>事例では、支援を必要とする子どもへの関わりを含む具体的な保育場面を扱い、子どもの理解に基づいた関わりや配慮の在り方について、理論と実践を結びつけて学べるよう指導している。</p> <p>実習関連科目や人間教育学ゼミナールでは、体験の振り返りを重視し、現場での気づきや葛藤を整理しながら、学びを深めている。また、人間教育学ゼミナールでは、公立保育職を志望する学生に対し、公立受験に向けた学習支援を行い、進路選択に主体的に向き合えるよう支援している。</p>			
<b>4. 教育の成果</b>			
<p>本教育実践を通して、学生は知識を理解することだけではなく、現場の状況に応じて考え、判断し、行動しようとする姿勢を身につけてきている。特に、支援を必要とする子どもへの関わりについては、固定的な見方にとらわれず、子ども一人ひとりの背景や育ちに目を向けて捉えようとする視点が育まれている。</p> <p>学生による授業評価では、「内容がわかりやすい」「書き込めるので良かった」といった肯定的な評価が見られたが、一方で、「スライドの進行が早い」との指摘もあり、学生の理解度や学習ペースに応じた進行の工夫の必要性が課題である。</p> <p>また、授業や振り返りを通して、自身の考えや関わりや考えを言語化し、他者の視点を踏まえて捉え直そうとする姿が見られるようになってきている。</p> <p>人間教育学ゼミナールにおいては、進路を主体的に考える姿勢が育ち、公立保育職を目指して計画的に学習に取り組む姿が見られている。これらの成果は、学生が専門職として主体的に学び続けていくための基盤を形成している。</p>			

## 5. 今後の目標

### 【短期目標】

講義科目では、支援を必要とする子どもへの関わりを含む具体的な事例を用い、学生が子どもの背景や生活状況を踏まえ、スライドの構成や進行を見直し、理解度に応じた説明や確認の時間を確保する。演習科目では、実習前指導において施設の役割や支援の視点を整理し、実習後には振り返りの時間を十分に設け、学びを深める。

### 【長期目標】

学生が多様な子どもや家庭、支援の在り方に向き合いながら、状況に応じて考え、判断し、行動できる専門職へと成長していくことができるように、教育内容と指導方法の充実を図る。学修と実践を往還する学びを通して、学生が自らの経験や考えを言語化し、振り返りながら学びを深めて行ける力を育成する。さらに進路を学生主体的に考え、卒業後も専門職として学び続ける姿勢を身に付けることができるように、継続的な支援体制の構築を、今後、目標とする。

- ・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス, 授業評価アンケート等)

## シラバス「障害児保育」

講義科目名称： 障害児保育

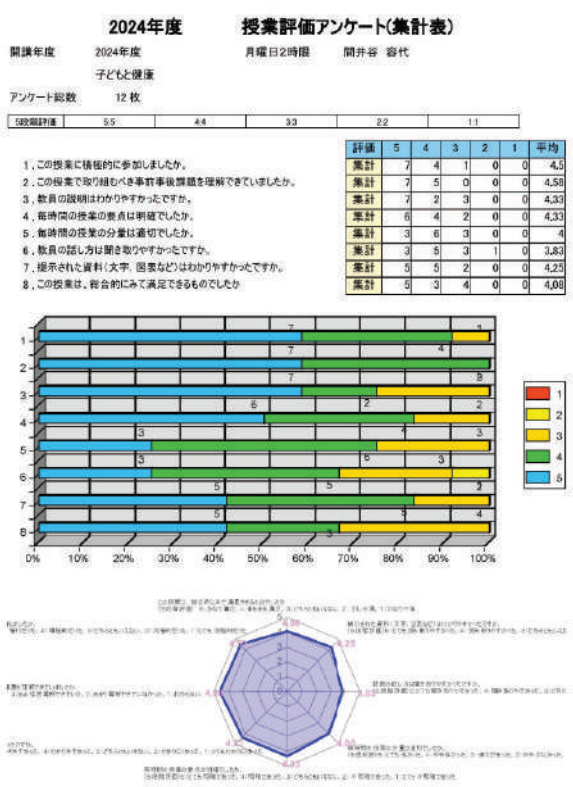
授業コード： 111306

英文科目名称：

開講期間	配当年	単位数	科目必修区分
前期	3	2	選択
担当教員			
間井谷 容代			
月・3	KB2c325	DP1・2・3・6	
添付ファイル			

授業の目標・概要	障がい等をもつ特別な配慮を必要とする子どもの保育の歴史的変遷と現代の状況について学ぶ。そして、それぞれの障がいについての知識を培い、障がい等のある子どもの発達上の課題を学び、障がい等のある子どもに対する保育実践のあり方や適切な支援方法について理解を深める。具体的な実践事例を通して、家庭や地域の療育・相談機関との連携のあり方について考え、保育者としての役割を学ぶ。さらに、それらを踏まえて障がい等のある子どもの保育の個別指導計画を立案するための基礎力を身につける。
学習の到達目標	1. 障がい児保育の基本的な理念を学び、特別な配慮を必要とする子どもの特徴を理解する。 2. さまざまな事例を通して、子どもにあった支援方法について理解する。 3. 子どもへの支援に向けて、関連機関や小学校、保護者との連携の在り方を理解する。 4. 障がい等のある子どもの保育の個別指導計画を立案するための基礎力を身につける。
授業方法・形式	講義・演習形式で行う
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション / なぜ特別な支援が必要なのか ・本授業の流れについて説明をする。 ・特別な支援について</p> <p>第2回 発達を理解する ・障がいの特性に合わせた発達について理解する</p> <p>第3回 発達の違いを理解する ・それぞれの発達の違いについて学ぶ</p> <p>第4回 障がいの特性を理解する① ・肢体不自由 ・知的障がい ・視覚障がい ・病弱・虚弱 ・重症心身障がい ・言語障がい</p> <p>第5回 障がいの特性を理解する② ・ASD (自閉スペクトラム症) ・ADHD (注意欠如多動症) ・LD (限局性学習症)</p> <p>第6回 支援方法を理解する① ・心の支援について具体的に学ぶ</p> <p>第7回 支援方法を理解する② ・発達論による支援</p> <p>第8回 支援方法を理解する③ ・行動への支援</p> <p>第9回 支援方法を理解する④ ・環境調整による支援</p> <p>第10回 支援方法を理解する⑤ ・周囲の人の連携による支援</p> <p>第11回 支援の方法を考える実践ワーク ・ワークにある支援について考え、意見交流をする</p> <p>第12回 個別の教育支援計画をつくる ・事例を通して、作成を行い、グループで討議する</p> <p>第13回 ケーススタディ ・事例を詳しく分析し、問題解決をするために様々な方法を導き、グループで結果を発表する</p> <p>第14回 保護者支援と今後の課題</p> <p>第15回 障害児保育まとめ ・今までの学びの総括としてテストをする。</p>
成績評価の基準	授業参加態度30%、 課題レポート30%、 到達度確認テスト40%
課題 (試験やレポート等) に対するフィードバックの方法	1. 提示した課題等について、授業内にフィードバックをする。また深い理解を得るために、具体事例等をあげ、説明をする。 2. 定期テスト結果については、「アクティブアカデミー」の「教職履修カルテ」より教員コメント欄が表示される。

- ・学生のボランティア活動「子育て支援フレンズ」として出前保育に取り組む。  
公立幼稚園、私立認定こども園、療育施設の夏祭り、認定こども園の夏祭り、子育て支援センター等に参加。
- ・研修会：こども家族早期発達支援学会の研修会に参加(計4回)  
園内研修指導者として参加 認定こども園  
療育研修に参加 療育施設
- ・学会：日本保育学会発表、日本乳幼児教育・保育者養成学会発表、
- ・「子どもと健康」授業アンケート



2024年度後期 子どもと健康 月曜 2限 開井谷 容代  
■学生さんからの意見等に対する回答 (改善策・コメント等)

とてもわかりやすい説明で、集中して授業を受けることができた。スライドが見やすかった。レジュメに書き込み形の授業でメモの余白もあったため授業中のメモがしやすかった以上、コメントがあり、今後も引き続きこの形で授業を進める。

■自己評価及び今後の授業改善について

授業の進め方が早いとの指摘が多くあったため、進め方では気を付けて進めてきた。今回は特に気になる状況であったので、今年度のように授業を進める。

- 【アンケート内容】
- この授業に積極的に参加しましたか。  
5とても積極的だった。4積極的だった。3どちらともいえない。2消極的だった。1とても消極的だった
  - この授業で取り進むべき事前事後課題を理解できていましたか。  
4十分理解できていた。3ある程度理解できていた。2あまり理解できていなかった。1わからない
  - 教員の説明はわかりやすかったですか。  
5とてもわかりやすかった。4わかりやすかった。3どちらともいえない。2わかりにくかった。1とてもわかりにくかった
  - 毎時間の授業の要点は明確でしたか。  
5とても明確であった。4明確であった。3どちらともいえない。2不明確であった。1とても不明確であった
  - 毎時間の授業の分量は適切でしたか。  
5とても多かった。4やや多かった。3適切であった。2やや少なかった。1とても少なかった
  - 教員の話し方は聞き取りやすかったですか。  
5とても聞き取りやすかった。4聞き取りやすかった。3どちらともいえない。2聞き取りにくかった。1とても聞き取りにくかった
  - 提示された資料(文字、図表など)はわかりやすかったですか。  
5とても読み取りやすかった。4読み取りやすかった。3どちらともいえない。2読み取りにくかった。1とても読み取りにくかった
  - この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか  
5かなり満足。4まあまあ満足。3どちらともいえない。2少し不満。1かなり不満